

# 吹田市埋蔵文化財発掘調査報告集 1

都呂須遺跡第 8 次調査

神境町遺跡第 1 次調査

吹田操車場遺跡第 3 次・第 4 次調査

平成22 (2010) 年 3 月

吹田市教育委員会

## 序

吹田市では、これまでに埋蔵文化財に関わる保護事業として数々の発掘調査を行ってきました。その発掘調査の多くは、建築工事や造成工事などの開発行為を契機としたものであり、そうした開発に伴う発掘調査では、残念ながら多くの場合、調査終了後は工事等によって遺跡は消失してしまうのが実状です。このことから、発掘調査では遺跡の図面や写真を取り、記録によって遺跡の内容を保存するという作業を行います。そして、現地での発掘調査の終了後は、そこで得た資料を整理して、最終的に報告書の刊行をもって遺跡の記録を公にすることで、一連の調査が完了することになります。

本市においても、現地での発掘調査を終えた後は、資料の整理を行い、報告書の刊行に努めております。本書は、こうした資料の整理がついた都呂須遺跡・神境町遺跡・吹田操車場遺跡での発掘調査についてまとめたものです。本書が吹田の歴史を知る一助となれば幸いです。

平成22(2010)年3月

吹田市教育委員会  
教育長 田口省一

# 例 言

1. 本書は、吹田市内において実施した下記の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。  
吹田市内本町2丁目794-5 都呂須遺跡（通算第8次調査）  
吹田市南高浜町82-1・2 神境町遺跡（通算第1次調査）  
吹田市芝田町他 吹田操車場遺跡（通算第3次・第4次調査）
2. 現地における発掘調査に係る調査経費は工事事業者の負担による。
3. 現地における発掘調査は、吹田市立博物館文化財保護係田中充徳・堀口健二・増田真木・賀納章雄が担当し、本文の執筆は、第1章・第4章を賀納、第2章を堀口、第3章を増田が行った。
4. 図中の方位は磁北を示し、標高はT. P.（東京湾標準潮位）を示す。
5. 遺物実測図の縮尺は、土器・瓦を1/4、銭貨を1/2とした。また本文中の遺物番号は、遺跡ごとに実測図・図版ともに統一した。
6. 調査に当たっては、北野弘氏、原田眞三氏、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、独立行政法人都市再生機構をはじめ地元の方々には多大なご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。
7. 発掘調査および整理作業には以下の方々の参加を得た。  
佐藤健太郎、花崎晶子、秋山芳恵、今西加奈、大西文代、小川里美、小田尚幸、鴨野有佳梨、木船安紀子、高井明美、谷真理子、林裕子、林田健一郎、丸岡亨

# 目 次

第1章	位置と環境	1
第2章	都呂須遺跡第8次発掘調査	3
第3章	神境町遺跡第1次発掘調査	26
第4章	吹田操車場遺跡第3次・第4次発掘調査	40

## 挿図目次

第1図	周辺の主要遺跡分布図	2
第2図	都呂須遺跡発掘調査地周辺図	3
第3図	調査区配置図	4
第4図	土層断面図	5
第5図	遺構平面図	6
第6図	各セクション断面図	8
第7図	S E 61平面・断面図	10
第8図	S K 16平面・断面図	11
第9図	ピット平面・断面図	12
第10図	各遺構出土遺物	14
第11図	S E 2 出土遺物	15
第12図	S X 1 出土遺物	15
第13図	S E 61出土遺物	16
第14図	S K 16出土遺物	16
第15図	遺物包含層出土遺物	17
第16図	遺構時期別概念図	19
第17図	調査地点位置図	26
第18図	調査区平面図	27
第19図	土層断面図	28
第20図	G 1 平面図	30
第21図	G 1 遺構断面図	32
第22図	調査区 (G 2 ~ G 10) 平面図	33



第23図	出土遺物 (1) .....	35
第24図	出土遺物 (2) .....	36
第25図	出土錢貨 .....	37
第26図	吹田操車場遺跡発掘調査地点 .....	40
第27図	P S D17調査区平面図 .....	42
第28図	P S D17調査区土層断面図 .....	42
第29図	P S D19調査区平面図 .....	42
第30図	P S D19調査区土層断面図 .....	42
第31図	P S D10調査区平面図 .....	43
第32図	P S D10調査区土層断面図 .....	43
第33図	人孔E調査区平面図 .....	43
第34図	人孔E調査区土層断面図 .....	43
第35図	人孔C調査区平面図 .....	43
第36図	人孔C調査区土層断面図 .....	43
第37図	第3次調査出土遺物実測図 .....	44
第38図	第4次調査区平面図 .....	45
第39図	第4次調査区土層断面図 .....	46
第40図	第4次調査区遺構平面図 .....	47
第41図	第4次調査出土遺物実測図 .....	48

## 図版目次

図版 1	都呂須遺跡 1 (調査区全景)	図版 8	神境町遺跡 1 (調査状況)
図版 2	都呂須遺跡 2 (検出遺構)	図版 9	神境町遺跡 2 (出土遺物)
図版 3	都呂須遺跡 3 (発掘調査風景)	図版10	吹田操車場遺跡第3次調査 1
図版 4	都呂須遺跡 4 (土器・錢貨)	図版11	吹田操車場遺跡第3次調査 2
図版 5	都呂須遺跡 5 (陶磁器)	図版12	吹田操車場遺跡第3次調査 3
図版 6	都呂須遺跡 6 (瓦)	図版13	吹田操車場遺跡第4次調査 1
図版 7	都呂須遺跡 7 (陶磁器・鉄製品・自然遺物など)	図版14	吹田操車場遺跡第4次調査 2

## 第1章 位置と環境

吹田市は、大阪府の北部に位置する。南は大阪市と接するが、その市境にほぼ沿うような形で安威川・神崎川が北東から南西に向けて流れている。市域の南側は、主に神崎川や淀川などの氾濫によって形成された平野部が広がり、市域北部は千里丘陵が占めており、市域の北と南とでは対照的な地形となる。

吹田市内において千里丘陵は、標高が80m以下のなだらかな丘陵地となり、吹田市出口町付近がちょうど丘陵の南端部となる。平野部については、千里丘陵南端部付近を境にして東側を安威川低地、西側を神崎川低地として区分されるが、J R吹田駅付近から南側一帯には、縄文海進時に形成したとされる吹田砂堆が広がり、平野部においては微高地として存在する。また、安威川低地側において丘陵寄りの一帯では、河川の氾濫等による軟弱な堆積物ではなく、千里丘陵の土質に似た比較的締まった地盤がみられる地点がある。こうした地点は、千里丘陵起源の土砂が供給されて堆積したのではないかと考えられる。

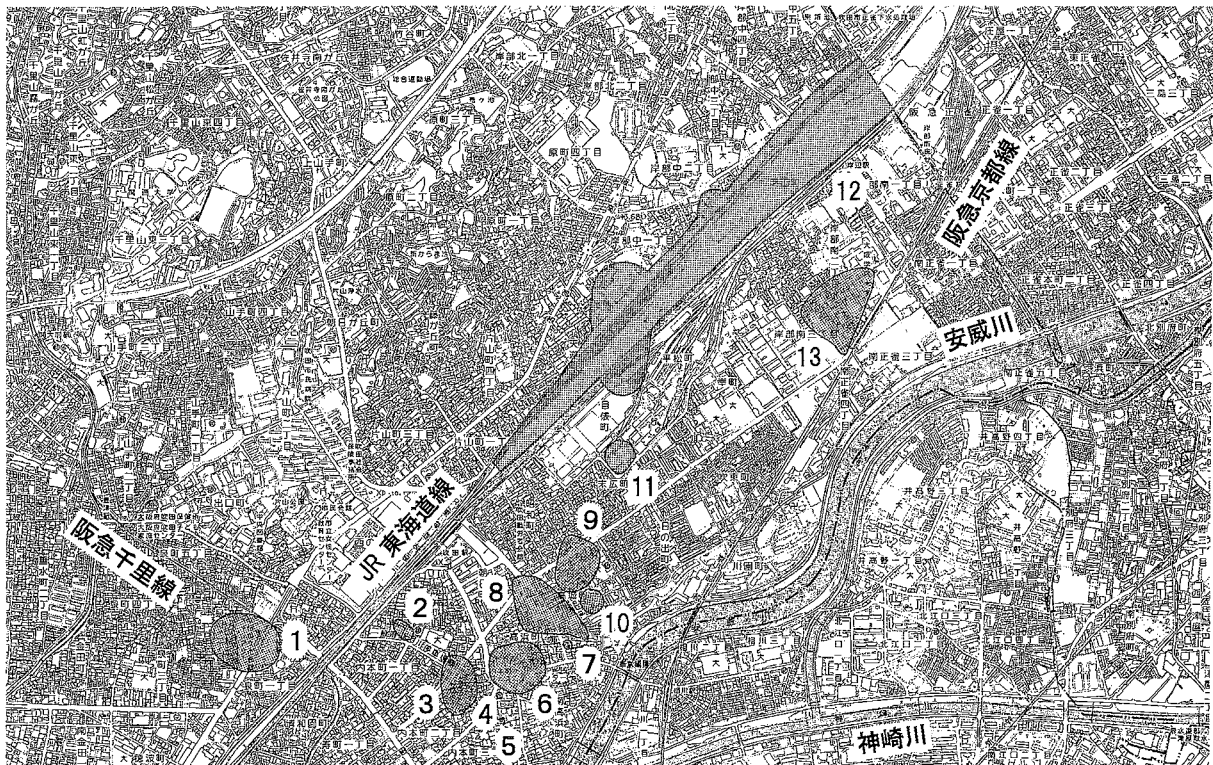
本書は、都呂須遺跡・神境町遺跡・吹田操車場遺跡の3遺跡における発掘調査について報告するものであるが、都呂須遺跡と神境町遺跡については吹田砂堆上に位置し、吹田操車場遺跡はかつての吹田操車場跡地を中心にJ R東海道線の吹田駅の東方から岸辺駅付近一帯にかけて広がり、安威川低地側においては丘陵寄りに位置している。

都呂須遺跡と神境町遺跡が位置する吹田砂堆上には、他に高浜遺跡、宮之前遺跡、宮之前遺跡B地点、浜の堂遺跡などの遺跡が展開するが、吹田砂堆は低地部においては標高5mを越す微高地ということもあり、比較的古くから人々の活動があったようである。高浜遺跡では吹田市内では数少ない縄文時代中期の船元式土器の破片が出土している。また、奈良時代末における淀川と三国川間の開削によって、平安時代以降、吹田は西国と京都とを結ぶ水上交通の中継地点となり、高浜付近が船泊まりの地として栄えた。そして、吹田砂堆上の遺跡をみると、これまでの発掘調査では主に中世の遺構・遺物が多く確認されている。高浜遺跡では4次にわたる発掘調査を実施しているが、その中心となる時期は中世のものであり、中でも第1次調においては旧護国寺の室町時代に遡る伽藍跡を確認している。都呂須遺跡は、これまでに9次にわたる発掘調査を行っているが、ここでも中世の集落に関連する遺構・遺物が多く確認されている。また、神境町遺跡においても本書で報告する発掘調査が初めてのものとなるが、中世を中心とする資料を多く得ている。

吹田砂堆の東側には安威川低地が広がるが、この低地上に位置する高城B遺跡はちょうど吹田砂堆との境目付近に広がり、吹田砂堆が地山層として確認される地点もある。ただし、高城B遺跡では、千里丘陵の土質に似た締まった地盤が地山層として広い範囲で認められ、そのような地点で古くは縄文時代の石器を検出し、以降弥生時代～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。さらに、安威川低地側における遺跡においては、このような締まった地盤を地山層として比較的浅い深度で遺構・遺物が認められるものが多い。例えば、高城遺跡や目俵遺跡、

中ノ坪遺跡などがあり、これらの遺跡では主に弥生・古墳時代、平安時代・中世を中心とした資料を得ているが、注目されるのは、高城遺跡・目依遺跡でナイフ形石器等の旧石器、中ノ坪遺跡で縄文草創期の有舌尖頭器が出土していることである。これらの遺跡の標高は概ね4～6mであり、位置的には河川氾濫等の影響を受けやすい環境にあったといえるが、浅い深度で旧石器・縄文草創期の遺物の出土があったという点で、これらの地点は完新世以降の河川氾濫等の影響をさほど受けることなく比較的安定した地盤であり、これらの地点でみられる締まった地山層の形成も更新世にまでさかのぼる可能性が考えられる。

さて、この安威川低地側においては吹田操車場遺跡が展開する。吹田操車場遺跡は、先述の高城B遺跡や高城遺跡などよりも千里丘陵寄りに広がり、現標高は6～13mとなる。その範囲はJR東海道線に沿う形で2km以上の距離で広がる。広範な遺跡であるため、ここで地山層となる土層は一様ではないが、これまでの発掘調査では、吹田操車場遺跡は安威川低地と区分される地域に位置するものの、河川氾濫等による土砂堆積の広がりには顕著には認められず、沖積低地という様相はなく、千里丘陵の土質と似た締まった土層が地山層として広くみられる。そして、そうした地点において遺構・遺物が確認される場合が多い。また、吹田操車場遺跡においても旧石器が出土しており、締まった地山層が更新世までさかのぼる可能性を示唆している。



1. 豊嶋郡条里遺跡 2. 浜の堂遺跡 3. 都呂須遺跡 4. 宮之前遺跡 5. 宮之前B遺跡 6. 高浜遺跡 7. 神境町遺跡  
8. 高城B遺跡 9. 高城遺跡 10. 吹田城跡推定地 11. 目依遺跡 12. 吹田操車場遺跡 13. 中ノ坪遺跡

第1図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1/30,000)

## 第2章 都呂須遺跡第8次発掘調査

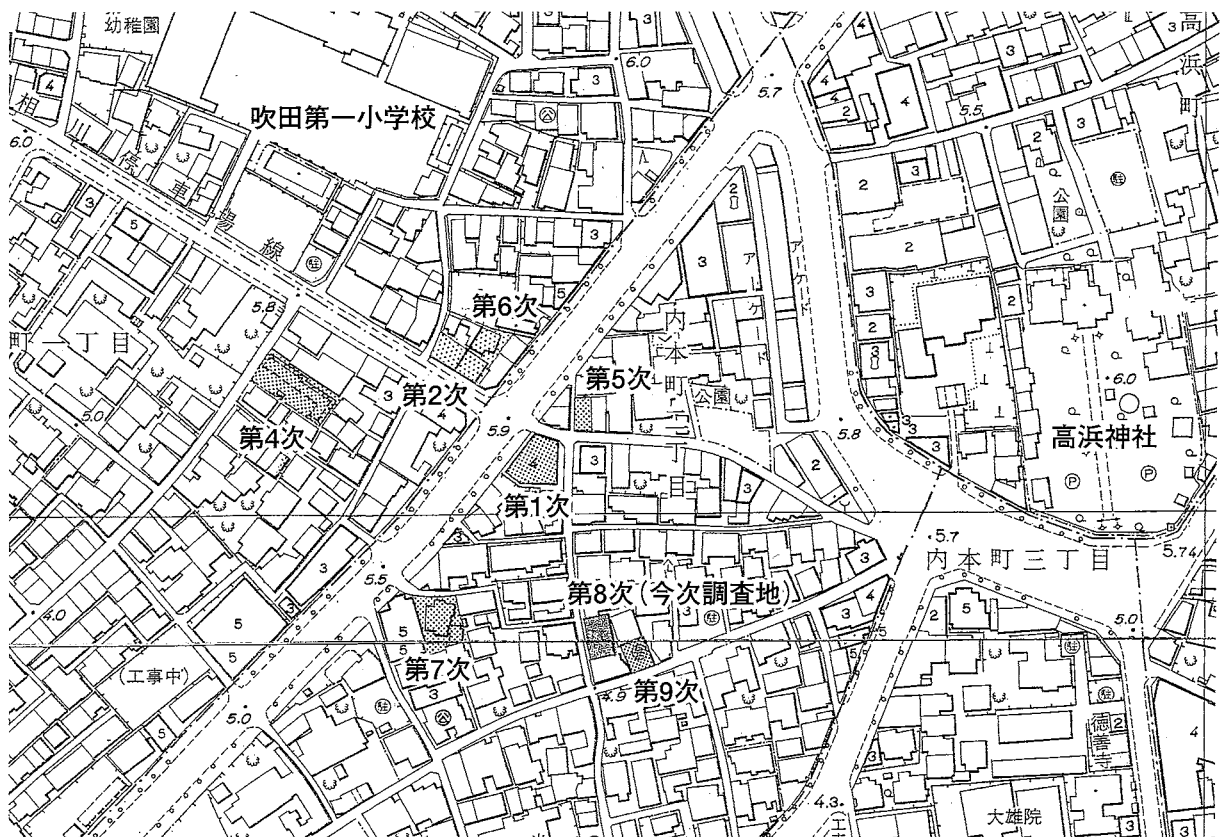
### 1. 都呂須遺跡の既往調査

都呂須遺跡は、昭和30年代後半以降に工事現場から弥生土器片や瓦器片などが出土した事により、その存在が知られるところとなった。昭和39（1964）年には、十三・高槻線の下水管埋設工事中に、一個体に復元可能な弥生時代中期後半の弥生土器長頸壺が出土している〔吹田市1981〕。

その後、都呂須遺跡では開発等に伴い、試掘・発掘調査等が継続的に行なわれてきた。その主な成果を見ると、昭和56（1981）年度の第1次調査では、鎌倉時代に機能していた東西方向に走向する溝と、江戸時代（18～19世紀代）の井戸2基・土坑・ピット、柵列、溝など中世と近世の2時期にわたる遺構を検出し、瓦器碗・皿、土師器皿・鍋・羽釜、須恵器捏鉢、白磁碗、青磁碗、竈、古代瓦などの中世遺物と、陶磁器碗・皿・土鍋、堺焼播鉢などの近世遺物が出土している〔吹田市1989〕。

平成4（1992）年の第2次調査では、室町時代の廃棄土坑と思われる大型土坑から、舶載品の青磁・白磁が出土したほか、獣骨やバイ貝・ホラ貝などの貝殻などがまとまって出土している。また鎌倉時代に比定される溝の主軸方位が、旧吹田地域で知られている島下郡条里ではなく、垂水地域の豊嶋郡条里の方位に近いことが確かめられた。

平成7（1993）年の第6次調査では、中世の遺構・遺物に混じって、古墳時代の土師器小型丸底壺・高杯などが出土している。



第2図 都呂須遺跡発掘調査地周辺図（数字は調査次数 S=1/3,000）

平成9（1997）年の第7次調査では、中世の大小の土坑・ピット群と、これを区画するような東西方向に走向する大溝1条を検出している〔吹田市1998〕。

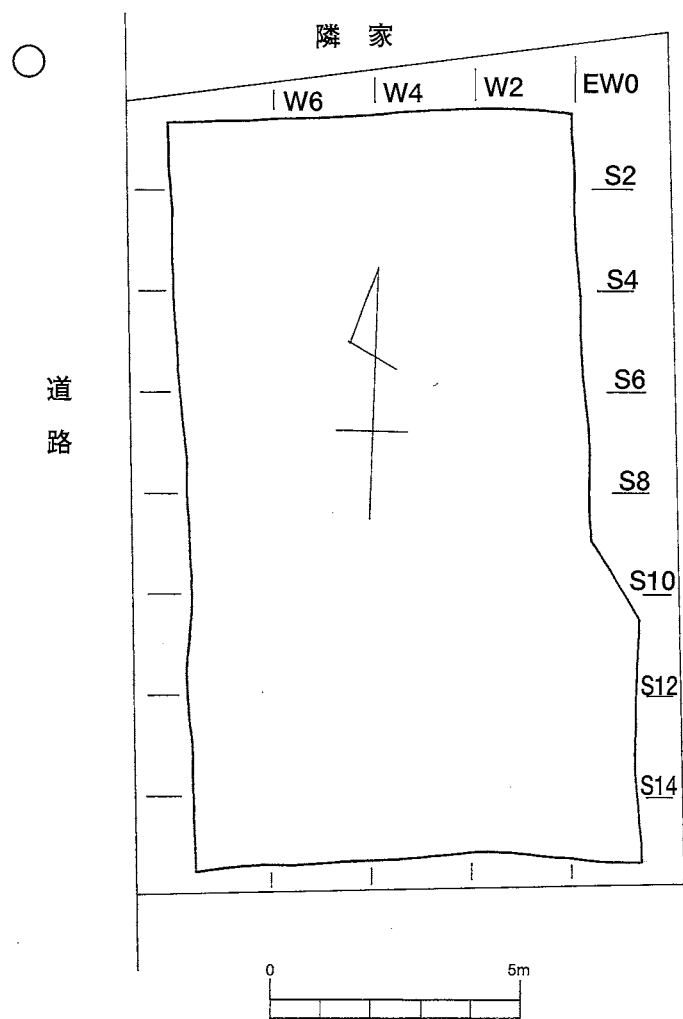
このように都呂須遺跡は、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが知られるようになった。

【参考文献】

- 吹田市教育委員会 1989「都呂須遺跡の発掘調査」『文化財紀要』2
- 吹田市教育委員会 1998「都呂須遺跡の発掘調査」『平成9年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
- 吹田市史編さん委員会 1981『吹田市史』第8巻 吹田市役所

2. 調査の経過

今回の発掘調査は、都呂須遺跡の包蔵地内において予定された共同住宅の建築工事に伴い実施したものである。先ず平成9（1997）年9月3日に、当該地内において2×2mの試掘坑を2箇所（T1、T2）設定し、確認調査を行なった。その結果、遺物包含層と中世のピット、近世の落込み等を検出し、土師器皿などの鎌倉時代から室町時代にわたる遺物包含を確認した。



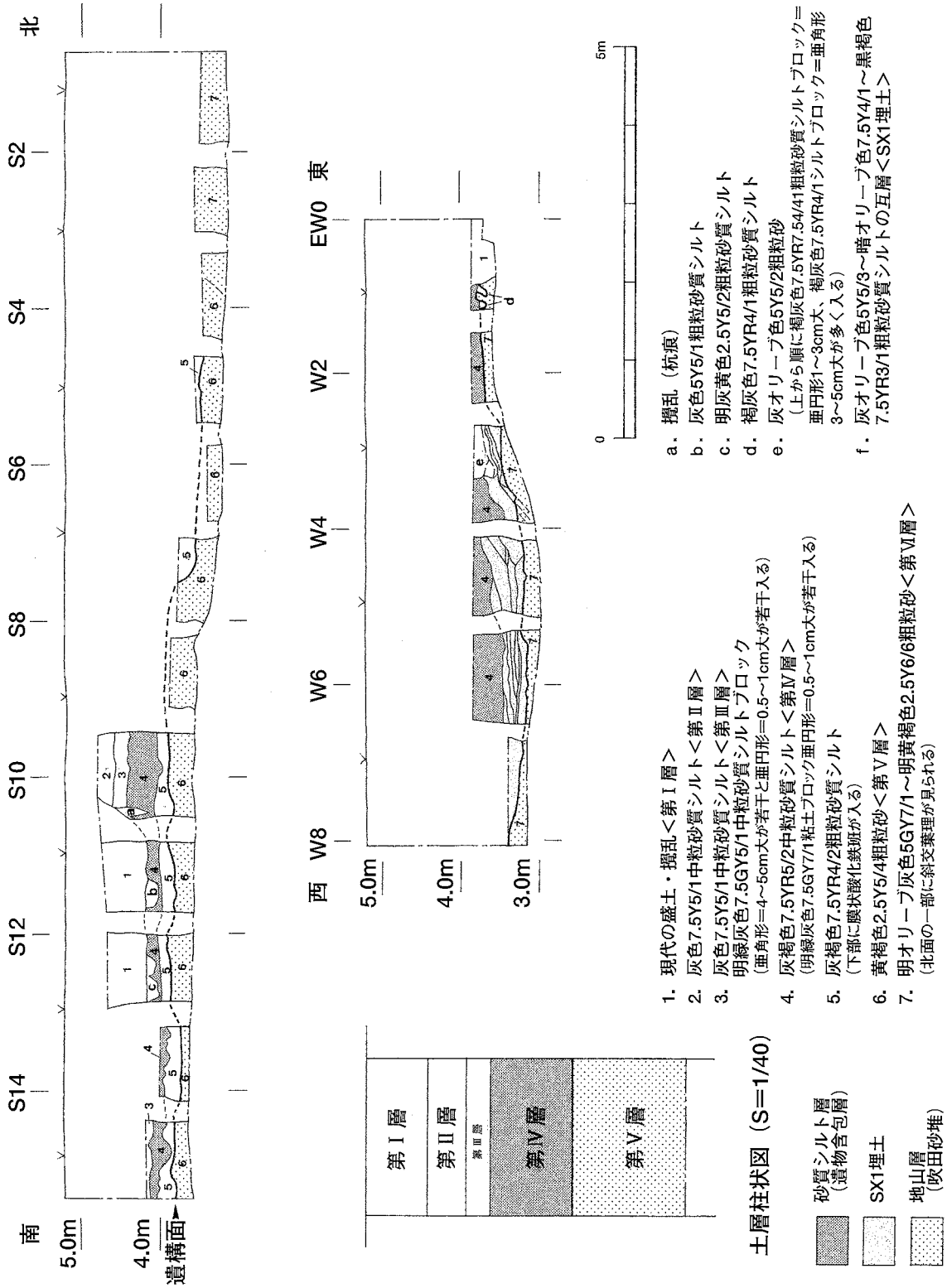
第3図 調査区配置図

このことから予定される建築工事が着工された場合遺構・遺物等が破壊されると判断されたため、事業者と協議を行ない、遺跡の破壊の恐れのある部分について調査を実施することとなった。

発掘調査は同年10月6日～24日の間に実施した。発掘調査開始に際しては、調査区の東北隅に設定した任意の基準杭から2mメッシュで地区割りを行い、東西方向に西に向かってW2、W3…、南北方向に南に向かってS2、S3…とし、地区設定を行なった。調査区は予定建物内に合わせて設定し、東西8.6m×南北15m、面積は128㎡である。

調査区の設定後、現代の盛土・攪乱層は重機を使って掘り下げ、それより下層は人力により注意深く掘削した。そして遺物包含層を





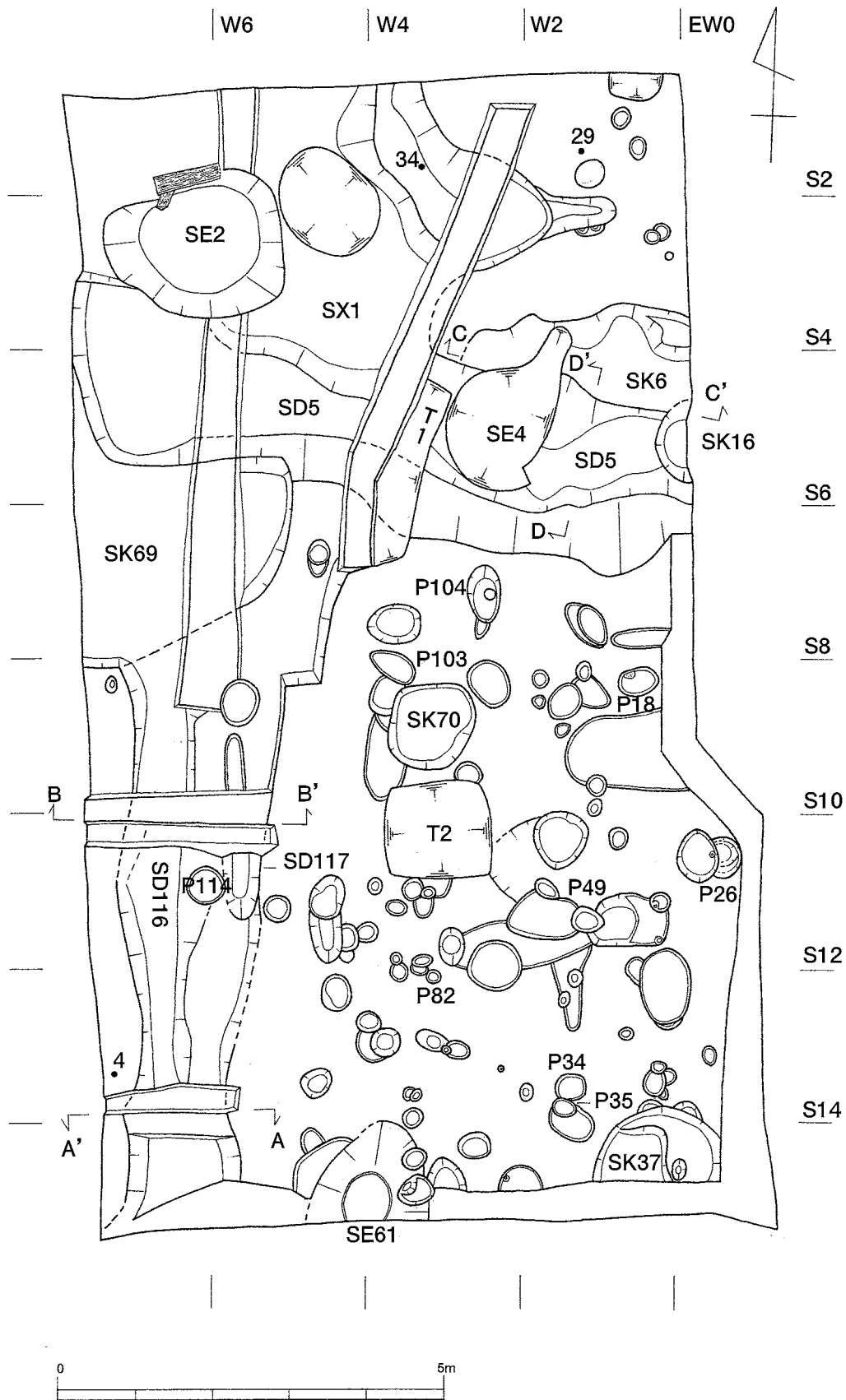
第4図 土層断面図

掘削した後、地山面上において遺構を検出した。検出遺構および遺物の出土状況などについては詳細に観察し、写真撮影や図面の作成などによる記録作業を行なった。

### 3. 調査の成果

#### (1) 基本層序

調査地の現地表面の標高は、概ね5.3m (T.P.値) である。調査区内の基本的な層序を、ま



第5図 遺構平面図 (数字のみは出土遺物番号)

とめて以下に記す。土層観察に際しては、土色は『新版標準土色帖』を使用し、粒径区分はアメリカ法によった。

第Ⅰ層：現代の盛土層である。

第Ⅱ層：灰色7.5Y 5/1 中粒砂シルト層。明緑灰色（7.5GY 7/1）シルト・ブロック（亜角形 = 4～5 cm大が若干と、亜円形=0.5～1 cm大）が多く入る。ほぼ水平に堆積。少量の遺物を包含する。

第Ⅲ層：灰褐色7.5Y R 5/2 中粒砂質シルト層。明緑灰色（7.5GY 7/1）粘土ブロック（亜円形=0.5～1 cm大）が若干入る。ほぼ水平に堆積。少量の遺物を包含する。

第Ⅳ層：灰褐色7.5Y R 4/2 粗粒砂質シルト層。下部に赤褐色（5Y R 4/8）膜状鉄斑が入る。北西方向に大きく傾斜して堆積する。中世から近世にかけての遺物をやや多く包含する。

第Ⅴ層：黄褐色2.5Y 5/4～明オリーブ灰色5GY 7/1 粗粒砂層。無遺物層で地山層である。淘汰された粗粒砂を主体とする砂層（吹田砂堆）で、この砂層が調査区内の遺構面ベース層を形成する。これより上層の堆積層は砂質シルトが主体の軟質な地質である。

第Ⅵ層：明オリーブ灰色5GY 7/1～明黄褐色2.5Y 6/6 粗粒砂層。同じく無遺物層で地山層である。北壁断面の一部には、弱い斜交葉理が見られた。

#### 【参考文献】

小山正忠・竹原秀雄 1987『新版標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本彩色研究所

坂幸恭 1993『地質調査と地質図』 朝倉書店

#### (2) 検出遺構と遺構出土遺物

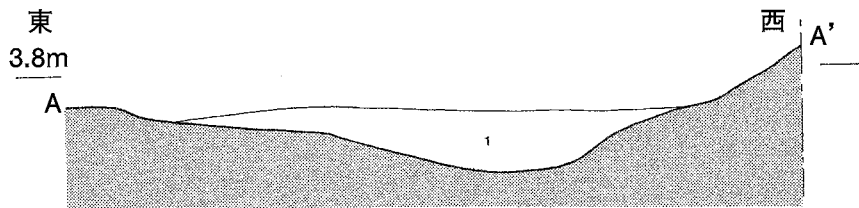
発掘調査では第Ⅴ層上面をベース層とし、中世と近世の2時期にわたる遺構を検出した。遺構面は、現地表面から約1.5～1.7mの深さ、標高約3.6～3.8mの高さである。検出遺構は、井戸2基、埋め桶1基、土坑およびピット100基、溝6条、落ち込み1箇所を数える。

検出遺構には一連の番号を付け、その前にSD：溝、SE：井戸、SK：土坑、P：ピット、SX：不明・その他などの分類記号を付記する。以下、順を追って各遺構と主な遺構出土遺物を記した。

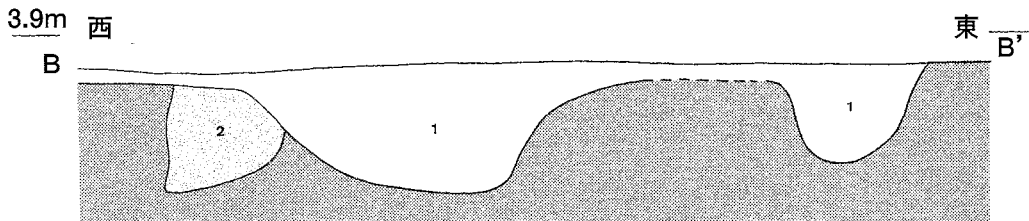
##### [SD116] (第6・10図)

南北方向に走向する溝で、さらに調査区南側へと展開し、北側は近世のSX1に重複される。幅1.35～1.8m、深さ20～30cmを測り、断面U字形を呈し、底面は北側へ僅かに傾斜する。方位は磁北より約1.5°ほど西に傾く。埋土は淘汰の悪い粗粒砂質シルトが主体で、流水痕は認められなかった。

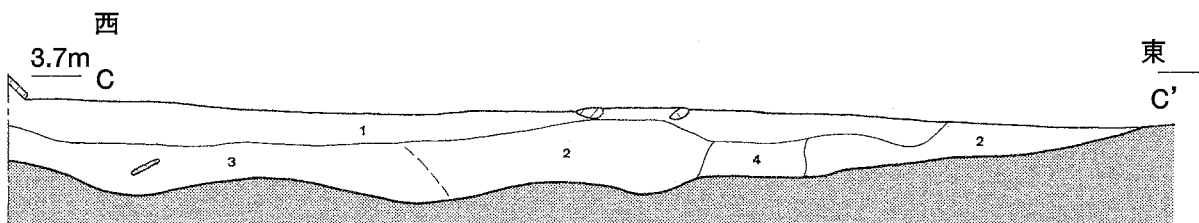
埋土中から土師器杯(1)、土師器皿(2～4)、瓦器、瓦質土器羽釜、青磁皿、磁器、銭貨(66)などが出土した。遺物の下限年代は13世紀後半～14世紀前半である。銭貨(66)は鑄に



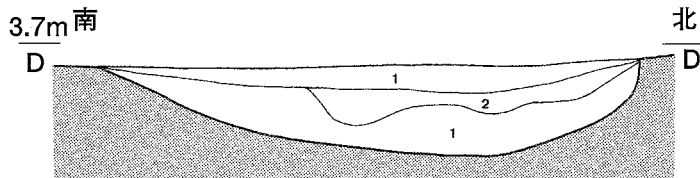
SD116 1. 褐灰色7.5YR4/1粗粒砂質シルト



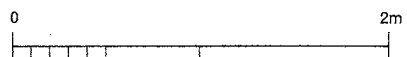
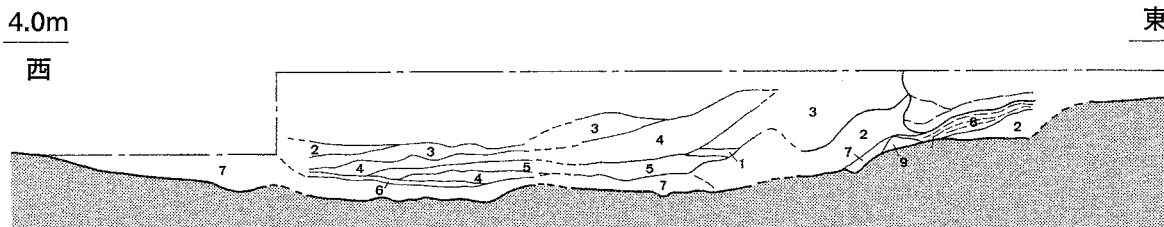
SD116・117 1. 褐灰色7.5YR4/1粗粒砂質シルト 2. 褐灰色7.5YR4/1粗粒砂質シルト  
(灰オリーブ色7.5Y5/3粗粒砂ブロック  
垂円形=2~3cm大が入る)



SK6 1. 褐灰色7.5YR4/1シルト質粗粒砂 2. 褐灰色7.5YR5/1粗粒砂質シルト  
3. 明黄褐色2.5Y6/6粗粒砂  
(褐灰色7.5YR4/1粗粒砂質シルト・ブロック  
垂円形=3~5cm大が密に入る)  
4. 褐灰色10YR4/1シルト質中粒砂



SD5 1. 褐灰色7.5YR4/1シルト質粗粒砂  
2. 黒褐色7.5YR3/1シルト質粗粒砂



SX1 (北壁断面より作成)

- |                       |                                           |                                            |
|-----------------------|-------------------------------------------|--------------------------------------------|
| 1. 褐灰色7.5YR5/1中粒砂質シルト | 4. 2.に明緑灰色7.5GY7/1粘土ブロック<br>垂円形=1~3cm大が入る | 7. 黒褐色7.5YR3/1粗粒砂質シルト                      |
| 2. 褐灰色7.5YR4/1粗粒砂質シルト | 5. 3.に明緑灰色7.5YR7/1<br>粘土ブロック角形=1cm大が入る    | 8. 褐灰色7.5YR5/1粗粒砂質シルト<br>~明黄褐色2.5Y6/6粗粒砂互層 |
| 3. 灰オリーブ色5Y5/3シルト質中粒砂 | 6. 暗オリーブ灰色7.5Y4/1粗粒砂質シルト                  | 9. 褐灰色5YR5/1粗粒砂                            |

第6図 各セクション断面図

よる腐食が著しく、錢銘は不明である。

[SD5] (第6・10図)

東西方向に走向し、さらに調査区外の東方へと展開する。幅1.1～1.8m、深さは最深部で34cmを測る。底面は西側へと低くなり、最大高低差は40cmを測る。埋土は砂質シルトが主体で、流水痕は見られない。

埋土中から須恵器甕、瓦器、瓦質土器羽釜(5)・火鉢・甕、備前焼播鉢(6・7)・甕、青花染付皿(8・9)、丸瓦(10)、肥前系陶磁器、木材などが出土した。遺物の下限年代は18世紀後半以降であるが、中世の遺物を多く含む。

6・7は備前焼播鉢である。6は6条1組、7は最大10条1組の播目をそれぞれ内面に施す。8・9は中国明代の青花染付皿である。ともに外面に唐草紋、内面に鳳凰の尾部と思われる呉須絵を描く。10は中世の丸瓦で、端部の一部に漆喰が付着する(図中網掛け部)。

[SK6] (第6図)

平面形が不定形で東西2.62m×南北1.0m以上、深さ26cmを測る、浅い土坑もしくは落ち込みである。南半部はSD5に切られる格好で重複する。

埋土中より土師器、瓦器、瓦質土器、近世瓦、シジミの貝殻(75)などが出土したが、いずれも図化困難な小片であった。

[P103] (第10図)

平面形が楕円形を呈し、東西60cm×南北34cm、深さ11cmを測る浅いピットである。

埋土中から土師器、青磁椀(12)、近世瓦などが出土した。

[P34] (第10図)

平面形がやや楕円形を呈し、東西42cm×南北32cm、深さ17cmを測る浅い土坑である。埋土中より土師器皿(13・14)などが出土した。遺物の下限年代は12世紀末～13世紀中頃である。

13は土師器皿である。口縁部をつまみみ上げ、口縁端部を面取りする。

[P35] (第10図)

平面形が楕円形を呈する東西30cm×南北24cm、深さ95cmを測る小型のピットである。

埋土から土師器皿(15・16)、瓦器椀(17)、釘状鉄製品などが出土した。遺物の下限年代は13世紀中頃～14世紀前半である。

17は和泉型瓦器椀で、全体の約80%が残存する。内面に粗い平行線状の暗文を施す。

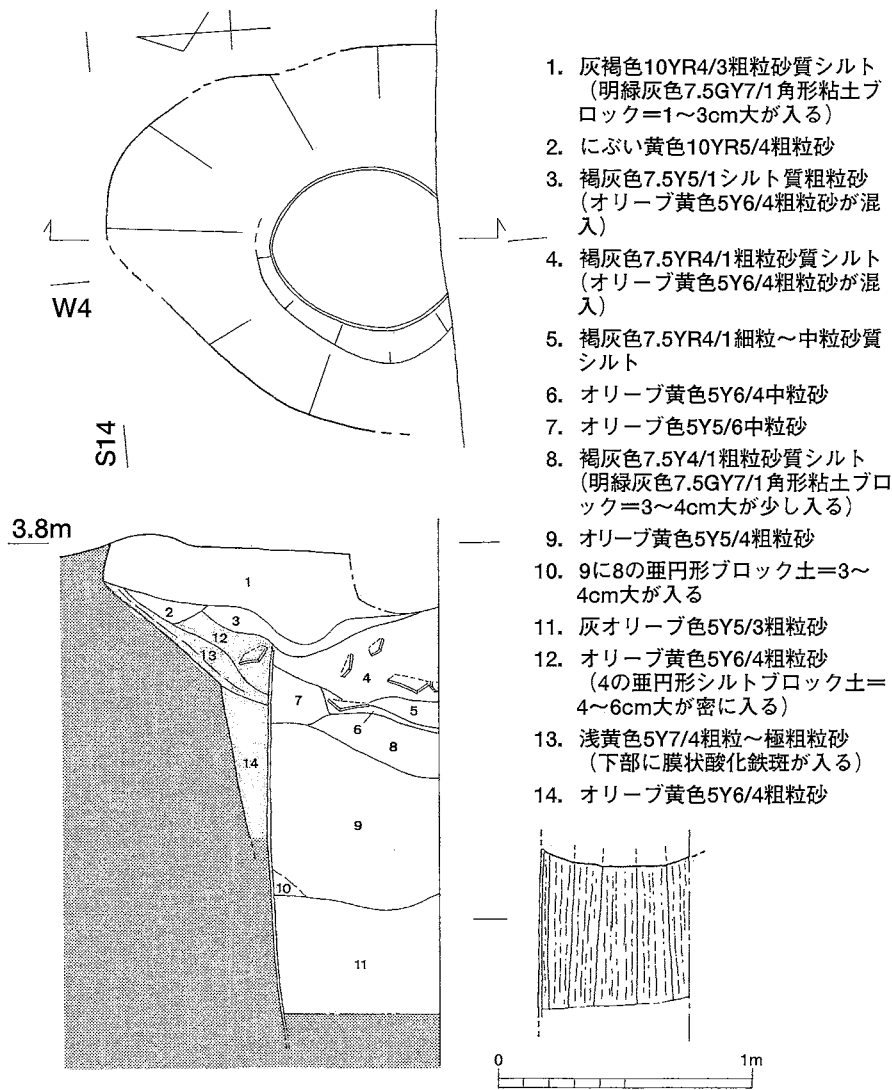
[SE2] (第11図)

平面形がやや楕円形を呈する素掘りの土坑で、東西2.3m×1.92m、深さ1.32mを測る。湧水は見られなかったが、土坑上端部に井戸枠の可能性のある板材2枚が折り重なって出土した。

埋土中から瓦質土器羽釜(18)・甕(19)、備前焼播鉢・甕、堺焼播鉢(20・21)、磁器筒椀(22・23)・椀(24)、鉢(35)、軒丸瓦(26)などが出土した。遺物の下限年代は、19世紀前半である。

26は蓮華紋軒丸瓦の瓦当部である。古代末～中世初頭の所産である。23・24・25は近世の磁





1. 灰褐色10YR4/3粗粒砂質シルト  
(明緑灰色7.5GY7/1角形粘土ブロック=1~3cm大が入る)
2. にぶい黄色10YR5/4粗粒砂
3. 褐灰色7.5Y5/1シルト質粗粒砂  
(オリーブ黄色5Y6/4粗粒砂が混入)
4. 褐灰色7.5YR4/1粗粒砂質シルト  
(オリーブ黄色5Y6/4粗粒砂が混入)
5. 褐灰色7.5YR4/1細粒~中粒砂質シルト
6. オリーブ黄色5Y6/4中粒砂
7. オリーブ色5Y5/6中粒砂
8. 褐灰色7.5Y4/1粗粒砂質シルト  
(明緑灰色7.5GY7/1角形粘土ブロック=3~4cm大が少し入る)
9. オリーブ黄色5Y5/4粗粒砂
10. 9に8の垂円形ブロック土=3~4cm大が入る
11. 灰オリーブ色5Y5/3粗粒砂
12. オリーブ黄色5Y6/4粗粒砂  
(4の垂円形シルトブロック土=4~6cm大が密に入る)
13. 浅黄色5Y7/4粗粒~極粗粒砂  
(下部に膜状酸化鉄斑が入る)
14. オリーブ黄色5Y6/4粗粒砂

器である。25は肥前系磁器の染付蛇ノ目凹形高台鉢で、外面に唐草、内面に柳と水面と思われる呉須絵を描く。高台内に輪状の砂目痕が残る。24は波佐見系のいわゆる「くらわんか茶碗」で、体部外面に草花紋を描く。

[S X 1]

(第6・12図)

調査区の北側から西側へと展開する、不定形の落ち込みである。北西方向に向かって大きく傾斜し、東側から最深部までの高低差は95cmを測る。東側の肩しか検出していないが、北壁断面の観察により、最深部から西側

第7図 SE 61平面・断面図

に向かって立ち上がる様子が認められた事から、本来は幅広の溝状であった可能性もある。但し形状から判断して、人工的な大溝というよりも、自然の谷地形ではないかと考えられる。

埋土から土師器皿 (27~31)、土製竈 (32)、瓦器、瓦質土器羽釜 (34・35)・甕、備前焼茶入れ (33)・播鉢・甕、堺焼播鉢、肥前系磁器碗 (36)、京焼系陶器碗 (37)、瓦質井戸筒 (40)、軒平瓦 (38)、軒丸瓦 (39)、近世瓦、石、木材などが出土した。

遺物の下限年代は18世紀後半~19世紀前半以降であるが、中世の遺物を多く含むのが特徴である。

32は土製竈で、掛口から底にかけての部分と思われる。33は備前焼小型壺で、茶入れと思われる。37は京焼系碗で、高台は露胎となる。38は軒平瓦の瓦当部で、唐草紋様である。39は軒丸瓦の瓦当部で、巴紋の珠紋部である。40は瓦質井戸筒である。凸面 (井戸筒外面) にヘラの背のクサビ形の凹凸による滑り止めが施されている。滑り止めは、平面形が鋭角的なクサビ形で、断面形は逆台形である。

[S E 61] (第7・13図)

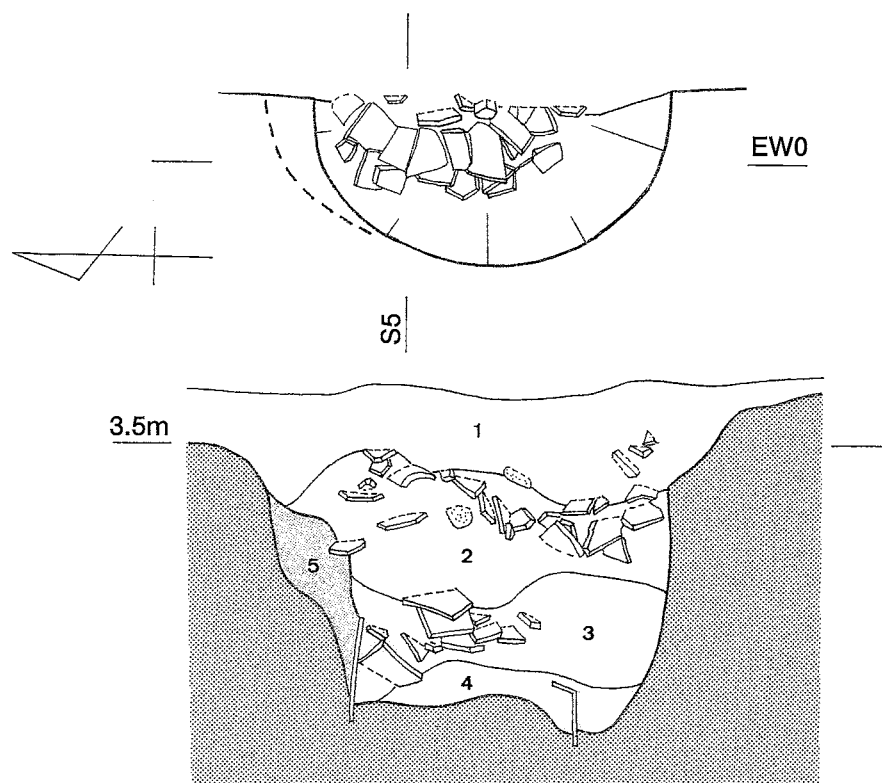
平面形が円形の木組井戸で、掘り方の一部は調査区南側へと展開する。未完掘のため湧水層を確認していないが、形状や深さから判断して井戸と思われる。掘り方は東西1.52m×南北1.32m以上を測る。井戸筒内径は、東西62cm×南北65cm以上を測る。深さは遺構面から1.84m地点まで掘削したが、工事予定深度を越える事と、安全面を考慮したため未完掘である。井戸筒は、縦長の板材を平面形が円形になるように組合せていたが、半ば腐植土と化して辛うじて残存している状態であり、取り上げる事はできなかった。

埋土は、褐灰色砂質シルトの井戸筒埋土上層と地山とほぼ同質の井戸筒埋土下層、それに裏込め土の3群に層序区分できる。断面観察によると、北側から掘り方を崩すようにして、一気に埋め戻された様子が窺える。

井戸筒埋土から瓦器、磁器鉢 (41・42)、棧瓦軒平瓦 (44)、瓦質井戸筒 (45・46)、平瓦、漆喰片 (73)、釘状鉄製品、裏込め土から近世の丸瓦 (43) などが出土した。

当遺構埋土からは、特に近世瓦と漆喰片の出土が顕著であった。また瓦質井戸筒が出土しているが、当井戸筒は縦板組であることから、出土した瓦質井戸筒は当井戸に使用されたものではなく、別の井戸用に使用されていたものが、不要となり当井戸に投棄されたものと思われる。

41・42は肥前系磁器鉢である。41は染付蛇ノ目凹形高台鉢で、内面に呉須絵を描き、高台内面に裏銘を記す。42は平面形が八角形の深鉢 (八角鉢) である。外面に山水画の呉須絵を描く。43・44は近世瓦である。43は丸瓦である。釘孔を穿ち、内面は幅広の工具による内叩き痕である。44は棧瓦の軒平部分で、軒紋様は唐草紋と思われる。45・46は瓦質井戸



1. 浅黄色7.5Y7/4粗粒砂～褐灰色7.5YR5/1シルト質粗粒砂ブロック土
2. 灰オリーブ色5Y5/2粗粒砂
3. 灰色7.5Y4/1シルト質粗粒砂
4. 灰オリーブ色5Y6/2粗粒砂
5. オリーブ色5Y5/4中粒砂

第8図 SK16平面・断面図 (瓦出土状況)

筒である。ともに凸面（井戸筒外面）に、ヘラの背によるクサビ形の凹凸（滑り止め）が施されている。45の滑り止めは、平面形がバナナ形で、断面はV字形を呈し、法面に四角い突出部がある。46の滑り止めは、平面形は先端部が丸味をおびたクサビ形で、断面形は逆台形を呈し、底部に四角い突出部がある。

[S K16] (第8・14図)

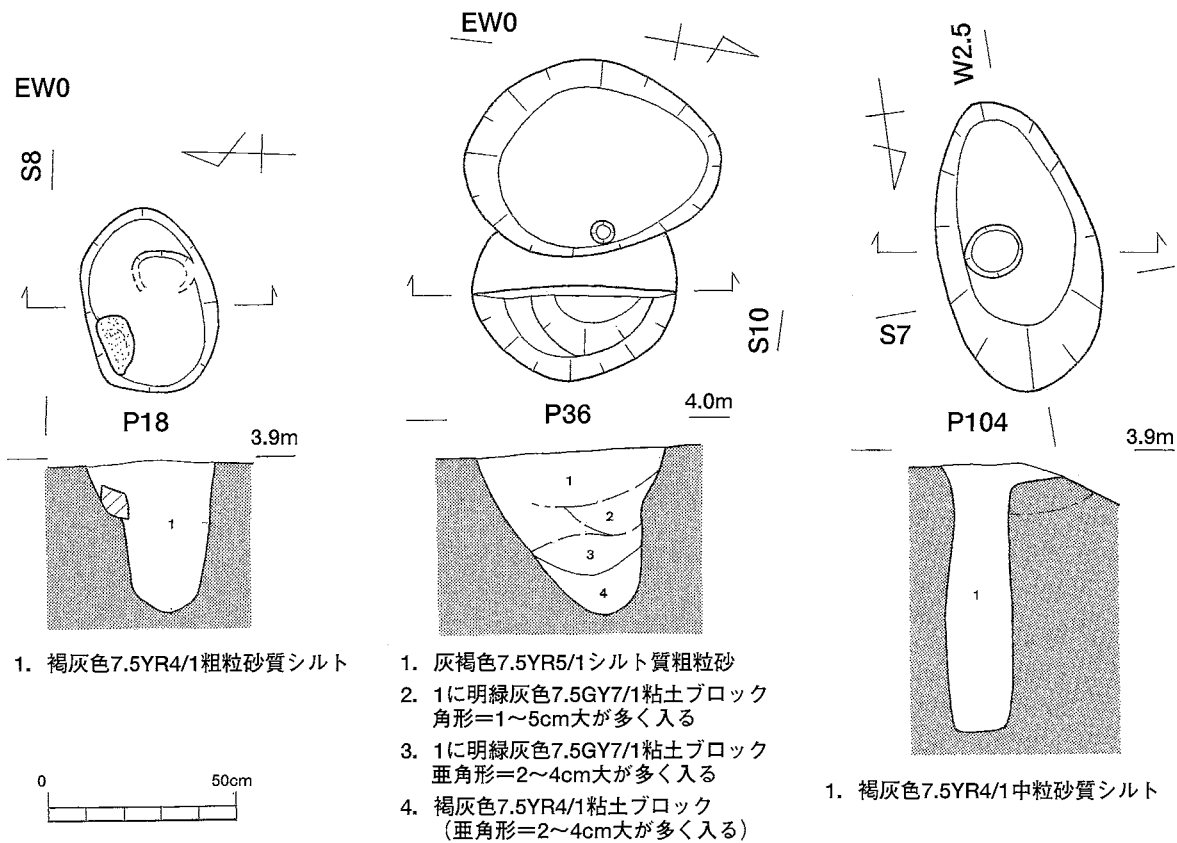
円形の木組土坑で、調査区東側へと展開する。東壁断面に木枠の痕跡が腐植土となって残存していたが、底面が湧水層に達していないことから、埋め桶と考えられる。なお底板は確認できなかった。掘り方は上端部分で東西44cm以上×南北95cm、深さは最深部で85cm、桶の内径は59cm（東壁断面で観察）を測る。桶は、半ば腐植土と化して辛うじて残存している状態であり、取り上げる事はできなかった。

埋め桶内の埋土上層～中層からは、近世の陶磁器類や、二次的に火を受けて赤色に変色した多量の近世瓦の他、土師器皿、瓦器、軒平瓦（47・48）などの中世の遺物が出土した。遺物の下限年代は18～19世紀代である。

47・48は中世の軒平瓦の瓦当部である。ともに瓦当紋様は立浪紋で、顎貼り付け技法である。48は瓦当紋様部に離れ砂痕が残る。

[P18] (第9図)

平面形が楕円形を呈し、東西32cm×南北60cm、深さ41cmを測る。法面の南側中程でテラス状となり、長径16cm大の自然石が1個出土した。この石は、柱の根固め石とも考えられる。



1. 褐灰色7.5YR4/1粗粒砂質シルト

- 1. 灰褐色7.5YR5/1シルト質粗粒砂
- 2. 1に明緑灰色7.5GY7/1粘土ブロック  
角形=1~5cm大が多く入る
- 3. 1に明緑灰色7.5GY7/1粘土ブロック  
亜角形=2~4cm大が多く入る
- 4. 褐灰色7.5YR4/1粘土ブロック  
(亜角形=2~4cm大が多く入る)

1. 褐灰色7.5YR4/1中粒砂質シルト

第9図 ピット平面・断面図

埋土中からの遺物の出土は一切無かった。

[P 36] (第9図)

西半部をP 35に重複されるが、平面形が円形を呈し、東西40cm以上×南北55cm、深さ44cmを測る。断面形はややオーバーハング気味で、柱の抜き取り痕の可能性が考えられる形状である。埋土はブロック土で充填されており、一挙に埋め戻されたと思われる。

埋土中から土師器、瓦器などが出土したが、いずれも凶化困難な小片であった。

[P 104] (第9図)

平面形が楕円形を呈し、東西42cm×南北78cm、深さ70cmを測る。検出当時は断面形が浅い皿状と認識していたが、断ち割りの結果、径15～18cmを測るほぼ寸胴で平底の小穴であった。柱根などは遺存していなかったが、柱穴の可能性も考えられる。

埋土中から土師器皿、瓦器などが出土したが、いずれも凶化困難な小片であった。

[S K 37]

平面円形で東西1.63m×南北1.0m以上、深さは最深部で24.5cmを測り、さらに調査区南側へと展開する。埋土中から土師器、須恵器、瓦器などの小片が出土したが、いずれも凶化困難な小片であった。

[S K 69] (第10図)

セクションベルトを挟んだ東側で検出したため、調査時には1個の土坑と認識していたが、S X 1の一部の可能性もある。検出部の平面形は半円形を呈し、東西0.72m以上×南北1.84m、深さ38cmを測る。

埋土中から土師器皿、瓦器、瓦質土器、備前焼播鉢(11)、近世瓦などが出土した。中世の遺物が多いが、下限年代は近世である。11は備前焼播鉢である。残存部分で見ると、5条1組の播目を内面に施す。

[S K 70]

平面形が隅丸方形を呈する東西1.1m×南北1.12m、深さ31cmの土坑である。埋土中から土師器皿、瓦器、青磁椀、釘状鉄製品(70・71)などが出土した。

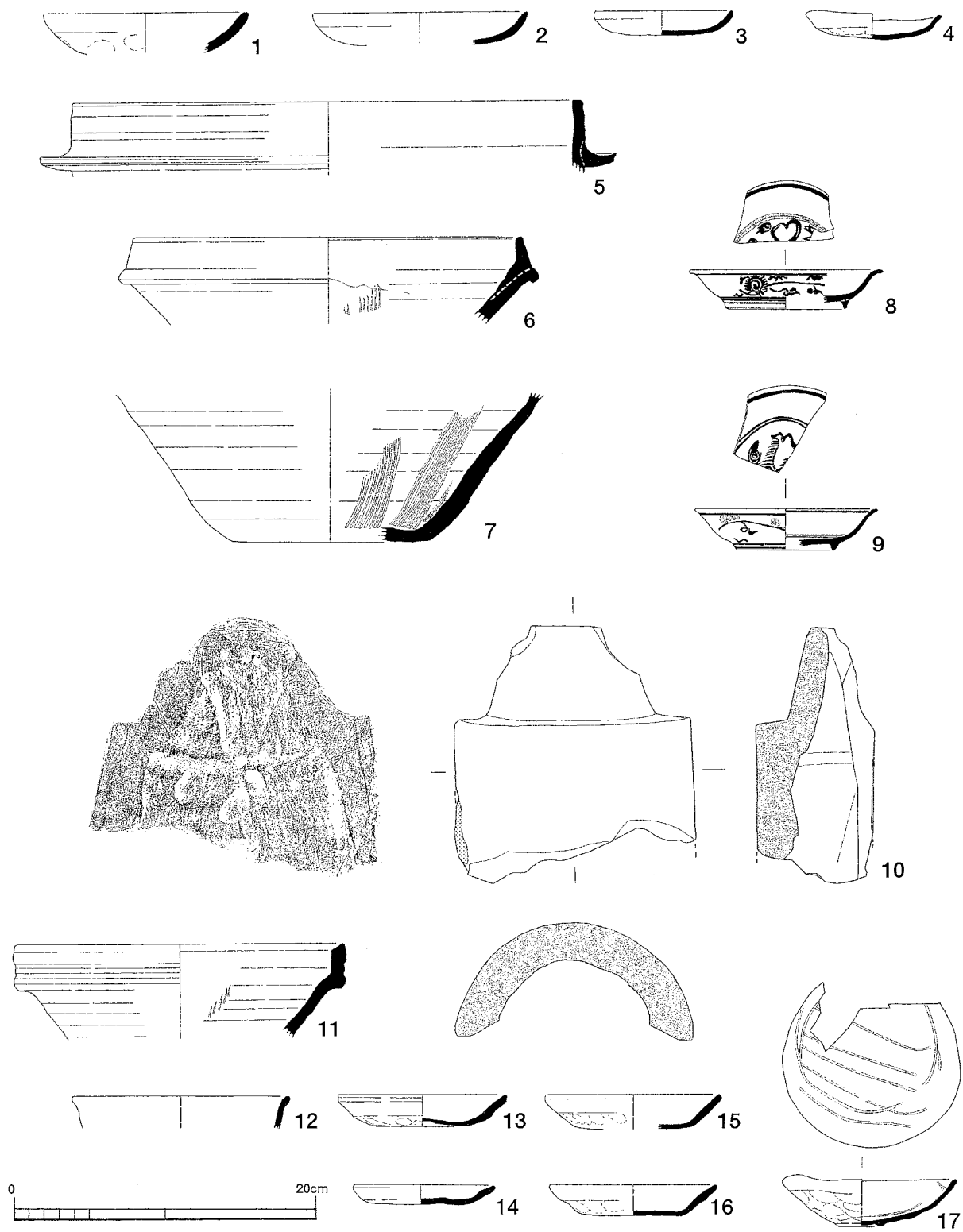
[S E 4]

S E 4は近代のコンクリート製井戸である。平面図中では、攪乱坑の表示となっている。井戸を埋め立てた際の土中から丹波焼播鉢、釘状鉄製品(68)、小型哺乳類と思われる獣骨の下顎(74)などが出土した。

### (3) 遺物包含層出土の遺物 (第15図)

発掘調査では、遺構埋土中および遺物包含層中から、コンテナ箱17箱におよぶ遺物が出土した。その内訳は、古墳時代中期から江戸時代にかけての土器・陶磁器類・瓦類・銭貨・獣骨や貝殻などの自然遺物など多岐にわたった。

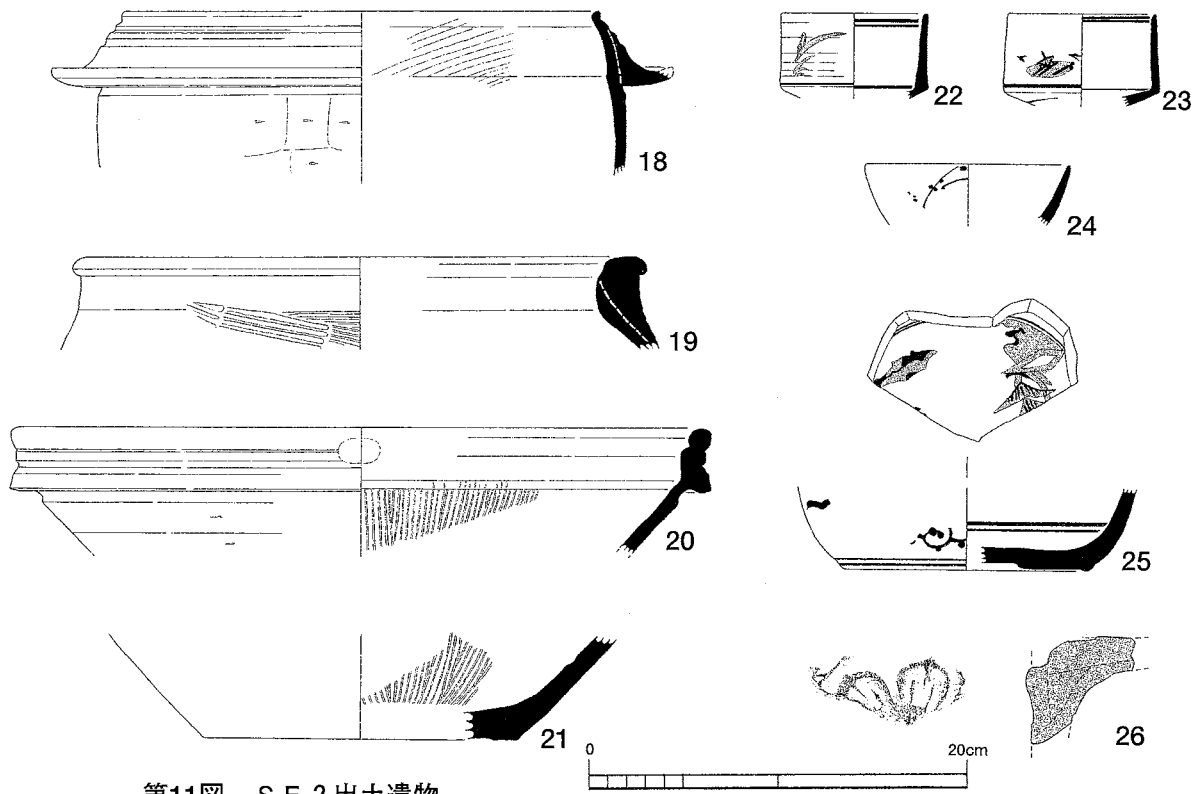
以下では遺物包含層中出土遺物のうち、特徴的な遺物を中心に記述する。なお各包含層の下



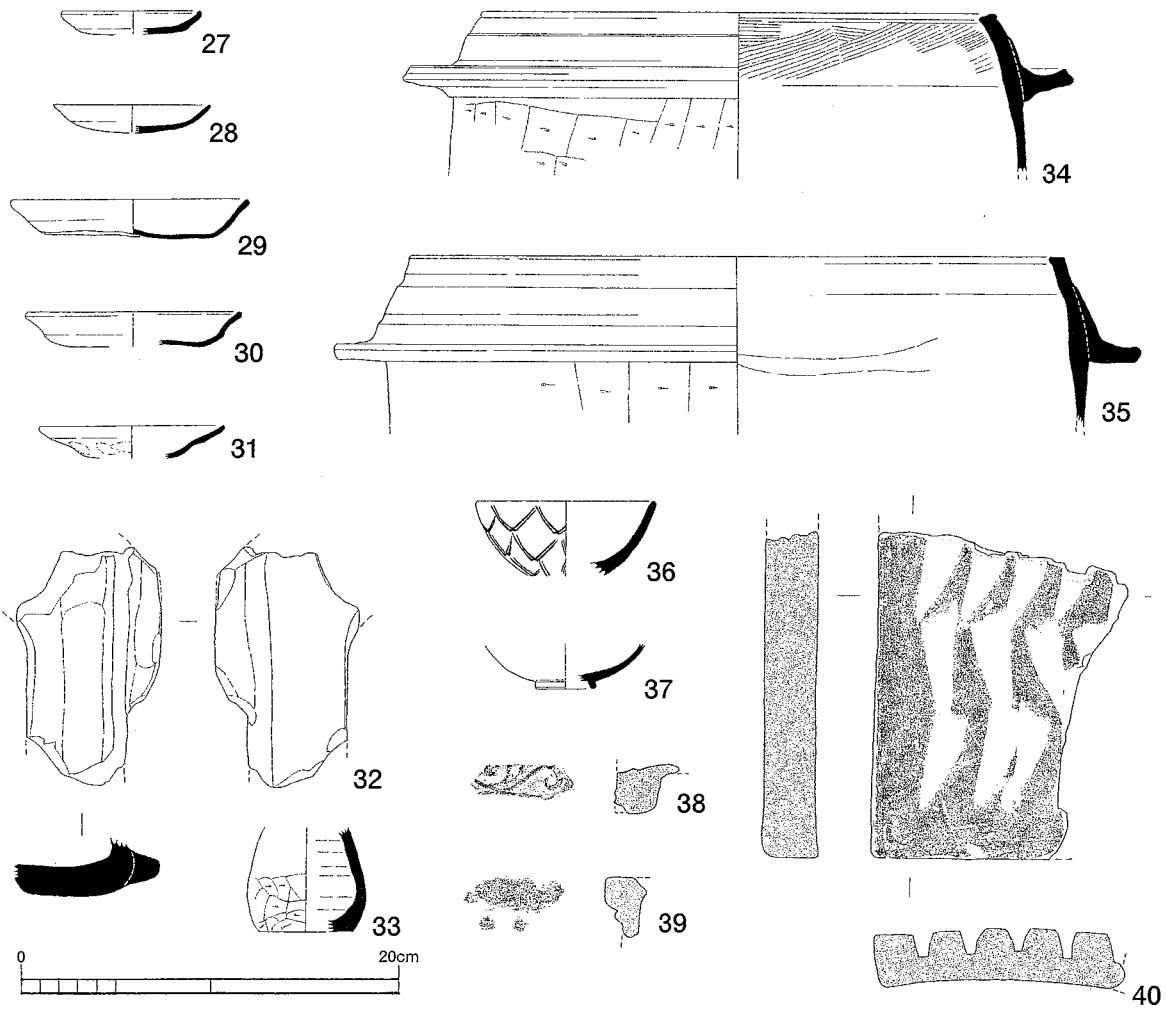
1~4 : SD116    5~10 : SD5    11 : SK69    12 : P103    13・14 : P34    15~17 : P35

第10図 各遺構出土遺物

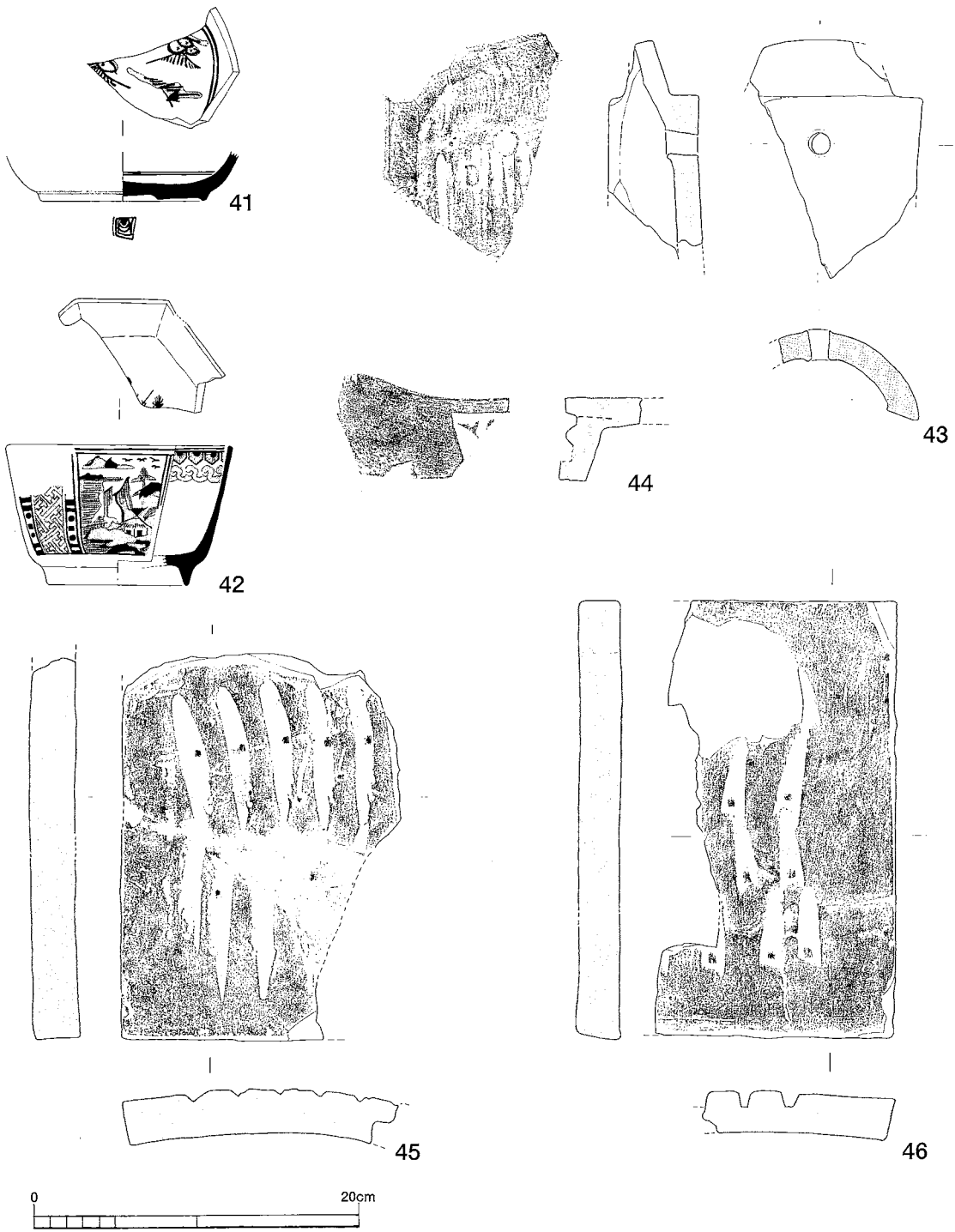




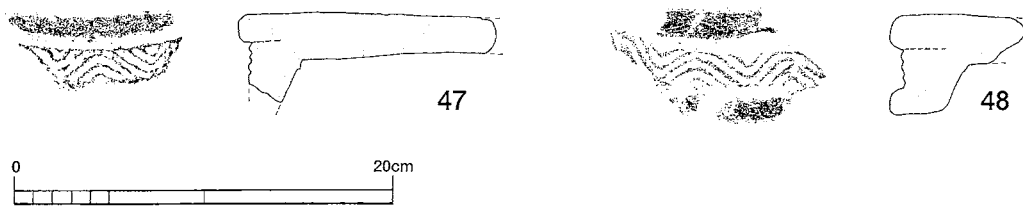
第11图 SE 2 出土遺物



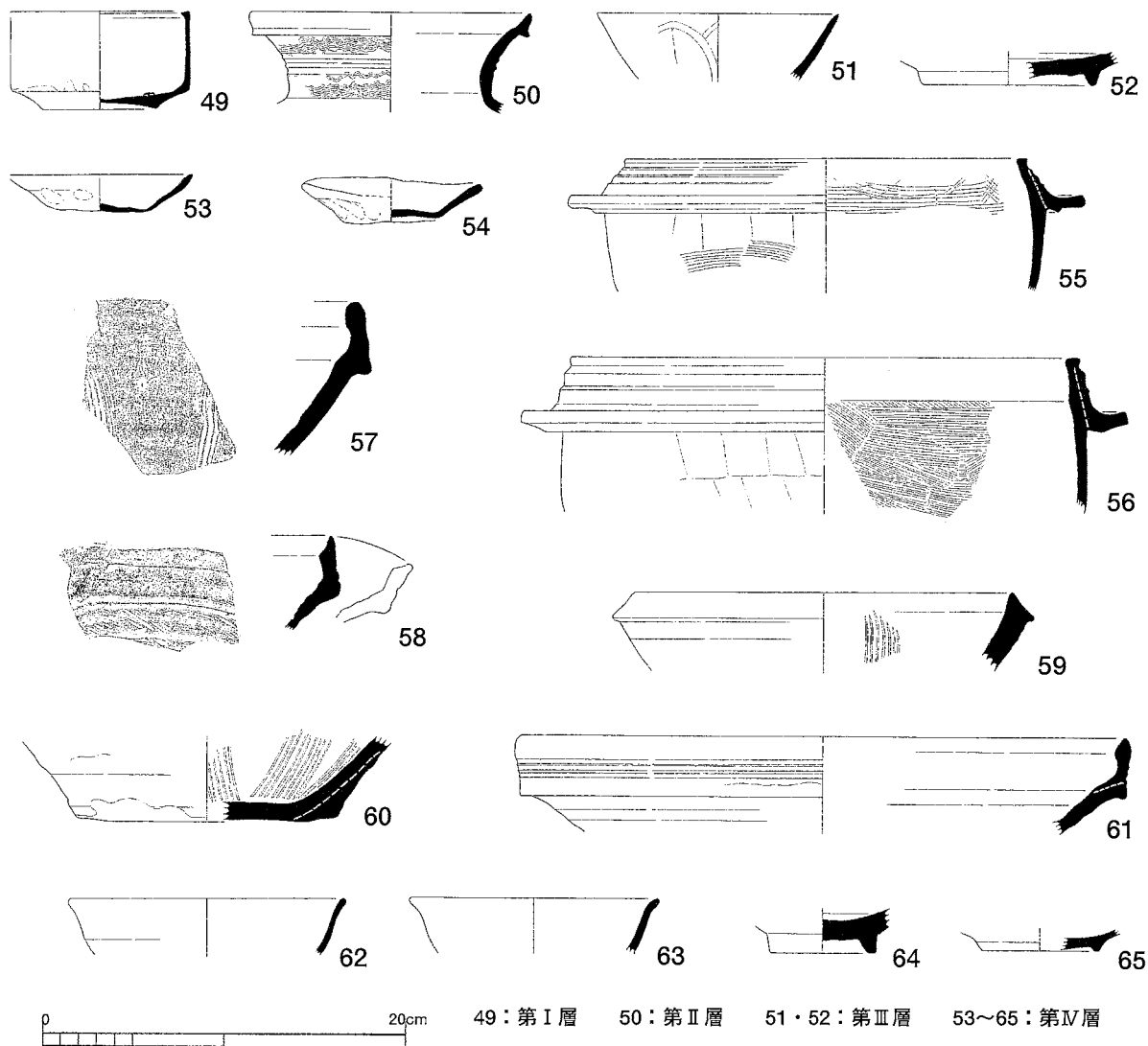
第12图 SX 1 出土遺物



第13图 SE61出土遺物



第14图 SK16出土遺物



第15図 遺物包含層出土遺物

限年代は、第I層が現代、第II層～第IV層は近世後期である。

[第I層]

瀬戸焼香炉（49）、瓦質井戸筒、磁器人形（67）などが出土した。49は瀬戸焼香炉である。内面底部に胎土目が1個残る。本来は底部に、短い3本の脚が付いていたと思われる。67は釣りをする男性の磁器人形である。型合わせ成形により、本来は別パーツで釣り竿が付いていたと思われる。

[第II層]

須恵器壺（50）などが出土した。50は陶邑窯編年のON46型式に相当する、初期須恵器の範疇に入るものである。頸部に9条1組の櫛描き波状紋を2列に施す。

[第III層]

青磁碗（51）、陶器皿（52）などが出土した。

51は中国元代の青磁碗である。体部外面に蓮弁紋を施す。52は唐津焼と思われる陶器皿であ

る。高台は削り高台で、高台内面と茶溜りは露胎となる。畳付に胎土目の痕が1箇所残る。

#### [第Ⅳ層]

土師器皿(53・54)、瓦質土器羽釜(55・56)、備前焼播鉢(57～61)、青磁椀(63・63)、白磁椀(64)、瀬戸焼椀(65)などが出土した。図化可能な遺物の下限年代は16世紀後半であるが、これらの遺物は二次堆積遺物と考えられる。

57～61は備前焼播鉢である。57・58は5条1組、59は7条1組、60は9条1組の播目をそれぞれ内面に施す。64は中国北宋代の白磁椀で、内面底部に圈線を巡らす。65は瀬戸焼椀である。高台は削り高台で、畳付も含めて全面に施釉する。

#### 【参考文献】

- 江戸遺跡研究会(編) 2001『図説江戸考古学研究事典』 柏書房
- 尾上実 1985「大阪南部の中世土器—和泉型瓦器椀—」『中近世土器の基礎研究』創刊号 日本中世土器研究会
- 大橋康二 1989『肥前陶磁』(考古学ライブラリー55) ニュー・サイエンス社
- 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究』 京都編集工房
- 鋤柄俊夫 1988「畿内における古代末から中世の土器—模倣系土器生産の展開—」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会
- 鋤柄俊夫 1995「大阪府南部の瓦質土器生産(1)」『日置荘遺跡』分析・考察編 (財)大阪府文化財センター
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店
- 中世土器研究会(編) 1995『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 乗岡実 2002『岡山城三之丸曲輪跡』 岡山市教育委員会
- 乗岡実ほか 2004「中世陶器の物流—備前焼を中心にして—」『研究発表資料』 日本考古学協会2004年度広島大会実行委員会
- 橋本久和 1992『中世土器研究序論』 真陽社
- 松井章(編) 2006『動物考古学の手引き』 (独)奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター
- 矢部良明(編) 2002『日本陶磁大辞典』 角川書店

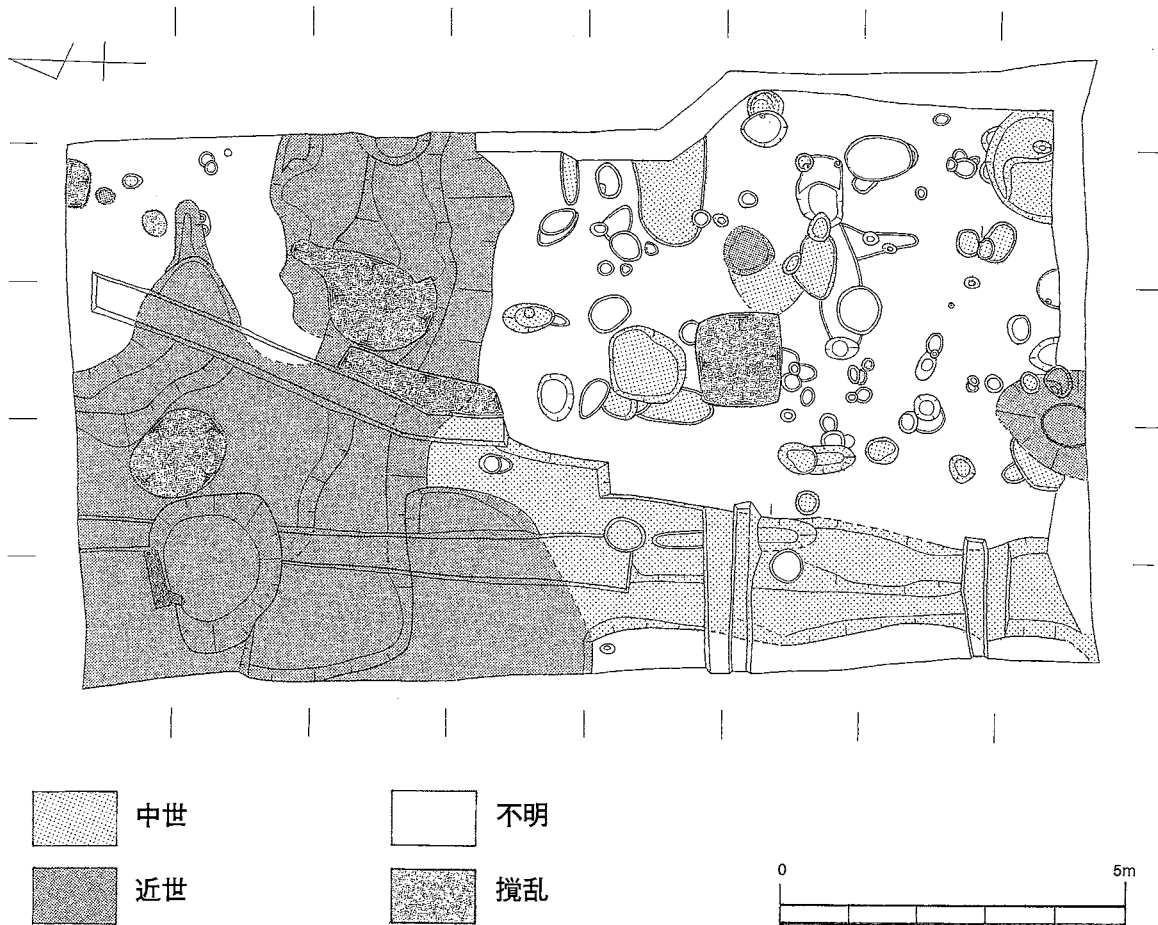
#### 4. まとめ

今回の発掘調査では、同一遺構面上に鎌倉・室町時代と江戸時代の2時期にわたる集落遺構を検出した(第16図)。以下に、時期別の要綱を記す。

#### [中世遺構]

概ね鎌倉～室町時代(13～16世紀代)に比定される。これをさらに微視的に見ると、ピット類は概ね鎌倉時代(13～14世紀代)、土坑・溝は室町時代(15～16世紀代)に細分される。

主に調査区南半部のピット、土坑とSD116がこれに相当し、SD116に区画されるような格好でピット・土坑が集中する。この区画内は周囲よりも地盤高が若干高く、高低差は北側から



第16図 遺構時期別概念図

20cm、西側から16cmを測る。砂堆上を生活面として、微高地上に居住域を営んでいた様子が窺える。

土坑からは、瓦器碗や土師器皿の小片が出土しており、廃棄土坑と考えられる。

ピット群は現時点において、明確に建物や柵列として復元可能なものは見出せないが、P 18・26・104など建物の柱穴を示唆させるものが幾つか見受けられる。またP 26・35・49・82、S K 70からは、釘と思われる鉄製品が出土した。

S D 116の性格については、埋土に水流痕が見られないことに加えて、ベース層が浸透性の高い砂層であることを考慮すると、自然流路や水路などは想定しがたく、これらの溝は居住域の区画溝のような施設の可能性も考えられる。溝の主軸方位は、磁北より約 $1.5^{\circ}$ ほど西へ傾く。吹田砂堆より以西に展開した豊嶋郡条里は、真北から $1\sim 3^{\circ}$ 東に振り、一方、吹田砂堆以東に展開した島下郡条里は、真北から西に $33^{\circ}$ 大きく傾いている。このことから当溝の主軸方位は、豊嶋郡条里の地割に近いとも言える。

また近接する周辺地の既往調査においても、ほぼ真北方位の溝や大型土坑など、同様の遺構の在り方が見られることから、当地の集落形成過程を知るうえで貴重な資料となりうるものである。



### [近世遺構]

概ね江戸時代（18世紀後半～19世紀前半）に比定される。調査区北半部のS X 1、S D 5、S K 6・16、S E 2、S E 61がこれに相当する。後世の削平が著しいためか、井戸や落ち込みなどの掘り込みの深い遺構が検出された。これらの遺構には重複関係（時期差）が存在し、先ずS X 1が埋没した後に、S D 5・S E 2・S K 16などの溝・土坑が掘削されている。

井戸・埋め桶などが検出され、集落が営まれていたことを物語る。S K 16の埋め桶の用途としては、貯水槽・便槽などの可能性が考えられる。

また埋め桶や井戸筒土内から出土した焼けた瓦や漆喰片については、火災に遇い不用となった建築材を井戸に投棄して、火事場の後始末を行なったという理解も可能である。

### [出土瓦]

S E 2から、古代末期の古い意匠を持つ瓦当文様の軒丸瓦（26）、S K 16から立浪紋の軒平瓦（47・48）などの飾り瓦、S D 5から室町時代の丸瓦（10）などが出土した。いずれも近世の遺構埋土中からの出土であり、二次堆積遺物である。これらの遺物は、近隣に中世寺院の存在を示唆させるものである。

ところで今次調査地の東北東、直線距離にして約190mの地点に、室町時代由来の護国寺が存在した（第2図）。昭和63（1988）年に行なった護国寺の発掘調査では、当遺跡S K 16出土と同じ立浪紋の軒平瓦が出土している。今次調査地と護国寺とは距離的にも近いことから、近世の整地土として運ばれた客土の中に、護国寺の瓦が混入していた可能性も考えられる。

# 出土遺物観察表

番号	器種	遺構・層位	残存状況	寸法(㎝)	色調	時期	備考
1	土師器杯	SD 116	口縁部 1/4 残存	口径 13.4 残高 2.6	外) 褐色 7.5YR 8/3 内) 浅黄褐色 7.5YR 8/4 断) 浅黄褐色 7.5YR 8/4	鎌倉時代～室町時代初 (13世紀後半～14世紀中頃)	京都系
2	土師器皿	SD 116	口縁部 1/5 残存	口径 14.2 残高 2.2	外) 浅黄褐色 10YR 8/3 内) 浅黄褐色 7.5YR 8/3 断) 浅黄褐色 7.5YR 8/3	鎌倉時代 (13世紀代)	京都系
3	土師器皿	SD 116	全体 1/2 残存	口径 9.1 残高 1.7	外) 灰白色 10YR 8/2 内) 浅黄褐色 2.5YR 8/3 断) 浅黄褐色 2.5YR 8/3	鎌倉時代 (13世紀前半)	京都系
4	土師器皿	SD 116	完形	口径 8.9 残高 1.7	外) 灰白色 5Y 7/2 内) 淡褐色 2.5YR 8/4 断) 褐色 2.5YR 7/6	鎌倉時代 (13世紀後半～14世紀前半)	京都系
5	瓦質土器羽釜	SD 5	羽根部 1/12 残存	口径 33.3 羽根径 38.2 残高 4.9	外) 青灰色 5PB 5/1 内) 暗紫色 5PB 5/3 断) 暗紫色 5PB 5/1	室町時代 (15世紀後半)	河内・和泉型
6	備前焼播鉢	SD 5	口縁部 1/11 残存	口径 25.6 残高 5.8	外) 赤い 7.5R 4/2 内) 赤褐色 2.5YR 5/4 断) 赤い 褐色 2.5YR 6/4	室町時代 (15世紀代)	6条1組の播目
7	備前焼播鉢	SD 5	底部 1/3 残存	口径 10.3 残高 10.2	外) 紫灰色 5P 5/1 内) 紫灰色 5P 5/1 断) 紫灰色 5P 5/1	室町時代	8～10条1組の播目
8	青花染付皿	SD 5	底部 1/3 残存	口径 12.6 高台径 7.8 残高 2.5	施釉) 青灰色 5B 7/1 裏須) 青灰色 5PB 5/1 断) 灰白色 5N 8/0	中国・明代 (15世紀末～16世紀前半)	貿易陶磁器
9	青花染付皿	SD 5	底部 1/4 残存	口径 12.0 高台径 6.3 残高 2.8	施釉) 青灰色 5B 7/1 裏須) 青灰色 5PB 6/1 断) 灰白色 5N 8/0	中国・明代 (15世紀末～16世紀前半)	貿易陶磁器
10	丸瓦	SD 5	全表 幅 17.2 高 16.0 残高 7.7	全体部高 7.7	外) 灰白色 2.5Y 8/2 内) 灰白色 2.5Y 8/2 断) 灰白色 2.5Y 8/2	室町時代	コヒキ不明 漆喰が付着
11	備前焼播鉢	SK 69	口縁部 1/7 残存	口径 21.8 残高 6.3	外) 灰赤色 7.5R 6/2 内) 暗赤灰色 10R 4/1 断) 暗赤灰色 7.5Y 6/1	室町時代末～安土桃山時代 (16世紀後半)	5条以上1組の播目
12	青磁碗	P 103	口縁部 1/13 残存	口径 14.2 残高 2.1	外) オリーブ 灰白色 5GY 6/1 内) 灰白色 10Y 7/1 断) 灰白色 10Y 7/1	中世	貿易陶磁器
13	土師器皿	P 34	全体 1/4 残存	口径 11.4 残高 2.1	外) 浅黄褐色 10YR 8/3 内) 浅黄褐色 10YR 8/3 断) 浅黄褐色 10YR 7/2	鎌倉時代 (13世紀代)	口縁端部面取り
14	土師器皿	P 34	全体 8割 残存	口径 9.5 残高 1.3	外) 赤い 褐色 7.5YR 7/4 内) 赤い 褐色 7.5YR 7/3 断) 褐色 7.5YR 7/6	鎌倉時代 (12世紀末～13世紀中頃)	口縁端部弱い面取り

番号	器種	遺構・層位	残存状況	寸法 (cm)	色調	時期	備考
15	土師器皿	P 35	口縁部 1/3 残存	口径 11.5 残高 2.3	外) にぶい橙色 7.5YR 7/4 内) にぶい橙色 7.5YR 7/4 断) 橙色 7.5YR 7/6	鎌倉時代 (13世紀中頃～14世紀前半)	京都系
16	土師器皿	P 35	底部 1/3 残存	口径 11.1 残高 2.1	外) にぶい橙色 7.5YR 7/3 内) にぶい橙色 7.5YR 7/4 断) 橙色 7.5YR 7/6	鎌倉時代 (13世紀中頃～14世紀前半)	京都系
17	瓦器碗	P 35	全体約 8割残存	口径 11.7～12.0 底径 2.9～3.1 器高 3.5	外) 灰白色 N 6/0 内) 灰白色 N 7/0 断) 明紫 5P 7/1	鎌倉時代 (13世紀中頃)	和泉型
18	瓦質土器羽釜	SE 2	口縁部 1/9 残存	口径 25.0 底径 28.0 器高 9.1	外) 時書灰 5P B 4/1 内) 時書灰 5P B 4/1 断) 明紫 5P 7/1	室町時代 (15世紀中頃)	河内・和泉型
19	瓦質土器鉢	SE 2	口縁部 1/8 残存	口径 28.2 残高 4.9	外) 灰白色 N 7/0 内) 灰白色 N 8/0 断) 灰白色 N 8/0	室町時代 (15世紀代)	
20	堺焼糟鉢	SE 2	口縁部 1/11 残存	口径 36.5 残高 6.9	外) 褐色 5YR 4/1 内) にぶい赤褐色 2.5YR 5/3 断) 褐色 2.5YR 6/6	江戸時代 (18世紀後半)	
21	堺焼糟鉢	SE 2	口縁部 1/8 残存	口径 16.6 残高 5.5	外) 灰赤色 10YR 4/2 内) 明赤色 2.5YR 5/6 断) 赤色 10R 5/6	江戸時代 (18～19世紀代)	
22	磁器筒碗	SE 2	口縁部 1/5 残存	口径 7.7 胴径 7.9 残高 4.6	施釉) 灰白色 N 8/0 断) 灰白色 N 8/0	江戸時代 (18世紀後半～19世紀前半)	見系磁器 波佐見紋
23	磁器筒碗	SE 2	口縁部 1/5 残存	口径 7.8 胴径 8.2 残高 4.9	施釉) 灰白色 N 8/0 断) 灰白色 N 8/0	江戸時代 (18世紀～19世紀前半)	見系磁器 波佐見紋
24	磁器碗	SE 2	口縁部 1/8 残存	口径 10.8 残高 3.3	施釉) 暗青色 5GB 7/1 断) 暗青色 5GB 4/1	江戸時代 (18世紀代)	見系磁器 波佐見紋
25	磁器鉢	SE 2	底部 1/3 残存	口径 12.8 底径 4.4	外) 明書灰 5GB 7/1～3/1 内) 暗書灰 5GB 4/1 断) 灰白色 N 8/0	江戸時代 (17世紀末～18世紀前半)	見系磁器 波佐見紋 肥前面に柳と水面の具須絵
26	軒丸瓦	SE 2		長 5.9 残幅 11.1 残高 5.5	外) 暗書灰 5B 3/1 内) 灰白色 10Y 8/1 断) 灰白色 10Y 8/1	古代末～中世初	昇蓮華紋
27	土師器皿	SX 1	口縁部 1/2 残存	口径 7.3 器高 1.3	外) にぶい橙色 7.5YR 7/4 内) 浅い橙色 7.5YR 8/4 断) 浅い橙色 7.5YR 7/4 断) 灰黄色 2.5Y 6/2	鎌倉時代 (13世紀後半～14世紀前半)	京都系 口縁部を僅かにつまみ上げる
28	土師器皿	SX 1	口縁部 1/4 残存	口径 8.4 残高 1.5	外) 浅黄褐色 7.5YR 8/3～8/4 内) 浅黄褐色 7.5YR 8/4 断) 浅黄褐色 7.5YR 8/4	鎌倉時代 (13世紀後半～14世紀前半)	京都系
29	土師器皿	SX 1	ほぼ完形	口径 12.0～12.8 器高 2.2	外) 浅黄褐色 2.5Y 7/3 内) 浅黄褐色 10YR 8/3 断) 浅黄褐色 10YR 8/4 断) 浅黄褐色 10YR 8/4	鎌倉時代 (13世紀代)	京都系

番号	器種	遺構・層位	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
30	土師器皿	SX1	口縁部1/4残存	口径11.3 器高1.9	外) 残黄褐色10YR8/3 内) 残黄褐色2.5Y8/3 断) 灰白色2.5Y8/2	鎌倉時代末~室町時代 (14世紀代)	京都系
31	土師器皿	SX1	口縁部1/4残存	口径9.9 残高1.7	外) 残黄褐色7.5YR8/3 内) 残黄褐色7.5YR8/3 断) 灰白色10YR8/4	室町時代 (15世紀後半)	京都系
32	移動式甕	SX1	掛口~底部分	口径7.6 残高12.8 厚さ1.6	外) にぶい黄褐色7.5YR7/6 内) にぶい黄褐色7.5YR7/6 断) にぶい黄褐色7.5YR7/6	古代	
33	備前焼壺	SX1	底部1/6残存	口径5.0 器高6.4 残高5.6	外) 暗赤褐色10YR3/3 内) 暗赤褐色10YR3/3 断) 灰白色N8/0	室町時代	茶入
34	瓦質土器羽釜	SX1	口縁部4/5残存	口径27.8 器高35.7 残高8.8	外) 暗青灰色5PB3/1 内) 暗青灰色5PB3/1 断) 明紫灰色5P7/1	室町時代 (14世紀末~15世紀中頃)	河内・和泉型
35	瓦質土器羽釜	SX1	口縁部1/8残存	口径33.2 器高43.0 残高9.5	外) 暗青灰色5PB3/1 内) 暗青灰色5PB3/1 断) 灰白色N8/0	室町時代 (15世紀後半)	河内・和泉型
36	磁器碗	SX1	口縁部1/5残存	口径9.4 残高4.0	施釉) 明青灰色5B7/1 断) 灰白色N8/0	江戸時代 (17世紀後半~18世紀前半)	波佐見系磁器 二重編目紋
37	磁器碗	SX1	底部1/3残存	口径3.2 残高2.4	施釉) 淡黄褐色5Y8/3 断) 灰白色7.5Y8/1	江戸時代	京焼系磁器 臺付も含めて施釉
38	軒平瓦	SX1		長さ3.4 残高6.4 残高2.3	外) 灰白色5Y7/1 内) 淡黄褐色2.5Y8/3 断) 灰白色10Y8/1	室町時代	唐草紋
39	軒丸瓦	SX1		長さ2.8 残高6.8 残高3.7	外) 灰白色2.5Y8/2 内) 灰白色2.5Y8/2 断) 灰白色2.5Y8/2	室町時代	巴紋
40	瓦質井戸筒	SX1		口径17.4 残高13.3 底部厚さ2.6~2.9	凹面) 灰白色10Y8/1 凸面) 暗青灰色5B3/1 断) 灰白色N8/0	江戸時代	凸面に平面的クサビ形・ 断面逆台形の滑り止め
41	磁器鉢	SE61	底部1/5残存	口径10.2 残高3.1	施釉) 明靑灰色10GY8/1 断) 青~暗青灰色5B4/1 露胎) 灰白色N8/0	江戸時代 (17世紀末~18世紀前半)	肥前系磁器 高台内面に裏銘
42	磁器鉢	SE61	底部1/4残存	口径13.4 残高8.6	施釉) 明靑灰色5B7/1 断) 青~暗青灰色5B4/1 露胎) 灰白色N8/0	江戸時代 (18世紀後半~19世紀前半)	肥前系磁器 八角部外面に花鳥風月の 体真須縁を掻く
43	丸瓦	SE61		長さ14.7 残高10.6 底部厚さ1.5	凸面) 暗青灰色5PB4/1 断) 明紫灰色5P7/1	江戸時代	凹面に内タタキ痕
44	軒瓦(棧瓦)	SE61		長さ6.2 残高12.1 垂れ長6.2	外) 暗青灰色5PB3/1 内) 暗青灰色5PB3/1 断) 灰白色N8/0	江戸時代 (18~19世紀代)	唐草紋

番号	器種	遺構・層位	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
45	瓦質井戸筒	SE61		残高23.9 残底17.2 残体厚さ2.6~2.8	凹面} 灰白色N7/0~灰白色N4/0 凸面} 灰白色N7/0~灰白色N4/0 凹面} 灰白色10Y8/1	江戸時代	平面ハナナ形・ 凸面V字形の滑り止め
46	瓦質井戸筒	SE61		残高27.0 残底14.7 残体厚さ2.5	凹面} 灰白色N7/0~灰白色N5/0 凸面} 灰白色10Y8/1	江戸時代	平面クサジ形・ 凸面V字形の滑り止め
47	軒平瓦	SK16		残高13.7 残底12.3 残長4.7	瓦当面} 灰白色7.5Y8/1 凹面} 暗青色5B4/1 凸面} 暗青色5B4/1 凹面} 灰白色7.5Y8/1	室町時代 (15世紀代)	立洩紋 裏貼り付け技法
48	軒平瓦	SK16		残高7.2 残底12.1 残長5.6	凹面} 暗青色5B3/1 凸面} 暗青色5B3/1 凹面} 灰白色7.5Y8/2	室町時代 (15世紀代)	立洩紋 裏貼り付け技法
49	瀬戸焼香炉	第I層	底部1/3残存	口径9.8 底径6.4 残高5.5	施釉} 灰白色7.5Y7/2	江戸時代 (18世紀~19世紀前半)	見込みに胎土目が1個 残る
50	須恵器壺	第II層	口縁部1/7残存	口径15.6 底径11.4 残高5.6	外} 褐色10YR5/2 内} 褐色5YR6/2 断) にぶい褐色5YR6/3	古墳時代中期 (5世紀中頃)	須恵器 頸部に1組の櫛目 を被状紋
51	青磁碗	第III層	口縁部1/12残存	口径13.2 残高3.9	施釉} 灰白色7.5GY5/1	中国・元代 (13~14世紀代)	裏脚磁器 裏建華紋
52	唐津焼皿	第III層	底部1/6残存	径9.4 残高1.9	施釉} 明オリーブ灰白色2.5GY7/1	江戸時代	削り付に 高台痕が1個 残る
53	土師器皿	第IV層	全体2/5残存	口径10.0 器高2.1	外} 残黄褐色10YR8/3 内} にぶい黄褐色10YR7/4 断) 灰白色10YR8/2	室町時代 (15世紀代)	京都系 内面ナデ上げ
54	土師器皿	第IV層	全体4/5残存	口径9.9 器高2.6	外} にぶい褐色7.5YR7/4 内} 褐色7.5YR7/6	室町時代 (15世紀代)	京都系
55	瓦質土器羽釜	第IV層	口縁部1/6残存	口径21.2 底径28.6 残高7.3	外} 暗青色5B3/1 内} 暗青色5P7/1 断) 明紫灰色5P7/1	室町時代 (14世紀後半~15世紀前半)	河内・和泉型
56	瓦質土器羽釜	第IV層	口縁部1/7残存	口径27.0 底径33.6 残高8.6	外} 暗青色5PB4/1 内} 暗紫灰色5PB4/1 断) 明紫灰色5P7/1	室町時代 (15世紀後半)	河内・和泉型
57	備前焼捕鉢	第IV層	口縁部小片	残高8.5	外} 赤色2.5Y5/2 内} 赤色2.5Y5/2 断) 赤色2.5Y4/2	室町時代 (15世紀後半~16世紀前半)	5条以上1組の櫛目
58	備前焼捕鉢	第IV層	片口部小片	残高5.2	外} 褐色10YR6/1 内} 褐色5YR5/2 断) 褐色5YR4/2	室町時代未~安土桃山時代 (16世紀後半)	5条以上1組の櫛目
59	備前焼捕鉢	第IV層	口縁部1/9残存	口径20.8 残高4.4	外} 黄灰色2.5Y5/1 内} 褐色5YR5/2 断) 黄灰色2.5Y5/1 黄褐色7.5YR6/2	室町時代 (14世紀後半)	7条1組の櫛目

番号	器種	遺構・層位	残存状況	寸法 (cm)	色 調	時 期	備 考
60	備前焼播鉢	第IV層	底部 1/4 残存	底径14.4 残高4.8	外) にぶい赤褐色2.5YR 5/3 内) 青灰色5P.B 6/1 断) にぶい赤褐色2.5YR 5/4	室町時代 (14世紀中頃～)	9条1組の播目
61	備前焼播鉢	第IV層	口縁部 1/15 残存	口径33.8 残高5.4	外) 紫灰色5P.B 4/1 内) 暗紫灰色5P.B 4/1 断) 灰赤色7.5R 4/2	室町時代末～安土桃山時代 (16世紀後半)	
62	青磁碗	第IV層	口縁部 1/8 残存	口径15.6 残高3.2	施釉) オリーブ灰色5GY 8/1 断) 灰白色10Y 8/1	中世	貿易陶磁器
63	青磁碗	第IV層	口縁部 1/14 残存	口径13.6 残高3.1	施釉) 緑灰色7.5GY 5/1 断) 灰白色N 8/0	中世	貿易陶磁器
64	白磁碗	排土中 第IV層相当	底部 1/2 残存	底径5.9 残高2.6	施釉) 明オリーブ灰色2.5GY 7/1 断) 灰白色N 8/0	中国・北宋代 (11世紀後半～12世紀前半)	貿易陶磁器 見込みに圈線
65	瀬戸焼皿	第IV層	底部 1/4 残存	底径6.4 残高1.3	施釉) 明緑灰色7.5GY 7/1 断) にぶい黄褐色10YR 7/3		削り高台
66	鍍貨	SD 116	完形	直径2.5 厚み0.2			サビのため鍍銘不明 未図化
67	磁器人形	第I層	ほぼ完形	全高6.9 全幅5.1 奥行3.4	施釉) 灰白色N 8/0 着色部分) 淡黄色2.5Y 7/3 断) 灰白色N 8/0	近世末～近代	釣りをする男性 型合わぬ成形 未図化
68	釘状鉄製品	SE 4		残長8.0 直径0.6			未図化
69	釘状鉄製品	P 26		残長4.0 直径0.9			未図化
70	釘状鉄製品	SK 70		残長5.2 直径0.9			未図化
71	釘状鉄製品	SK 70		残長5.6 直径1.1			未図化
72	釘状鉄製品	P 82		残長6.4 直径1.6			未図化
73	漆喰	SE 61					未図化
74	獣骨	SE 4		下顎全長4.4 下顎残高1.9 全臼歯列長1.4			小型哺乳類の下顎骨 未図化
75	貝殻	SK 6					シジミ 未図化

### 第3章 神境町遺跡第1次発掘調査

#### 1. 調査の経過

吹田市南高浜町82-1、82-2において共同住宅の建築が計画され、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地には当たらなかったが、周辺の遺跡の展開状況から遺構等の存在する可能性が考えられたために事業者と協議の結果、平成6（1994）年12月12日に試掘調査を実施した。

試掘調査は調査区3ヶ所（計12㎡）を設定して実施し、全ての調査区において平安時代から室町時代にかけての遺構及び遺物の出土が確認された。この調査結果に基づき、事業者から平成6（1994）年12月19日付で遺跡発見の届出が提出され、大阪府教育委員会からの平成7（1995）年1月9日付の通知により神境町遺跡として周知された。

発掘調査は工事によって遺構等が影響を受けると判断された範囲について平成7（1995）年2月9日から20日にかけて、計10ヶ所の調査区（G1～G10）を設定して実施した。調査面積は計125㎡であるが、G2～G10については、安全面の問題から上面を広く掘削している。

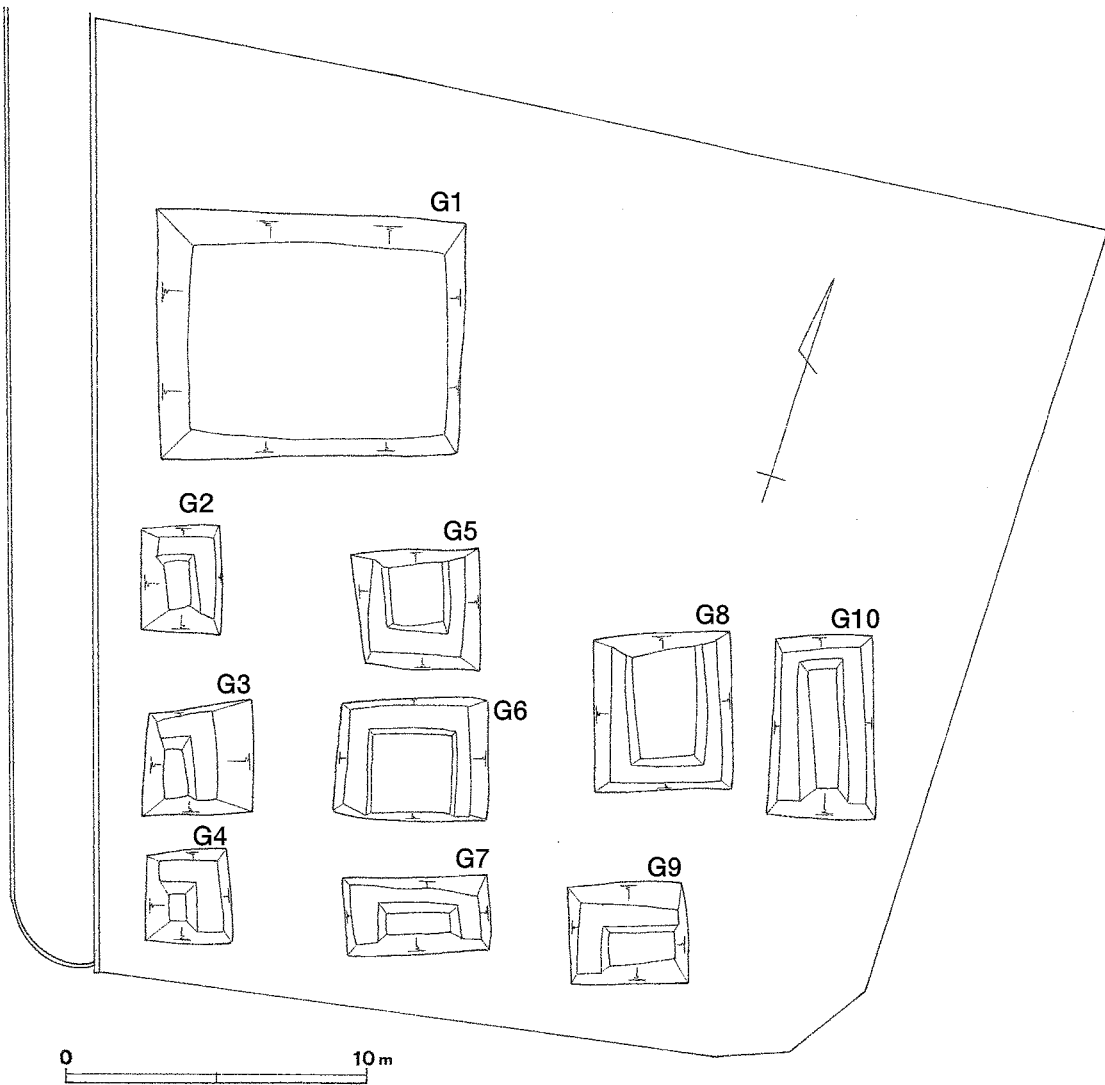
#### 2. 調査の成果

##### (1) 土層序

調査区の現在の地表面は標高5.4m～5.8mである。古くからの集落の中であったことから過去からの連続した開発等により堆積層は大きく攪乱されており、上層から地山層まで掘り込まれている部分も多くあるが、各調査区の土層序は遺構内堆積土を除くと、基本的に以下の4層に大別される。



第17図 調査地点位置図（S=1/5,000）



第18図 調査区平面図

I 層 (1)

調査区全域に広がる現代の盛土層であり、およそ現地表下0.8~1.2mまでにおよぶ。

II 層 (2~18)

I 層以下、およそ標高4.2~4.8mで確認された近代以降現代にかけてと考えられる褐色系砂質土を主とする堆積層である。

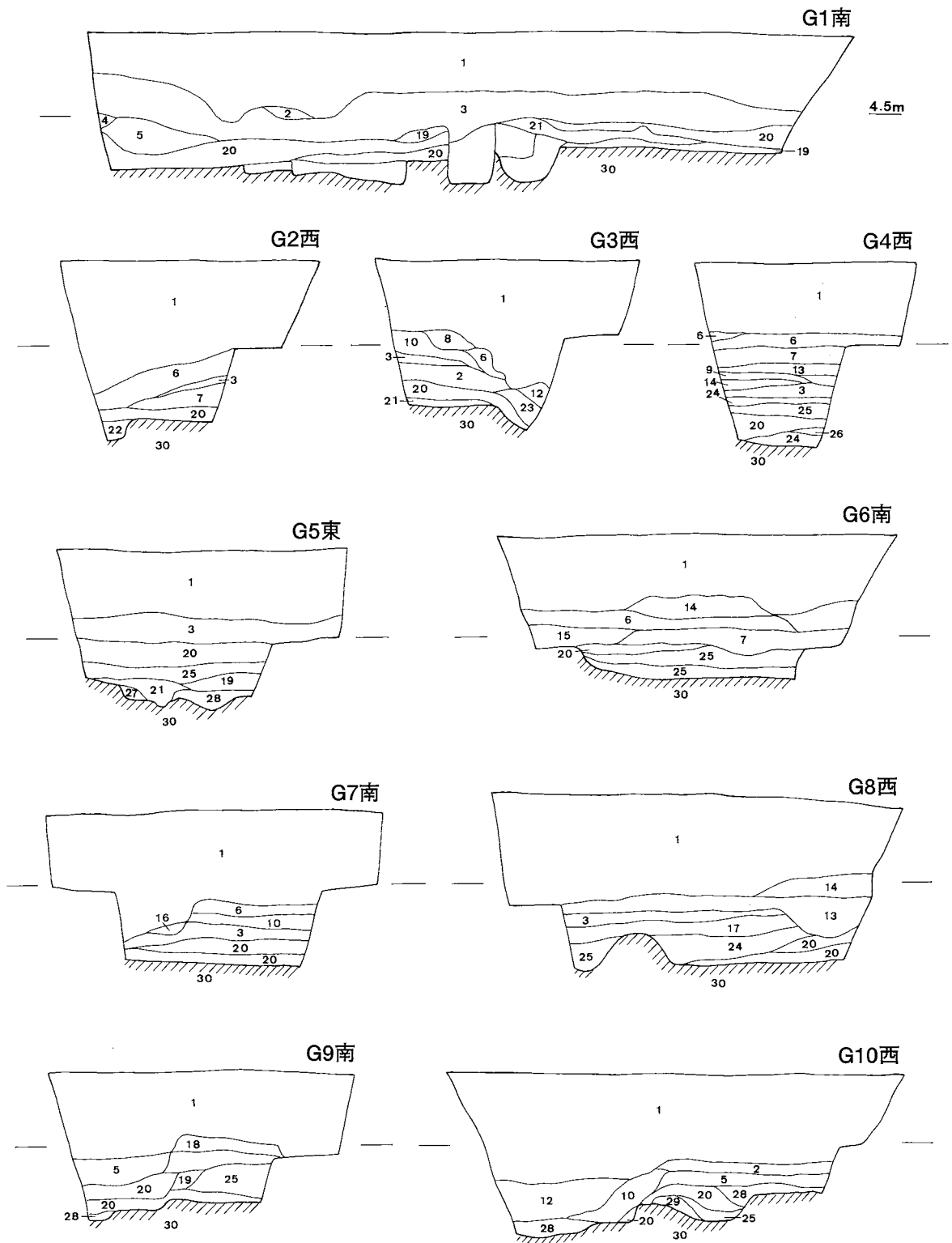
III 層 (19~29)

およそ標高3.6m~4.4mで確認された軟質な褐色系砂質土を主とする堆積層であり、中世を中心に近世まで遺物の出土が確認されるとともに微量ではあるが平安時代の遺物も出土している。後世の削平等による攪乱のために各調査区での層厚の差が大きい。

IV 層 (30)

地山層と考えられる黄褐色細砂層で、およそ標高3.2m~4.0mで確認された軟質で精良な砂層である。上面で土坑及び溝等の遺構が確認され、中世を中心とし、一部、近世にかけてのもの





I層 1.盛土

- II層 2.暗褐色砂質土  
3.暗灰色砂質土  
4.暗茶褐色細砂  
5.暗灰褐色砂質土  
6.暗茶褐色粘質土  
7.暗茶褐色砂質土

- 8.褐色砂質土  
9.暗茶灰色砂質土  
10.淡黑褐色砂質土  
11.暗褐色砂質土  
12.暗灰色粘質土  
13.茶褐色砂質土

- 14.茶褐色粘質土  
15.茶灰色砂質土  
16.褐色細砂  
17.灰色砂質土  
18.褐色粘質土

III層 19.褐色細砂

- 20.暗茶褐色砂質土  
21.茶褐色細砂  
22.茶褐色砂質土  
23.暗茶灰色砂質土  
24.褐色砂質土

25.淡黑褐色砂質土

- 26.黑褐色砂質土  
27.淡黑褐色細砂  
28.淡褐色細砂  
29.淡褐色砂質土

IV層 30.黃褐色細砂

第19圖 土層断面圖

のと考えられるが、後世の削平や堀込等による攪乱のために確認される地盤高は調査区ごとに差が認められる。

## (2) 各調査区の状況

### 【G 1】

標高3.8～4.0mのⅣ層上面を遺構面とし、土坑30基 (SK1～SK30)、ピット4基 (P1～P4)、溝1条 (SD1) を確認したが、重複関係の認められるものが多い。

#### 土坑

土坑の概要は第1表のとおりであるが、SK26～SK28は上層のⅢ層から掘り込まれたものであり、近世以降のものである。他は大きさが2m以上が3基、0.9～1.8mが10基、0.7m以下が14基であり、大型の土坑3基は、SK1は西側は調査区外に延び、調査範囲では平面は長方形に近く、南北2.0m、東西2.1m以上、深さ45cmであり、底面は弱い凹面を呈する。東側でSK2と重複する。褐色系の砂質土を主とする堆積土が認められ、土師器皿、瓦質土釜、須恵器等が出土するがいずれも細片である。SK3は北側は調査区外に延び、調査範囲では楕円形に近く、東西4.3m、南北2.3m以上、深さ1.0mであり、底面はほぼ平である。西側でSK2、東側でSK4、SD1、南側でSK17と重複する。褐色系の砂質土を主とする堆積土が認められ、土師器皿、瓦器、須恵器等が出土するがいずれも細片である。SK17は平面台形に近く、東西(長辺)3.2m、南北2.6m、深さ45cmであり、底面は弱い起伏がある。北側でSK3、東側でSK14、SK16、南側でSK25、西側でSK18と重複する。暗茶褐色砂質土、暗茶褐色粘質土、褐色粗砂の堆積土が認められ、土師器皿、瓦質土釜、青磁、瓦が出土するがいずれも細片である。

中・小型の土坑は深さ30cm以下と浅く、堆積土も砂質土1層のものが大半であり、土師器、瓦質土器等が出土するが、いずれも細片で微量である。

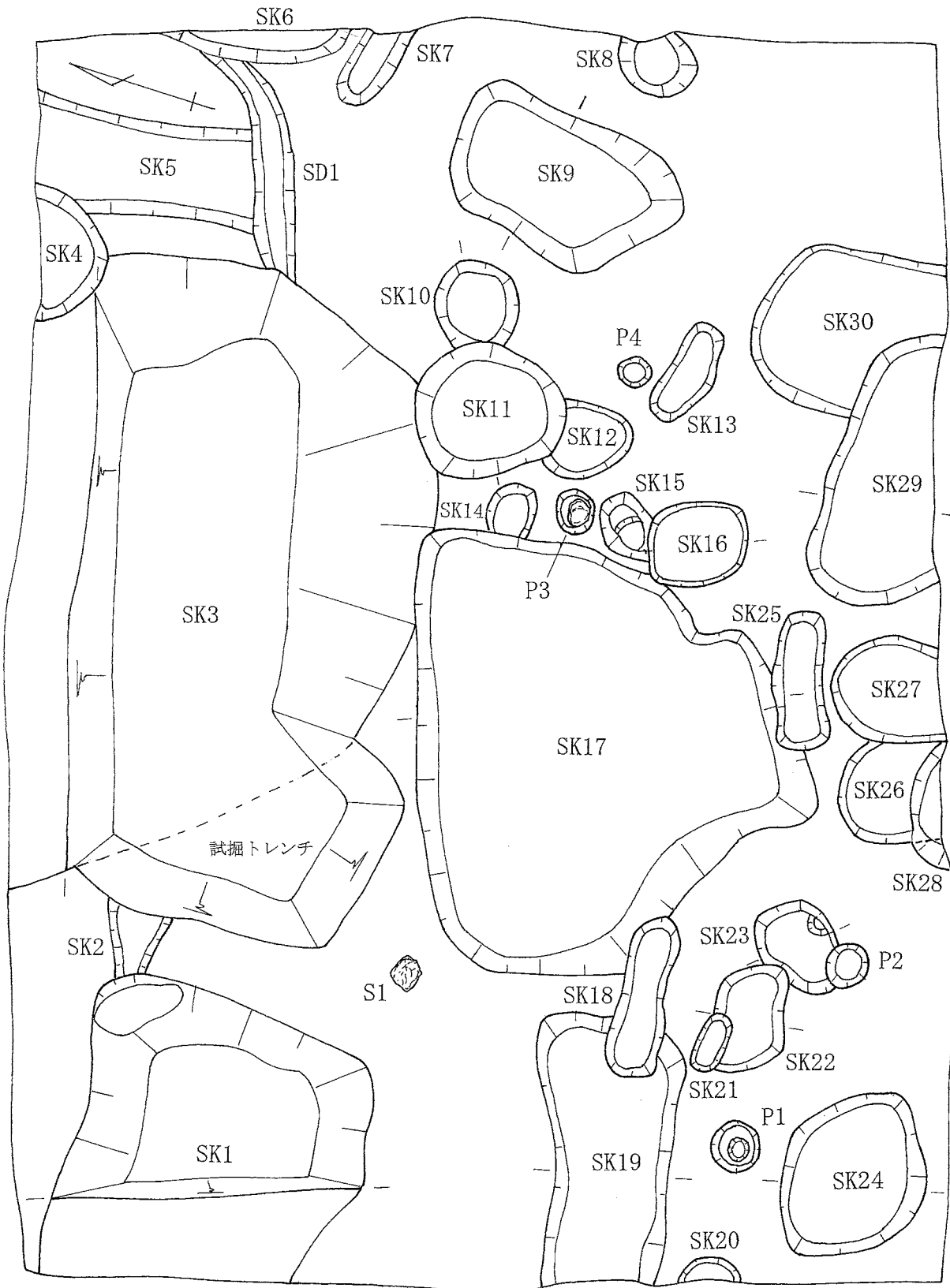
#### ピット (P1～P4)

平面は円形でP1は径44cm、深さ19cmで径14～16cmの柱痕が認められる。P2は径29cm、深さ17cmでSK23と重複し、P3は径30cm、深さ3cmで底面に一辺14～20cmの台形に近い石が平らな面を上にして確認され、P4は径21cm、深さ23cmである。堆積土はいずれも暗茶褐色砂質土で、土師器が出土しているが、微細片で詳細は不明である。

P1、P2とP3、P4はそれぞれ直線状に並ぶことから建物ないしは柵等の可能性が考えられ、さらにP3、P4はその展開方位の同一線上に一辺16～20cmの方形で上面が平な石(S1)が確認されており、P3と同様のものと考えられる。各々の方位はP1・P2はN77°W、S1・P3・P4はN87°Wとやや異なる。

#### 溝 (SD1)

土坑SK3、SK5、SK6と重複し、北東の調査区外から西側に湾曲して走行する状況が認められる。幅0.28m、深さ0.1mで暗灰色砂質土の堆積が認められ、土師器皿が出土する。



第20図 G1平面図

	規模 (m)	深 (m)	堆積土	出土遺物
SK1	2.00×2.10以上	0.45	報告文のとおり	土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器
SK2	0.45×0.40以上	0.10	茶褐色砂質土	土師器、瓦器
SK3	4.30×2.30	1.00	報告文のとおり	土師器、瓦器、須恵器
SK4	0.95×0.45以上	0.10	暗茶褐色砂質土	土師器
SK5	0.70×1.50以上	0.14	淡灰褐色砂質土	瓦器、陶器
SK6	1.27×0.25以上	0.16	暗茶褐色砂質土	瓦質土器
SK7	0.30×0.65以上	0.12	暗褐色砂質土	土師器
SK8	0.48×0.55	0.14	暗茶褐色砂質土	
SK9	1.60×1.00	0.29	暗茶褐色砂質土 褐色砂質土 褐色粗砂	土師器
SK10	0.58×0.60	0.29	暗茶褐色砂質土 褐色粗砂	瓦
SK11	1.00×0.93	0.21	暗茶褐色砂質土 褐色粗砂	土師器
SK12	0.54×0.62	0.16	暗茶褐色砂質土	土師器
SK13	0.70×0.32	0.13	暗茶褐色砂質土	土師器
SK14	0.33×0.34以上	0.22	暗茶褐色砂質土	
SK15	0.35×0.40	0.13	暗茶褐色砂質土	土師器、瓦質土器
SK16	0.60×0.66	0.21	暗茶褐色砂質土	
SK17	3.20×2.60	0.45	報告文のとおり	土師器、瓦質土器、青磁、瓦
SK18	1.30×0.45	0.24	暗灰褐色砂質土	土師器
SK19	1.00×1.80以上	0.20	暗茶褐色砂質土 褐色粗砂	土師器、瓦質土器、須恵器
SK20	0.42×0.15以上	0.10	淡褐色砂質土	土師器
SK21	0.20×0.43	0.14	暗茶褐色砂質土	土師器
SK22	0.47×0.75	0.21	暗茶褐色砂質土 褐色細砂	土師器
SK23	0.70×0.52	0.10	暗茶褐色砂質土 褐色細砂	土師器
SK24	0.98×1.20	0.35	暗茶褐色砂質土 褐色粗砂	土師器、須恵器
SK25	0.94×0.32	0.22	淡黒灰色砂質土	瓦質土器
SK26	0.70×0.50以上	0.11	暗茶褐色砂質土	土師器
SK27	0.74×0.74以上	0.29	淡黒灰色砂質土	土師器
SK28	0.76×0.20以上	0.39	褐色砂質土	
SK29	1.80×0.94以上	0.26	暗茶褐色砂質土	土師器、瓦質土器、瓦器
SK30	1.15×1.20以上	0.19	淡黒灰色砂質土	土師器、瓦質土器

第1表 G1土坑

【G 2】

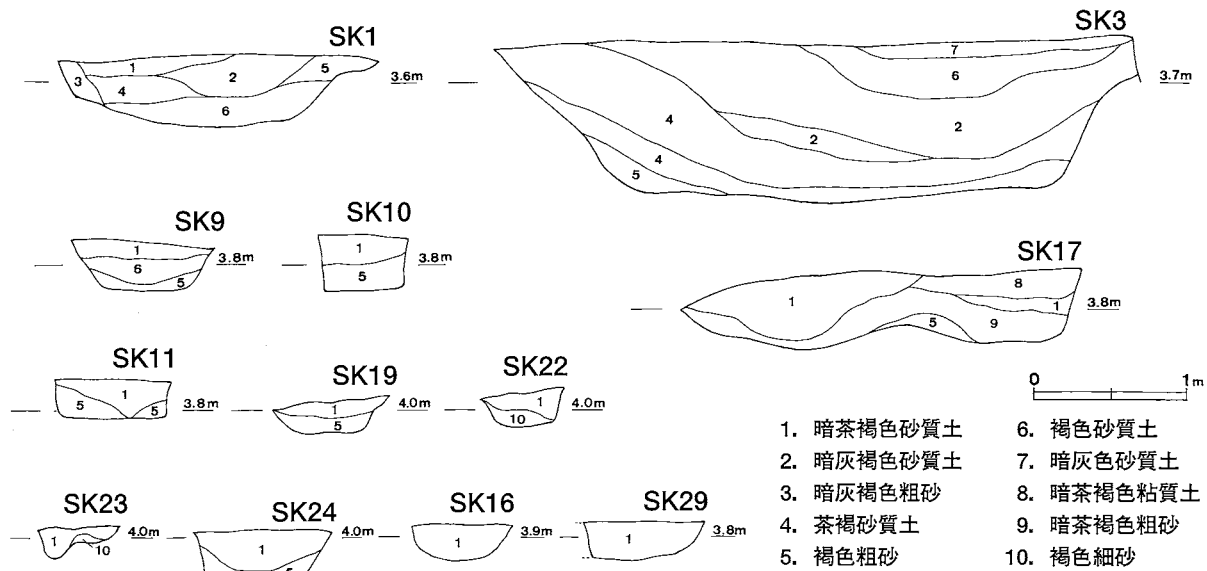
標高3.5mでⅣ層が確認され、調査区の西側及び南側が約29～32cm落込み、その落込みと重複して調査区の南東隅で一部ではあるが、一辺66cm、深さ42cmの土坑（SK31）が確認された。Ⅲ層から土師器、瓦質土器、瓦等が出土するが細片である。

【G 3】

標高3.7mでⅣ層が確認され、調査区の北側で36～40cm落込む。Ⅲ層から土師器、瓦質土器、瓦等が出土するが細片である。

【G 4】

標高3.2mでⅣ層が確認され、調査区の南西から北西にかけて緩やかに湾曲しながら、8～10cm落込む。Ⅲ層から土師器、須恵器等が出土するが細片である。



第21図 G1遺構断面図

【G 5】

標高3.8～4.0mでⅣ層が確認され、調査区の東半部が北半は方形状に、南半はやや西側に広がりながら22cm前後落込み、さらに落込みの肩側が10cmほど落ち込む。平面方形ないしは楕円形で、深さ10～20cmの前後の土坑が上面で3基（SK 32～34）、落込み内で2基（SK 35・36）確認された。Ⅲ層から土師器、須恵器等が出土するが細片である。

【G 6】

標高4.0mでⅣ層が確認され、西側から南東に緩やかに湾曲しながら22～30cm落ち込むが落込みの底面はほぼ平である。Ⅲ層から土師器、瓦質土器、銭貨が出土するが土器は細片である。

【G 7】

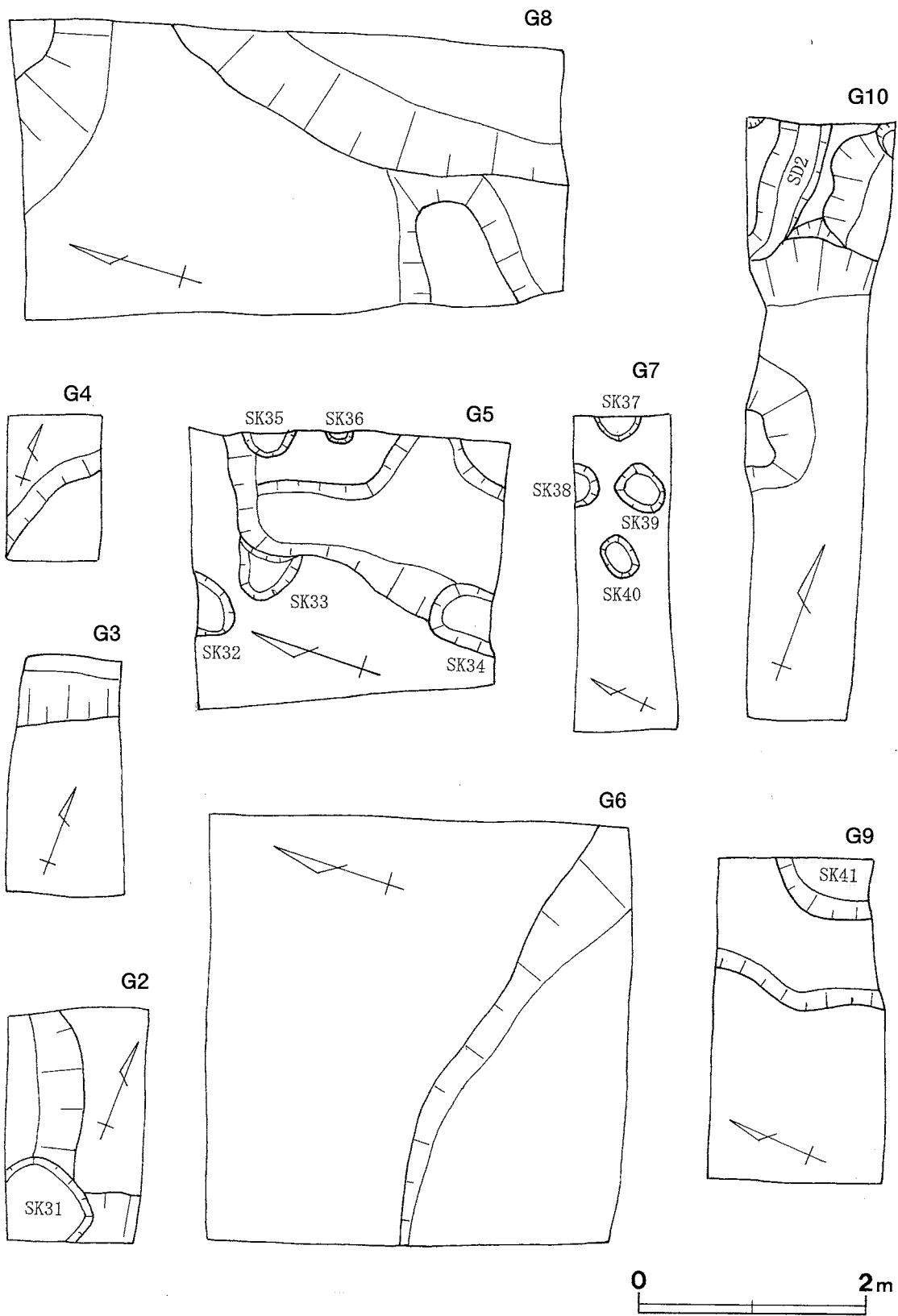
標高3.5mでⅣ層が確認され、一辺20～30cm、深さ9～13cm前後の平面方形に近い土坑4基（SK 38～40）が確認された。Ⅲ層から土師器、須恵器、瓦質土器等が出土するが細片である。

【G 8】

標高3.2mでⅣ層が確認されるが調査区北東端では23cm前後、南西端近くでは20～32cm畔上に高まる。また、北東から南に非常に緩やかに湾曲しながら12cm前後落ち込む。Ⅱ層の調査区北西端近くで銭貨28枚がまとめて出土し、Ⅲ層から土師器、瓦器、瓦質土器、瓦等が、落ち込み内堆積土から土師器、瓦質土器が出土するが細片である。

【G 9】

標高3.8mでⅣ層が確認され、調査区中央近くでくの字状を呈して東側に20cm前後落ち込み、その底面の調査区の南東端で平面方形に近いと考えられる深さ13cm前後の土坑（SK 41）を確認した。Ⅲ層から土師器、瓦器、瓦質土器、備前焼、瓦等が出土するが細片である。



第22図 調査区 (G2~G10) 平面図

## 【G10】

標高3.3～3.85mでⅣ層が確認され、調査区の北端から0.75～0.9mの地点で30cm近く落ち込む。落込み上面では北から南に向かい、落込みと重複する幅22～35cm、深さ20cm前後の溝（SD2）を確認した。また、調査区のほぼ中央西側で幅45cm、高さ32cm前後の畔上の高まりを確認した。Ⅲ層から土師器、須恵器、瓦が出土するが細片である。

### (3) 出土遺物

出土遺物はコンテナ（39×59×15cm）4箱分であり、Ⅲ層出土のものが大半で、遺構出土のものは少量で細片が多い。

#### a. 遺構出土遺物（第23図 1～14：G1）

##### 土師器皿（1・2：SK1、3：SK3、4：SK9、5：SK22、6：SK24、7：SK16、8：SD1）

いずれも黄橙色を呈し、1は口径10.6cmで口縁部は直線的に伸び、2～8は口径7.5～7.8cmで口縁部は外反し、横ナデにより下端部が肥厚するものもある。

##### 瓦器椀（10：SK3、11：SK29）

10は和泉型でⅣ-2期、11は楠葉型でⅣ-1期と考えられる。

##### 瓦質土器（9：SK6、12：SK17）

9は土釜で口縁部は短く、口縁部のすぐ下に幅の狭い罫がつく。12は口縁部を強く外反させる香炉と考えられ、外面は丁寧なヘラミガキが施され、菱形紋が認められる。

##### 陶磁器（13：SK17、14：SK5）

13は大宰府での分類による龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5a類と考えられ、14は唐津焼皿で、胎土目積み技法のものである。

#### b. Ⅲ層出土遺物（第23・24図 15～75）

##### 土師器皿（15～45：G1、46：G2、47：G3、48～50：G5）

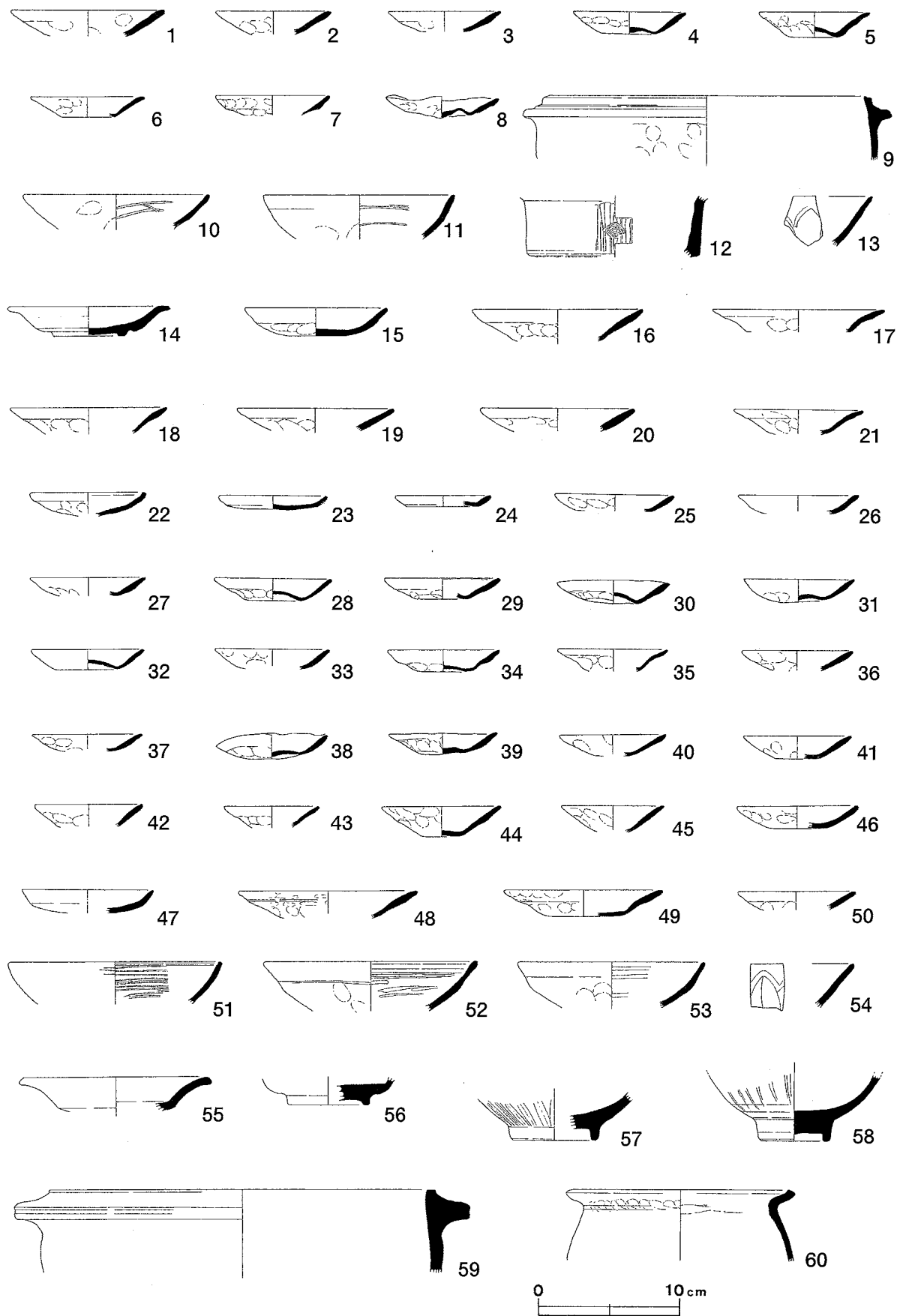
いずれも黄橙色を呈する。15は口径9.8cmで口縁部はナデ調整により外反する。16～18、48は口径10.8～12.4cmで口縁部を外反させる。22は口径7.8cmで口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を上方につまみ上げている。23～25は口径6.8～8.2cmで器高が低く、口縁部は直線的に短く伸びる。26～41は口径7.4～8.2cmで口縁部は外反して伸びる。42～45は口径7.0～8.2cmで口縁部に比べて底部は小さく、口縁部は比較的直線的に伸びる。

##### 瓦器椀（51～53：G1）

51は楠葉型でⅡ-2期、52・53は和泉型で、52はⅢ-2期、53はⅣ-1期と考えられる。

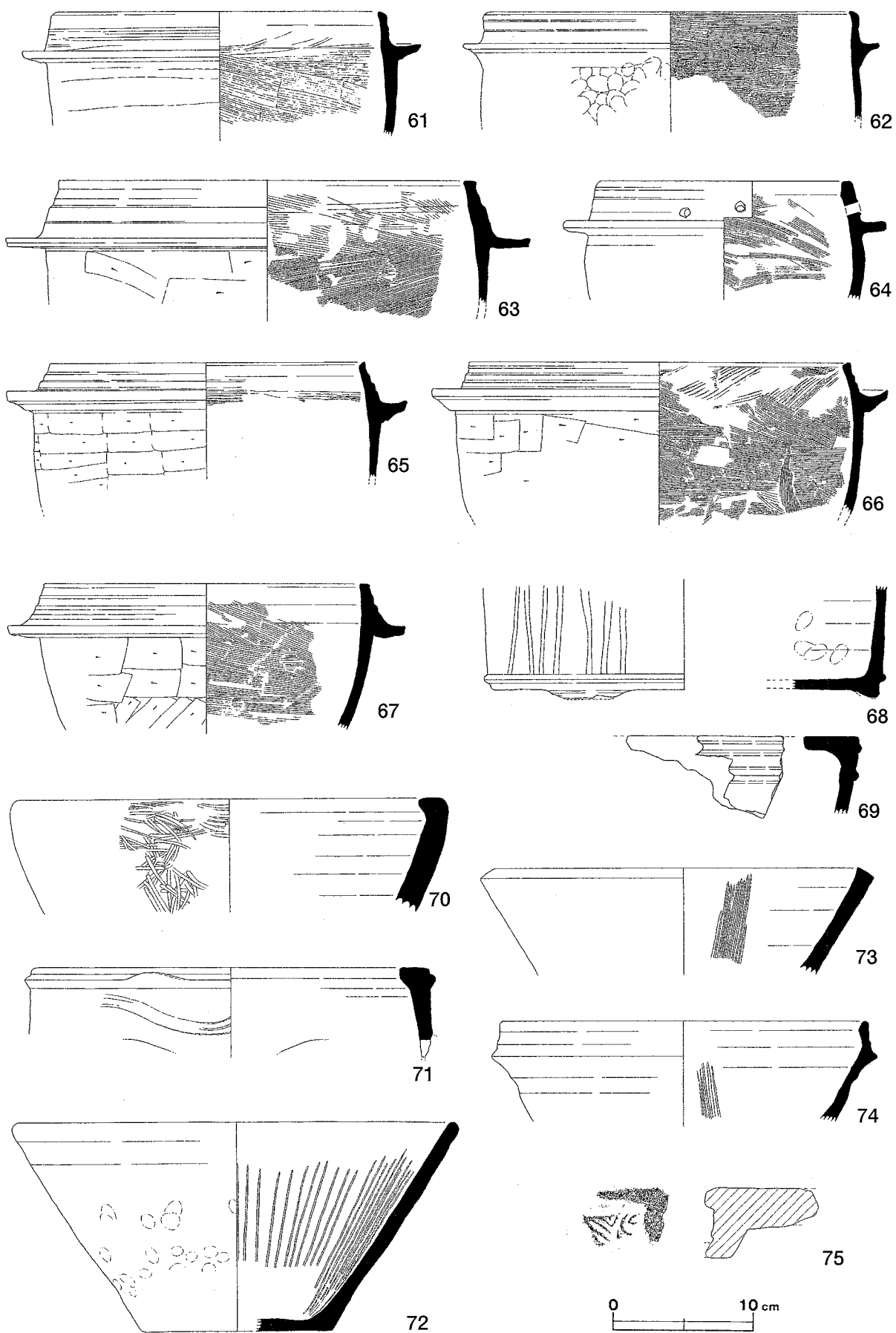
##### 青磁（54～58：G1）

55、56は高台付皿、54、57、58は碗である。54は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5a類と考えられ、57、58は高台から比較的直線的に体部が立ち上がり、57は片切彫の蓮弁紋、58は細線の線描蓮弁紋を配する。



第23图 出土遺物 (1)





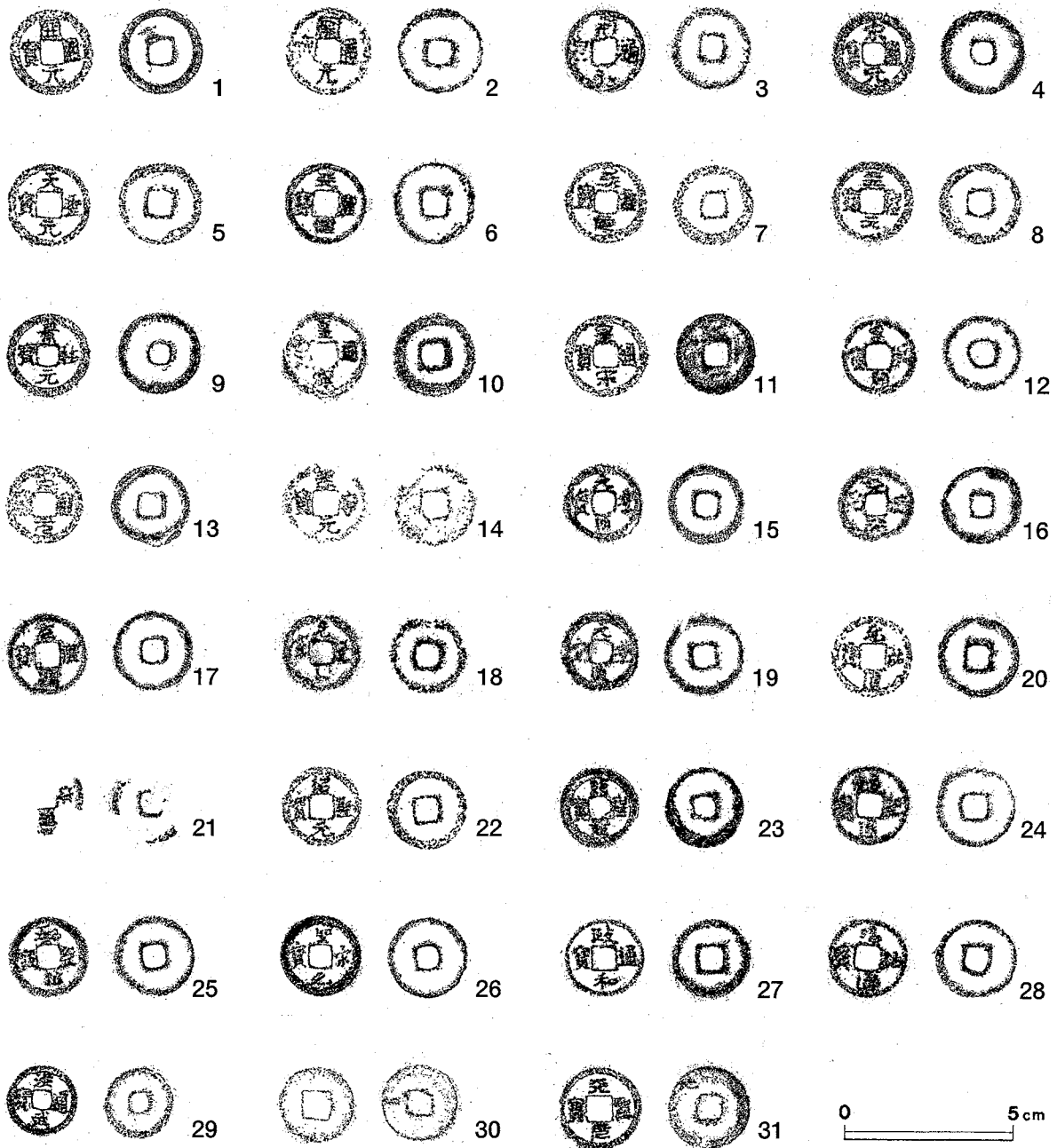
第24图 出土遺物 (2)

土師質土器 (59・60 : G1)

59は土釜で口縁端部につづけて短く厚い鋳を巡らす。60は甕でくの字状に屈曲させた口縁部で端部を内側に肥厚させる。

瓦質土器 (61・64~69 : G1、62・63・70 : G5、71 : G2)

61~67は土釜、68~70は鉢、71は風炉である。61、62はほぼ直立する口縁部で62は外面に沈線を巡らす。体部外面は61は横ナデ調整を施すが62は不調整であり、内面はハケ目調整を施す。64は丸味を持つ体部で、口縁部は内傾して伸び、穿孔が認められる。63、65、66は口縁部は弱



第25図 出土銭貨

NO.	調査区	銭種	外縁外径(縦)	外縁外径(横)	外縁内径(縦)	外縁内径(横)	厚	重
1	G8	開元通寶	25.25	25.30	19.75	19.60	1.30	3.141
2	G8	開元通寶	25.30	25.90	20.60	21.50	1.60	4.023
3	G8	開元通寶	24.40	24.20	20.50	20.85	1.20	2.839
4	G8	宋元通寶	24.90	24.70	18.70	18.35	1.15	3.067
5	G8	天聖元寶	25.15	25.25	21.25	20.70	1.20	3.699
6	G8	天聖元寶	25.00	25.00	21.00	21.00	1.20	3.331
7	G8	天聖元寶	24.70	24.90	19.50	19.55	1.30	3.155
8	G8	天聖元寶	24.70	24.65	19.30	19.20	1.00	3.093
9	G8	景祐元寶	25.00	25.25	19.70	19.30	1.25	3.399
10	G8	皇宋通寶	24.00	23.50	20.50	21.00	1.10	2.920
11	G8	皇宋通寶	24.65	24.70	19.80	19.95	1.40	3.253
12	G8	皇宋通寶	23.25	23.20	19.30	19.20	1.00	2.022
13	G8	熙寧元寶	23.75	23.70	19.35	19.35	1.40	3.466
14	G8	熙寧元寶	23.45	24.40	19.95	20.10	1.10	2.390
15	G8	元豊通寶	24.80	24.75	19.95	20.15	1.30	2.591
16	G8	元豊通寶	23.85	24.00	17.75	18.50	1.25	3.652
17	G8	元豊通寶	25.30	25.10	20.60	20.10	1.40	3.478
18	G8	元豊通寶	23.05	23.40	19.60	19.65	1.00	1.960
19	G8	元豊通寶	24.40	24.30	18.30	17.80	1.10	2.751
20	G8	元祐通寶	23.50	23.00	20.25	19.80	1.35	3.132
21	G8	□符通□	—	—	—	—	1.20	1.183
22	G8	紹聖元寶	24.00	24.00	20.10	18.95	1.45	3.312
23	G8	紹聖元寶	24.30	24.20	20.95	18.30	1.20	3.383
24	G8	紹聖通寶	24.45	24.55	21.20	20.75	1.30	3.350
25	G8	聖宋通寶	24.80	24.60	19.45	19.00	1.10	3.051
26	G8	聖宋通寶	24.65	24.50	19.20	19.85	1.05	3.191
27	G8	政和通寶	24.15	23.90	20.40	20.75	1.25	3.324
28	G8	□□通寶	24.30	24.30	20.10	21.45	1.00	2.143
29	G1	洪武通寶	21.55	21.25	17.95	16.85	1.00	2.819
30	G1	無文	23.25	23.00	19.20	19.60	0.90	2.431
31	G6	天聖元寶	25.25	25.20	20.30	20.25	1.30	3.821

単位 重:g、他はmm

第2表 銭貨計測表

凸帯を巡らし、体部にも波状の凸帯を巡らす。

#### 丹波・備前焼 (72~74 : G1)

72は丹波焼播鉢で直線的な体部で口縁端部を丸く収め、内面にヘラ描の播目が施される。73、74は備前焼播鉢で73は外傾した口縁端部がやや肥厚気味、74は口縁が上方へ大きく立ち上がり、内面にクシ描の播目を施す。

#### 瓦 (75 : G8)

水波紋軒平瓦で段顎をなし、瓦当裏面及び平瓦部分はナデ調整を施す。胎土は粗く、8mm以下の砂粒を多く含む。

#### 銭貨 (第25図 1~28 : G8、29・30 : G1、31 : G6)

1~28はG8のⅡ層のほぼ同一地点で出土し、鏽着していたものもあることからこの28枚については縉状になっていたものと考えられ、銭種としては元豊通寶5枚、天聖元寶4枚、開元通寶及び皇宋通寶3枚、聖宋通寶・紹聖元寶・熙寧元寶2枚、宋元通寶・景祐元寶・元祐通寶・□符通□(元符通寶か)・紹聖通寶・政和通寶・□□通寶が各1枚である。29は洪武通寶、30は無文銭でG1Ⅲ層、31は天聖元寶でG6Ⅲ層出土である。

く内傾し、外面に段を有する。体部内面はハケ目、外面はヘラケズリ調整を施す。67は尻つぼみの体部にほぼ直立する口縁部を付す。体部内面はハケ目、外面はヘラケズリ調整を施す。68は深鉢と考えられ、底部に凸帯を巡らしており、外面は縦方向の粗いヘラミガキ調整が認められる。69は方形の浅鉢で外面に凸帯を2条巡らす。70は器壁が厚く、内湾気味に上方に伸びる体部で口縁端部は内側に肥厚させる。71は体部がやや内傾して直線的に伸び、口縁端部近くに

これらの銭貨は銭文の不鮮明なもの、穿内等が未仕上げのものや内郭の変形したものが多く、同一の銭種でも重さのばらつきが認められる。

### 3. まとめ

今回、調査が実施された神境町遺跡は吹田砂堆上に立地する市域の遺跡の中で遺構が確認されたものとしては最も東南端の調査地の一つであり、当該地域の主に中世後期から近世にかけての状況の一端を確認した調査であった。

今回の調査結果により調査地点の変遷をみると、出土遺物では11世紀の土師質土釜、甕が最も遡る資料で、次いで、12、13世紀の瓦器椀、土師器皿、龍泉窯系青磁碗等が認められるが、いずれも細片で少量であり、その出土状況からは、今回の調査で確認された遺構とは直接関わるものではなく、周辺地域から流入したものと考えられる。

遺構については全ての調査区において確認されたが、後世の開発等の攪乱によりほぼ全ての遺構が砂堆上面（IV層上面）の同一面で複雑に重複した状況で確認された。これらの遺構の時期については確実に遺構に伴う状況での遺物の出土が認められないことから、各遺構の明確な時期は断定できないが、包含層等からまとまって認められる土師器皿、瓦質土器等を中心に唐津焼や丹波焼の出土遺物から、14～16世紀を中心に一部17世紀初めにかけての比較的長期間にわたる遺構等の変遷を示すものと考えられる。確認された遺構は土坑が主であり、G1で確認されたように大型の土坑と中・小型の土坑が複雑に重複しているが、調査状況からはその性格や土坑間の関連を明らかにすることはできなかった。また、G1においては柱穴と考えられるピット4基（P1～P4）及びP3・P4の延長線上に柱穴の底に据えられたと考えられる石（S1）を確認したが、P1・P2とS1・P3・P4では展開方位や柱間の距離もやや異なることから別の掘立柱建物ないしは柵列と考えられる。その展開方位については周辺地域の豊嶋郡条里や嶋下郡条里の方位とは異なるが、吹田砂堆上は両地域の間位置する条里非施行地帯であり、その地形的制約を受けたと考えられる集落の実態を示すものと考えられる。

以上のように今回の調査状況から調査地の性格を考えることは難しいが、掘立柱建物等のあり方や出土遺物に風炉や香炉等の瓦質土器や陶磁器等が認められることから、中世後期を中心とする屋敷地の一画であったことが考えられる。また、微量ではあるが、軒平瓦や図示できなかったが中世後期と考えられる丸瓦や平瓦が認められることも注目される。

## 第4章 吹田操車場遺跡第3次・第4次発掘調査

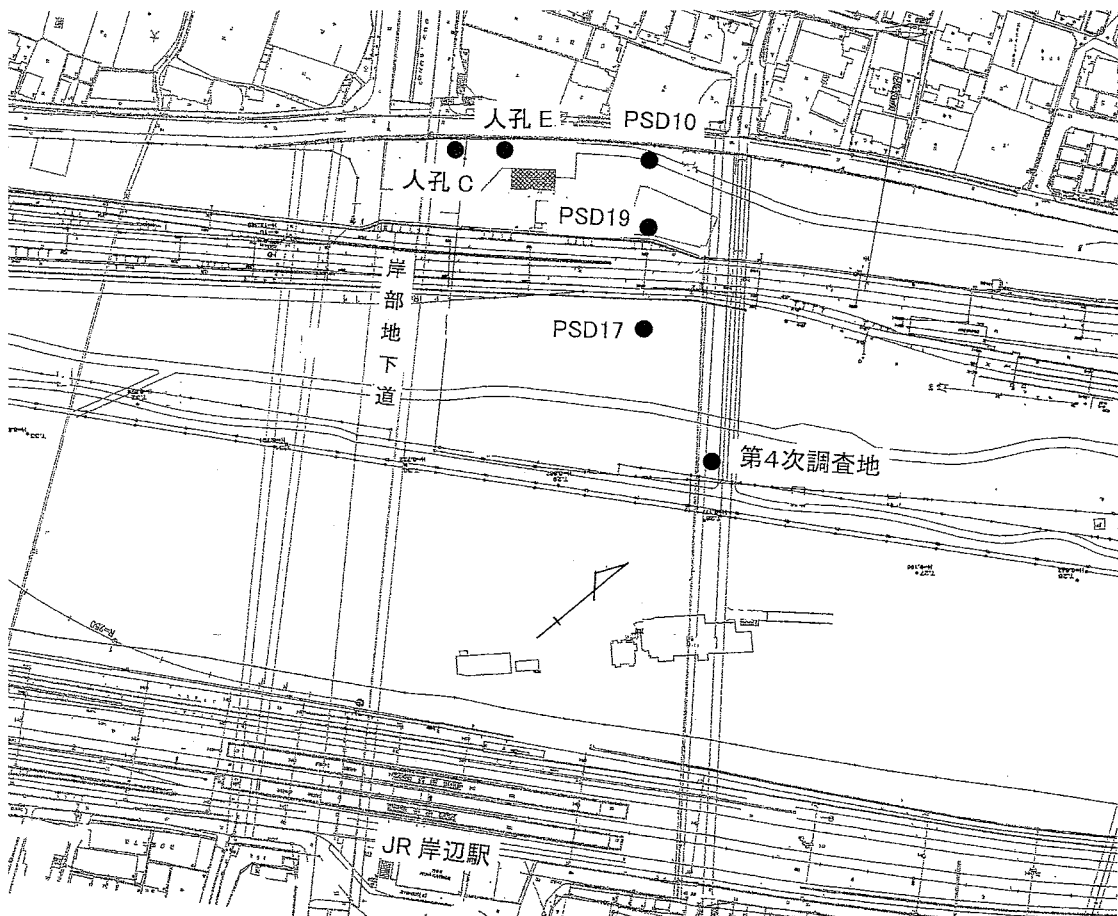
### 1. 調査の経過

今回の発掘調査は、吹田操車場遺跡の包蔵地である吹田操車場跡地地区において下水道設置工事が計画されたことにより、予定の工事によって遺跡に影響を及ぼすと判断された立坑・汚水枡設置箇所について発掘調査を実施したものである。

第3次調査については、5か所の立坑・汚水枡設置箇所（約39㎡）を対象とし、平成21（2009）年1月8日～16日の間と同年4月23日～6月1日の間に現地における調査実施の調整が完了した箇所から順次行った。また、第4次調査については、1か所の立坑設置箇所（約90㎡）を対象としたもので、平成21（2009）年9月28日～10月6日に調査を実施した。

### 2. 第3次調査の成果

第3次調査においては、下水道設置工事における立坑等の工事名称をそのまま調査区の呼称として用いた。



第26図 吹田操車場遺跡発掘調査地点（1/3,000）

## (1) 各調査区の成果

### 【PSD17】

PSD17（約2.4×4 m）における土層序は、現代盛土層以下、黒灰色粘土層、灰色粘土（灰色細砂混じる）層、暗灰色粘土層、灰色粘土層、そして地山層である黄褐色粘土層の堆積が認められた。

PSD17において遺構は確認できなかったが、暗灰色粘土層内で土師器・須恵器・青磁・瓦等の破片、灰色粘土層内で須恵器・土師器等の破片の包含が認められた。暗灰色粘土層包含の遺物については概ね中世を下限時期とし、灰色粘土層包含の遺物については概ね古代のものであった。細片ばかりで図化できたものは3点のみであった。1は暗灰色粘土層出土の須恵器鉢である。2・3は灰色粘土層出土のものであり、2は須恵器甕、3は平瓦である。平瓦は二次的に被熱しており、摩滅が著しいが、凸面に縄目痕、凹面に布目痕が認められる。

### 【PSD19】

PSD19（約3.2×3.2m）における土層序は、現代盛土層以下、暗灰色粘質土層、灰色粘土を主体とする土層、そして地山層である黄褐色粘土層の堆積が認められた。

PSD19において遺構は確認できなかったが、灰色粘土（茶褐色砂質土粒混じる）層に近世の所産とみられる磁器片、灰色粘土層に須恵器・土師器・瓦器・陶硯等の破片の包含が認められた。灰色粘土層包含の遺物については、下限時期のものとして中世の瓦器片が認められたが、同層出土の陶硯片については、平成19・20年度に実施した吹田操車場跡地地区の整備事業に伴う確認調査（第2次調査）で出土した陶硯片1点と接合することができ、飛鳥時代の所産であると考えられる。

遺物で図化できたものは陶硯を含めて灰色粘土層出土の2点のみであった。4は、陶硯を第2次調査（No54調査区）出土分と合わせて図化したものである。硯部の復元径は22.8cmを測り、脚台部は欠損しているが、方形であったとみられる透しの痕跡が残る。5は平瓦である。凸面に縄目痕、凹面に布目痕が認められる。

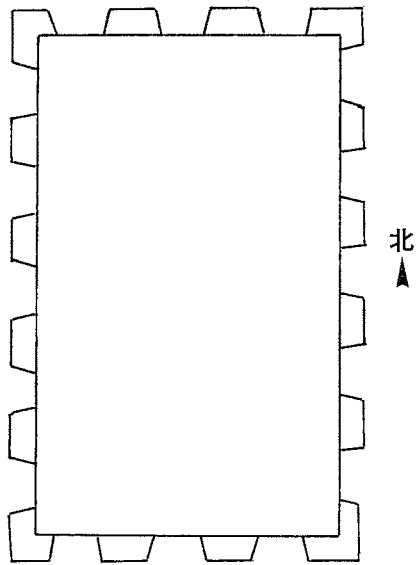
### 【PSD10】

PSD10（約2.3×2.3m）における土層序は、現代盛土層・旧耕土層以下、暗青灰色粘土層、地山層である黄灰色粘土層の堆積が認められた。

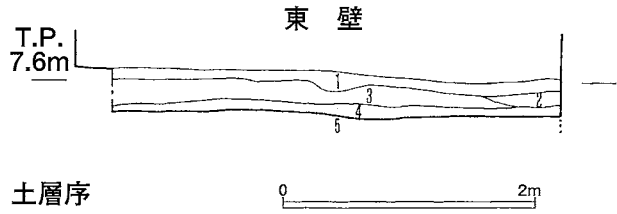
PSD10において遺構は確認できなかったが、暗青灰色粘土層内に須恵器・土師器片の包含が認められた。細片ばかりで図化できたのは1点のみであった。6は須恵器杯であり、奈良時代から平安時代初期にかけてのものと考えられる。この他の遺物の時期は明確でない。

### 【人孔E】

人孔E（約2.1×2.1m）における土層序は、現代盛土層・旧耕土層以下、暗青灰色粘質土を主



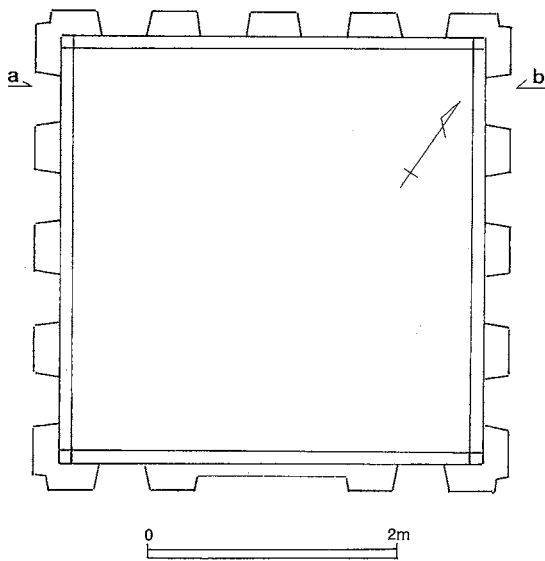
第27図 PSD17調査区平面図



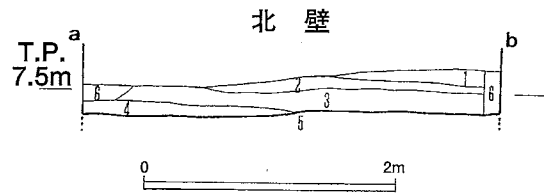
土層序

1. 黒灰色粘土層
2. 灰色粘土（灰色細砂混じる）層
3. 暗灰色粘土層
4. 灰色粘土層
5. 黄褐色粘土層 [地山層]

第28図 PSD17調査区土層断面図



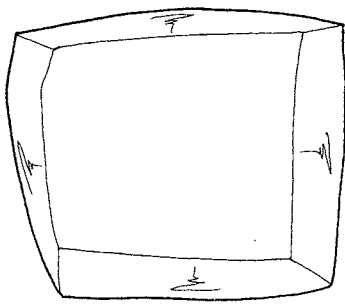
第29図 PSD19調査区平面図



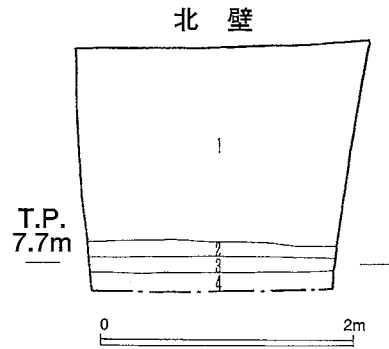
土層序

1. 暗灰色粘質土層
2. 灰色粘土（茶褐色砂質土粒混じる）層
3. 灰色粘土層
4. 灰色粘土（黄褐色粘土混じる）層
5. 黄褐色粘土層 [地山層]
6. 攪乱土

第30図 PSD19調査区土層断面図



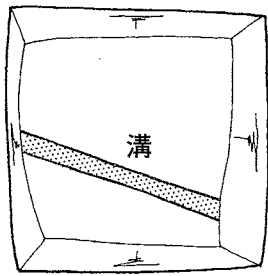
第31図 PSD10調査区平面図



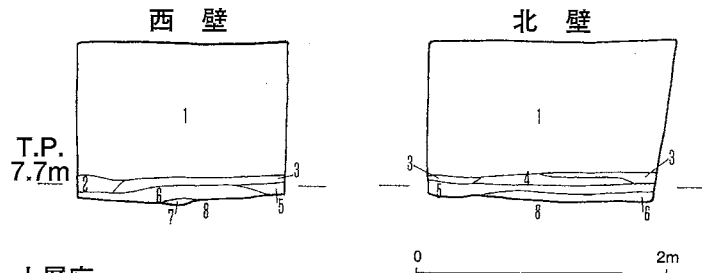
土層序

1. 現代盛土層
2. 旧耕土層
3. 暗青灰色粘土層
4. 黄灰色粘土層 [地山]

第32図 PSD10調査区土層断面図



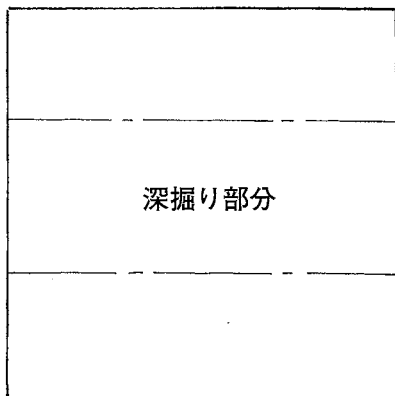
第33図 人孔E調査区平面図



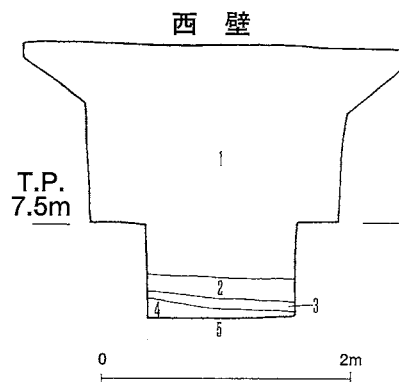
土層序

- |                       |                     |
|-----------------------|---------------------|
| 1. 現代盛土層              | 5. 暗青灰色粘質土(褐色混じる)層  |
| 2. 旧耕土層               | 6. 青灰色粘土(やや暗)層      |
| 3. 暗青灰色粘質土(やや黒色がかかる)層 | 7. 青灰色粘土(やや暗) [溝埋土] |
| 4. 暗青灰色粘質土(褐色多く混じる)層  | 8. 黄灰色粘土層 [地山層]     |

第34図 人孔E調査区土層断面図



第35図 人孔C調査区平面図

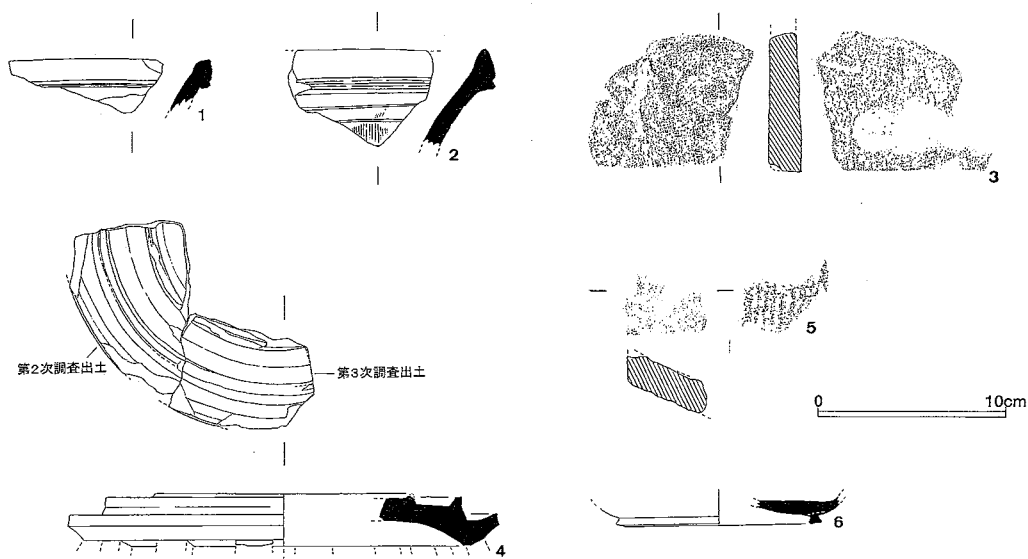


土層序

1. 現代盛土層
2. 暗灰色粘土層
3. 灰色粘土層
4. 灰色細砂層
5. 白灰色粘土層 [地山層]

第36図 人孔C調査区土層断面図





1・2・3：PSD17出土 4・5：PSD19出土 6：PSD10出土

第37図 第3次調査出土遺物実測図

体とする土層、青灰色粘土（やや暗）層、地山層である黄灰色粘土層の堆積が認められた。

このうち、青灰色粘土（やや暗）層内において須恵器片が1点出土したが、細片のため図化はできず、その時期も明確でない。また、青灰色粘土（やや暗）層下の地山層上面において、東西方向にのびる溝が1条検出された。溝は幅約20cm、深さ約5cmを測り、N76°Wの方位をもってのび、検出状況から農作業に伴い形成されたものではないかと考えられる。この溝の時期については、溝に伴う遺物の出土はなく明確でない。

### 【人孔C】

人孔C（約3.1×3.1m）の土層序は、現代盛土層以下、暗灰色粘土層、灰色粘土層、灰色細砂層、地山層である白灰色粘土層の堆積が認められたが、人孔Cにおいて遺構・遺物は確認できなかった。

### (2) 第3次調査のまとめ

第3次調査では、5か所の立坑・汚水桝設置箇所を対象として掘削を行い、人孔Cを除く4か所の調査区において遺物の包含が確認でき、人孔Eでは時期は明確でないものの溝を1条検出することができた。

平成19・20年度に実施した第2次調査においては、今回の発掘調査地点を含めて吹田操車場跡地地区全域において遺構・遺物が包含されている可能性が高いことを確認したが、今回4か所の調査区で遺構・遺物の包含を確認できたことは、この付近一帯に遺構・遺物が広く包含されていることを裏付ける成果を得たといえる。

### 3. 第4次調査の成果

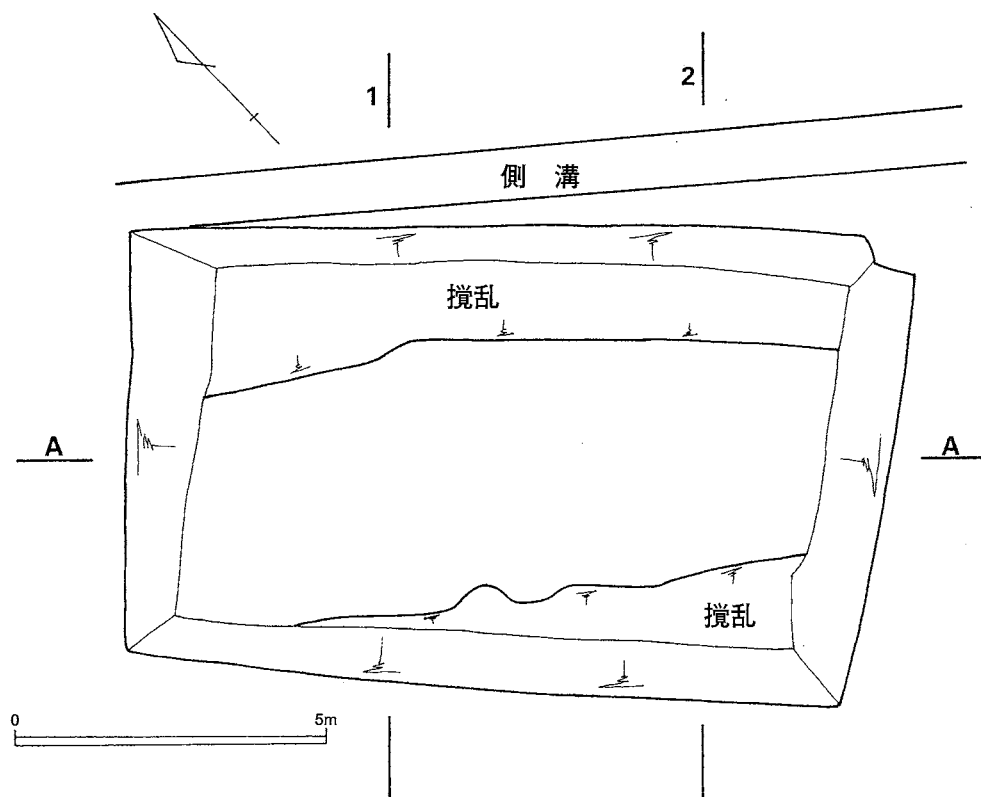
調査区を掘削したところ、調査区の東側及び西側部分については、隣接する地下道・水路の設置工事によって既に掘削を受けており、実質的に遺構・遺物を含む土層を残すのは、調査区の中央部（約41m<sup>2</sup>）のみであった。

#### (1) 土層序

調査区内の基本土層序は、現代盛土・攪乱層（第1層）・旧耕土層（第2層）以下、暗青灰色・灰色（褐色がかかる）・灰褐色・暗黄灰色等の土色をした粘質土層（第3～7層）、地山層である青灰色・黄灰色粘土層（第8層）の堆積が認められた。第3～7層については土色に違いがみられたが、これは地下埋没中に受けた水分による影響で酸化もしくは還元化した土色の変化であり、掘削状況からみると、これらの土層は本来同一のものと考えられ、今回の調査では1つの土層としてとらえて掘削を行った。また、地山層についても同様に、土色が水分の影響によって青灰色と黄灰色の2色に分かれていた。

#### (2) 遺構・遺物

第3～7層内においては、中世を下限時期とする瓦器・土師器・須恵器等の遺物が検出されたが、その多くは細片で摩滅したものであった。そして、第3～7層下の地山層上面において



第38図 第4次調査区平面図

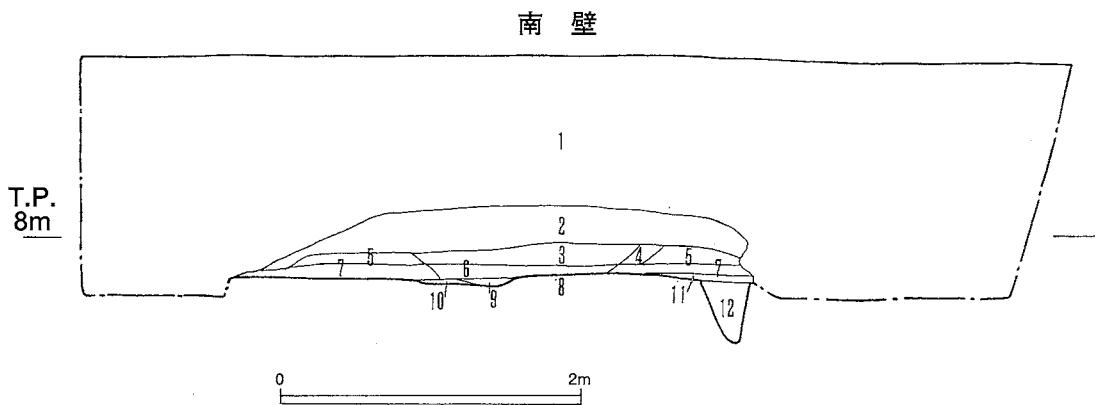
溝・ピット・土坑を検出した。

溝は14条検出した。溝は幅50cm以上を測るもの（溝1・溝5・溝6・溝7・溝12）もあったが、他は40cm未満で平均して20cm程度を測るものであった。深さは概ね2～3cmであったが、溝1・溝5・溝12で5～7cmとやや深い部分が見られた。これらの溝は、ほぼ同じ方向で平行するか直交してのびるもので、その方位は概ねN38°Wを示し、検出状況から農作業に伴い形成されたものと考えられる。

溝内からの出土遺物をみると、平安時代の黒色土器（A類・B類）や土師器釜片等を含む溝もあったが、遺物を検出した溝では概ね中世を下限時期とする土師器・瓦器片が認められた（溝1・溝2・溝6・溝7）。溝間の重複関係からみると、これらの溝の形成時期は中世である可能性が考えられる。

ピットについては16基検出した。ピットの径は、15cm前後を測るもの（P3・P14・P16）、20～23cmを測るもの（P5・P8・P10・P12・P15）、30cm以上を測るもの（P1・P2・P4・P6・P7・P9・P11・P13）があり、30cm以上を測るもののうち、P1が60cm、P2が55cm、P11が80cmを測った。

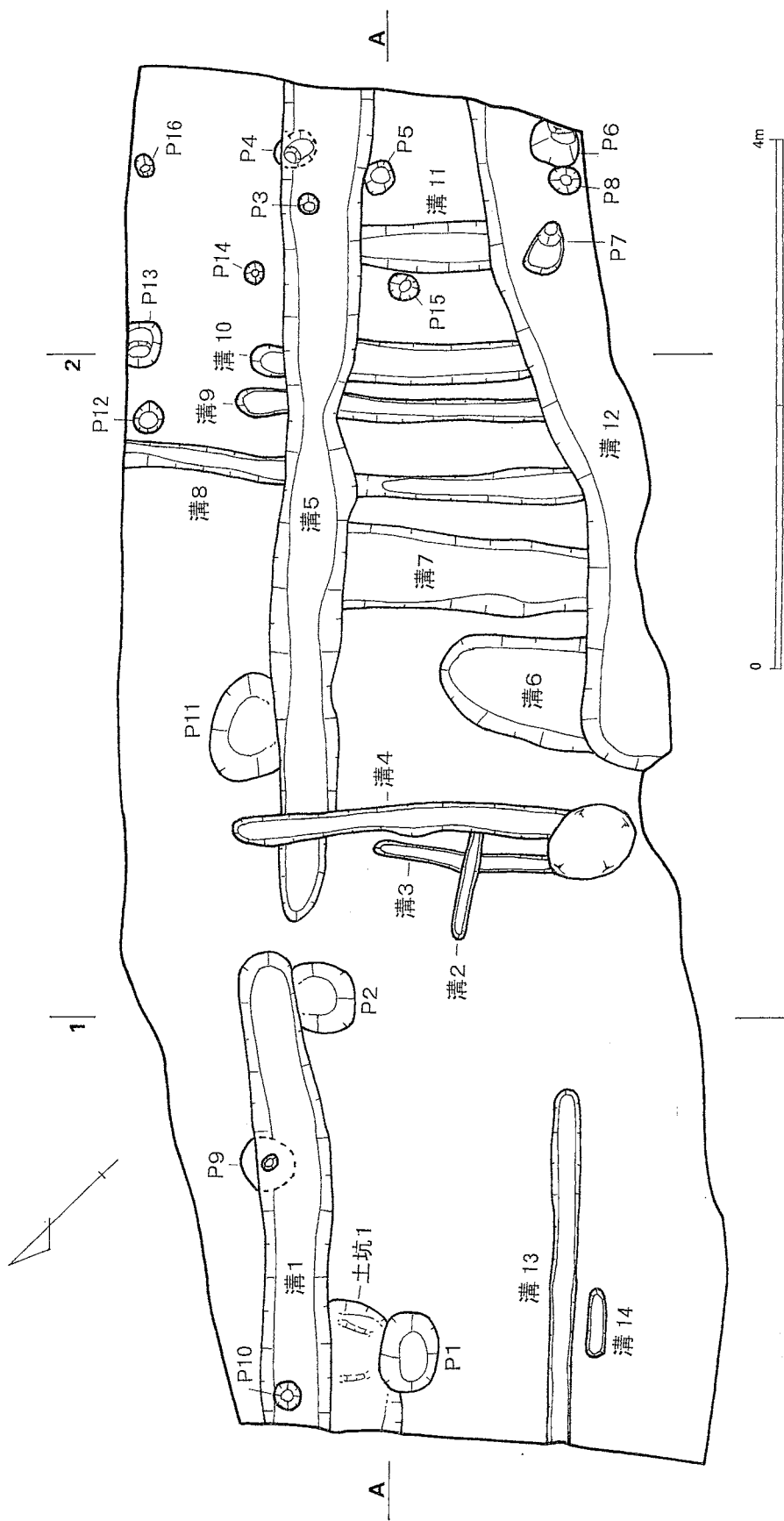
ここでは建物跡等に復元できるピットの並びは確認できなかったが、P4・P7・P9で柱痕が認められ、P4で深さ39cm、P7で33cm、P9で17cmを測った。また、柱痕は認められなかったものの、比較的深く掘りこまれたピットが4基（P3・P6・P8・P14）検出され、P3で深さ24cm、P14で22cm、P6とP8で44cmを測った。状況からこれらも柱穴の可能性が考えられ、この付近に建物跡等が展開していた可能性が考えられる。そして、これら7基のピットのうち、P14を除くピットについては溝に重複される形で検出され、このほか、P2・P5・P10も溝に



土層序

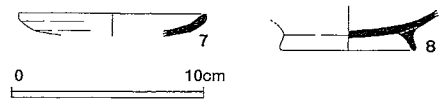
- |                       |                           |
|-----------------------|---------------------------|
| 1. 現代盛土・攪乱層           | 7. 暗黄灰色粘質土層               |
| 2. 旧耕土層               | 8. 青灰色粘土・黄灰色粘土層 [地山層]     |
| 3. 暗青灰色粘質土層           | 9. 暗青灰色粘質土                |
| 4. 灰色粘質土（やや褐色がかかる）層   | 10. 暗灰褐色粘質土 [溝5埋土]        |
| 5. 灰褐色粘質土（やや淡）層       | 11. 灰褐色粘質土 [溝12埋土]        |
| 6. 暗青灰色粘質土（やや黄色がかかる）層 | 12. 灰褐色粘土（黄灰色粘土混じる）[P6埋土] |

第39図 第4次調査区土層断面図



第40图 第4次調査区遺構平面図

重複される形で検出された。この重複関係からみると、ピットの形成時期は溝よりも古いと考えられる。そして、ピット内からの出土遺物を見ると、P1～P8において土師器・須恵器等の出土があったが、時期がわかるものとして



第41図 第4次調査出土遺物実測図

は、P4・P6で平安時代中頃の黒色土器片（A類・B類）があり、P5で古墳時代の須恵器片が検出された。この遺物の時期、そしてピットと溝との重複関係を鑑みると、ピットの多くは概ね平安時代中頃のものであろうと考えられる。

土坑については1基検出した。土坑1は検出部分で径95cm以上、深さ13cmを測った。その性格は不明であるが、溝1とP1に重複されて検出されたことと、土坑内から平安時代以前のものと考えられる土師器片や古墳時代の須恵器片が検出されたことから、土坑1の時期は、多くのピットと同様に平安時代中頃か、それより古いという可能性が考えられる。

なお、ここで検出した遺構の埋土はすべて粘質土であったが、その土色については主に暗青灰色系、灰褐色系、茶灰色系のものがみられた。ただし、遺構埋土の土色についても、覆土層や地山層と同様に水分の影響を受けており、1つの遺構でも部分によって土色に変化がみられ、埋土から遺構間の対比等を行うのは困難であった。

出土遺物については、ほとんどが細片であったことから、図化できたのは2点のみであった。7は溝1出土の土師器皿であり、8は溝11出土の黒色土器A類碗である。

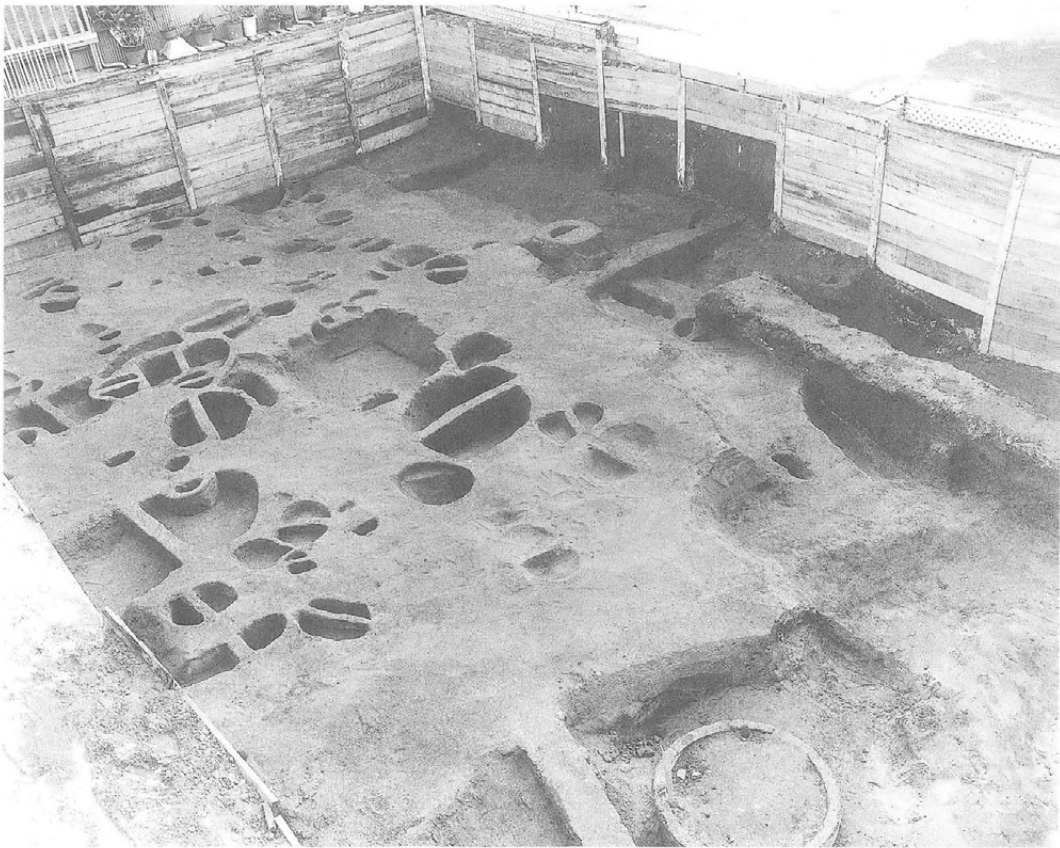
### (3) 第4次調査のまとめ

発掘調査の結果、溝・ピット・土坑が検出され、溝は中世、ピットは平安時代中頃、土坑は平安時代中頃かそれより古い時期に形成された可能性の考えられるものであった。今回の調査では、建物跡等については確認できなかったが、ピットの中には柱穴とみられるものがあり、この付近に建物跡が展開している可能性が高いと考えられる。また、溝については農作業に伴い形成されたものと考えられるが、その方位は概ねN38°Wを示すものであった。この方位は、調査地一帯の条里地割である嶋下郡南部条里の方位（N33°W）とはややずれるが、これは限定された範囲内での溝の検出であったことから、部分的なずれであるという可能性が考えられる。

以上のように、第4次調査では少なくとも2時期にわたる遺構が確認できた。主には平安時代中頃の可能性のあるピットと中世の可能性のある溝となるが、これらの調査成果からは、調査区付近に平安時代中頃に住居等の建物跡が存在し、その後、中世に耕作地になるといった土地利用の変化を読み取ることができる。



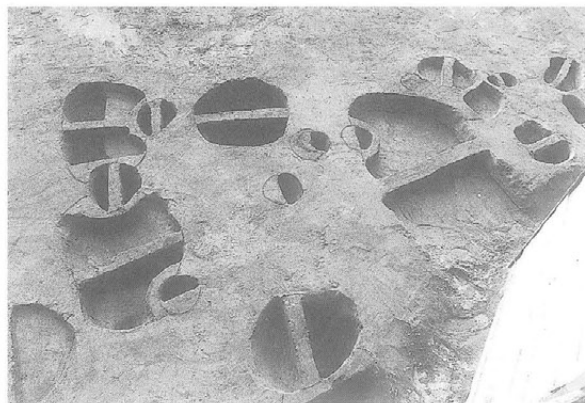
南西から



北東から



溝SD116 (南から)



ピット群 (東南から)



井戸SE61断割り (西から)



井戸SE61井戸筒 (東から)



土坑SK16断割り (西から)



落込みSX1内・瓦質土器羽釜 (34) 出土状況



地山直上・土師器皿 (29) 出土状況



溝SD116内土師器皿 (4) 出土状況





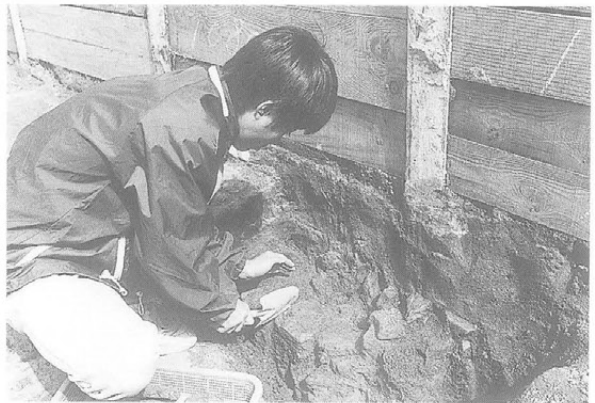
発掘調査前



ショベルカーによる表土除去作業



人力による土層掘削



土坑SK16の遺構掘り



遺構図の作製 (平面実測)



遺構図の作製 (平面実測)



遺構図の作製 (水準測量)



井戸SE61の断割り調査



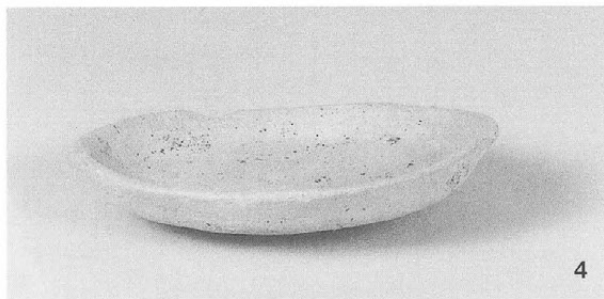
図版4 都呂須遺跡4 (土器・錢貨)



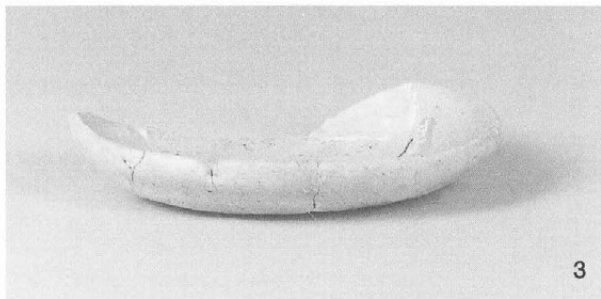
53



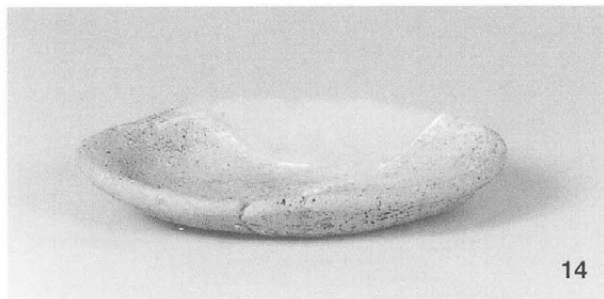
54



4



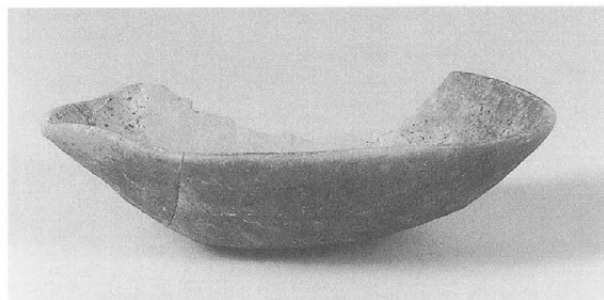
3



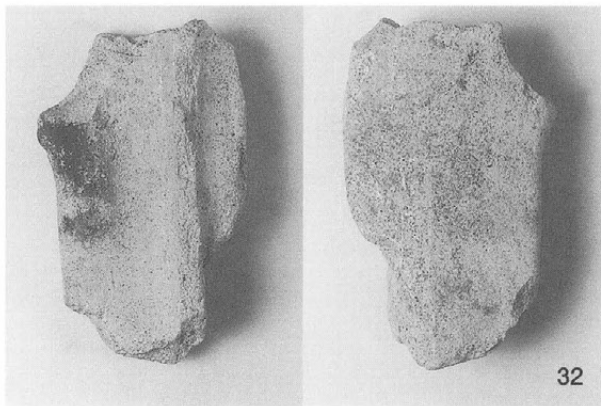
14



29



17



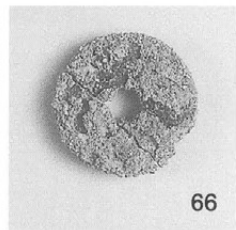
32



17



50

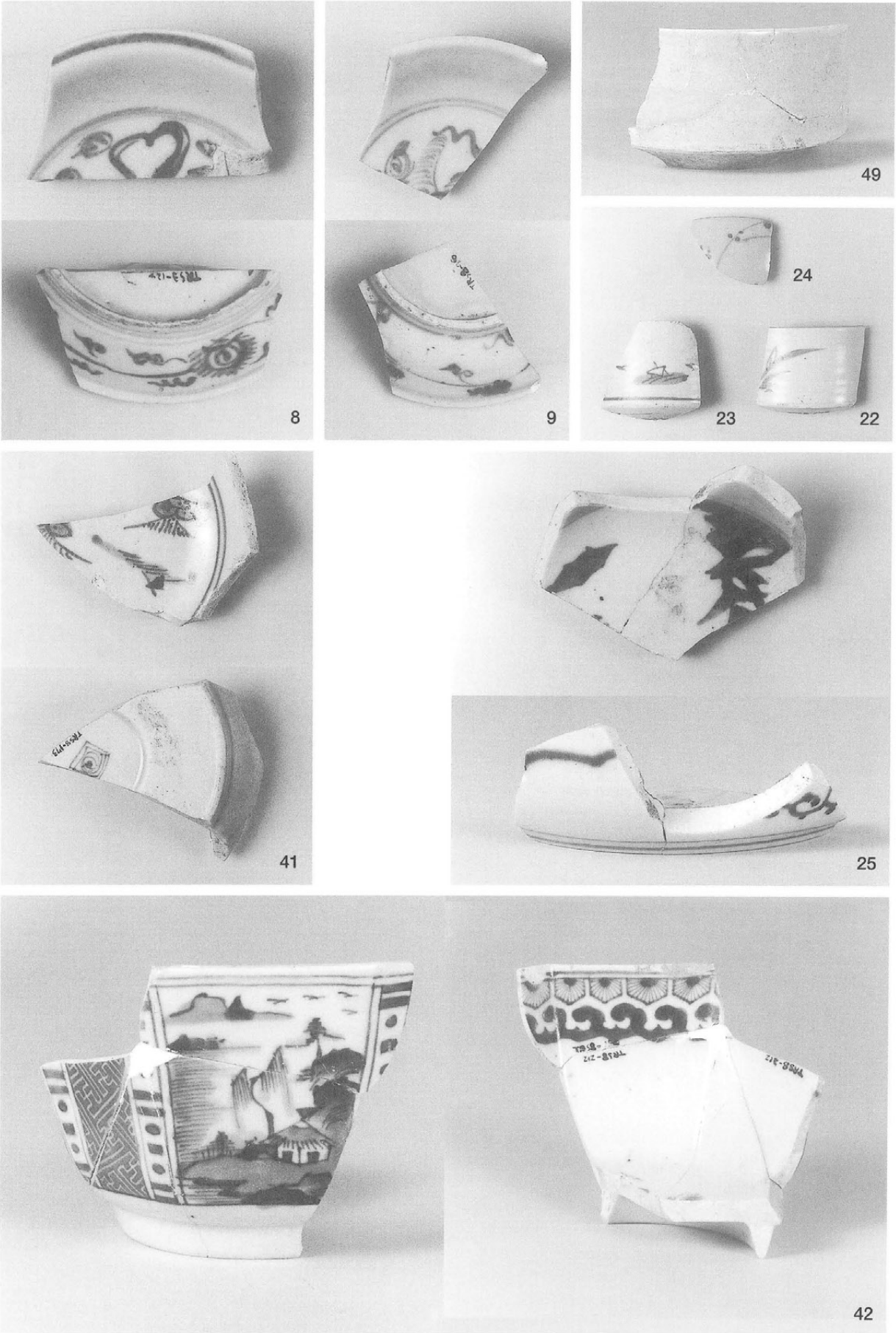


66



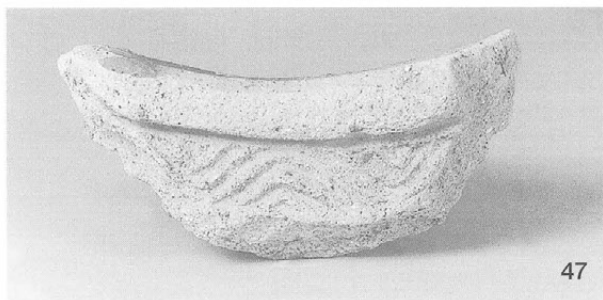
34

53・54：第Ⅳ層 3・4：SD116 14：P34 29・32・34：SX1 17：P35 50：第Ⅱ層



8・9：SD5    49：第I層    22～25：SE2    41・42：SE61

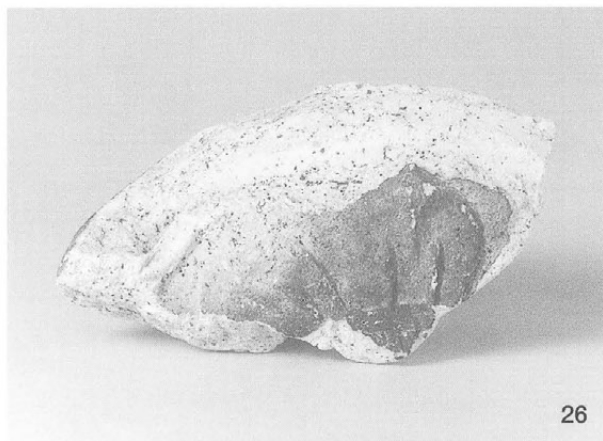
図版 6 都呂須遺跡 6 (瓦)



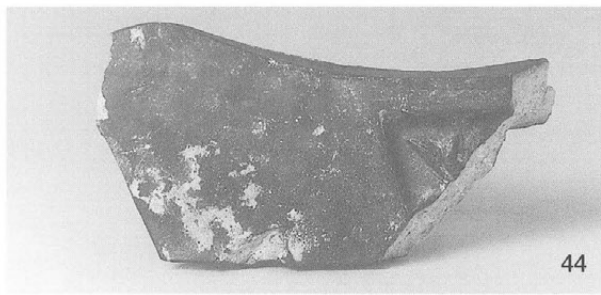
47



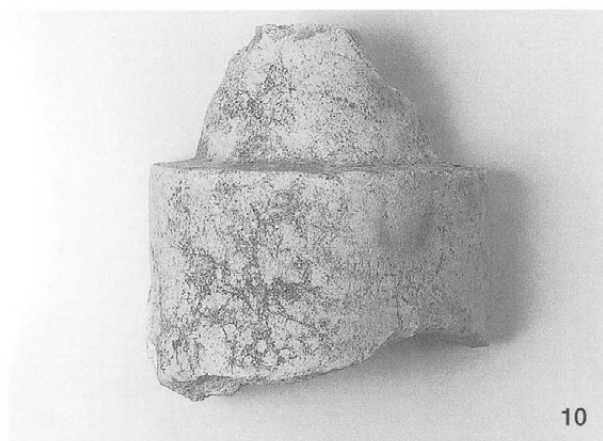
48



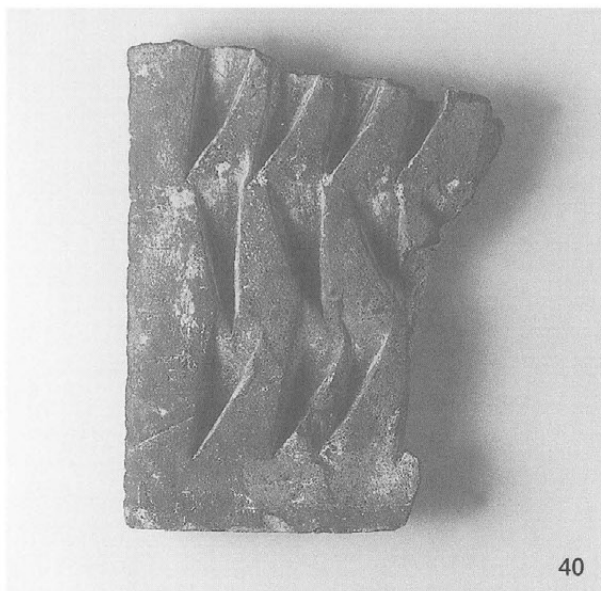
26



44



10



40



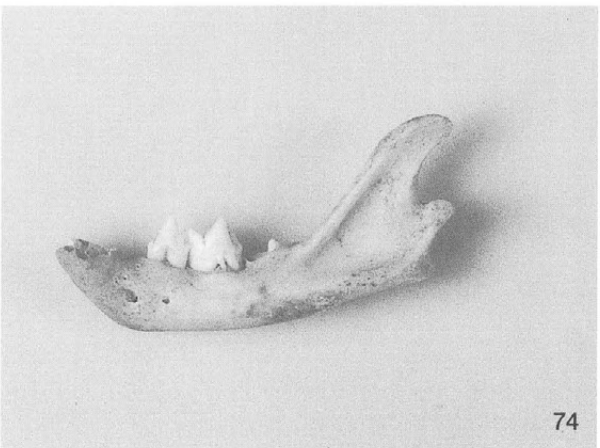
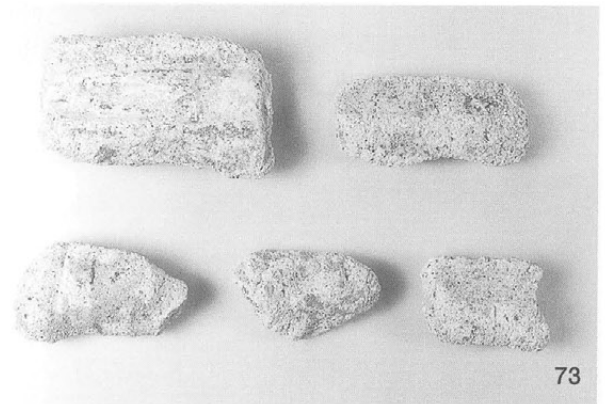
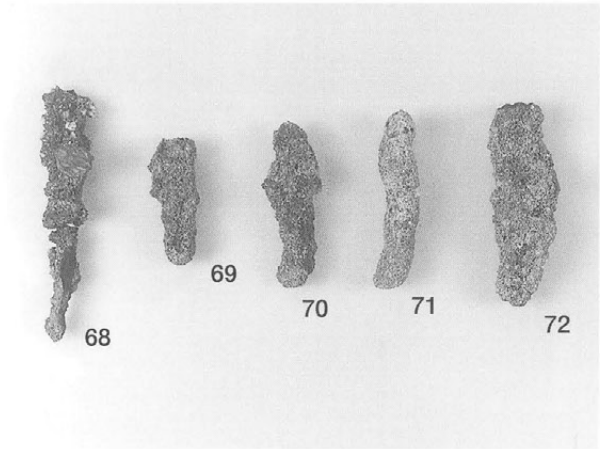
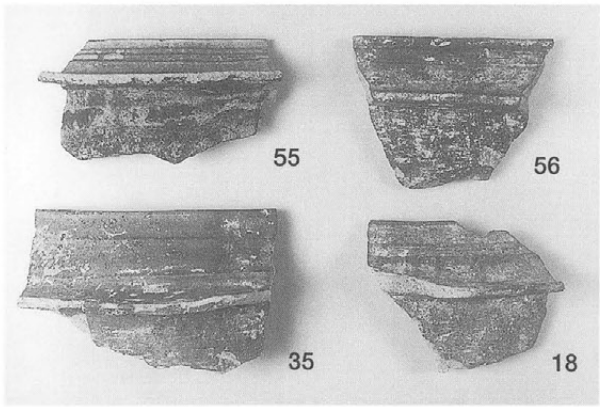
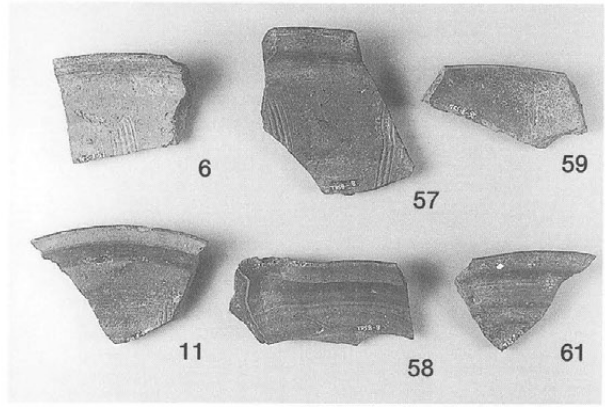
45



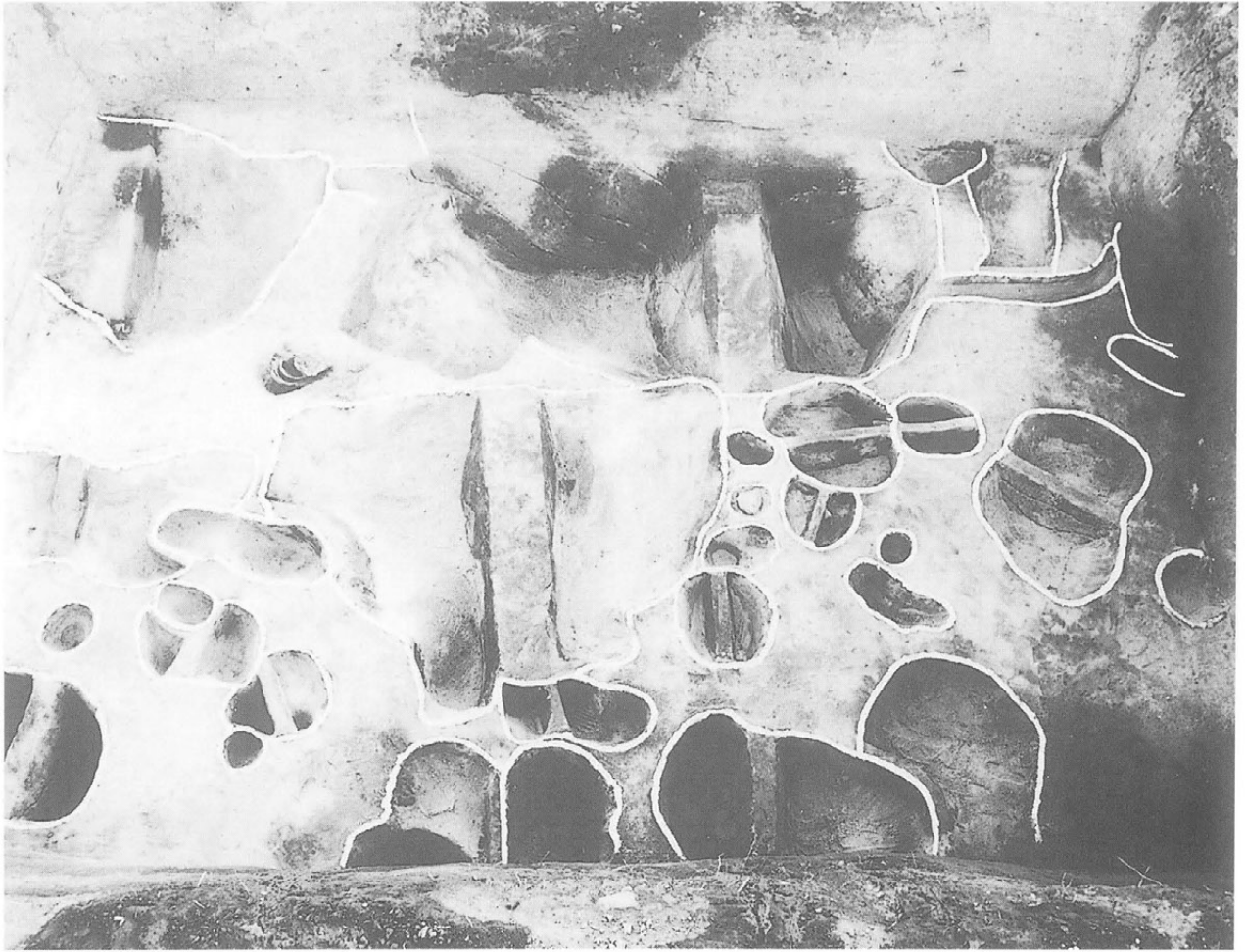
46

47・48 : SK16    26 : SE2    44~46 : SE61    10 : SD5    40 : SX1





52：第Ⅲ層 64・56～59：第Ⅳ層 6：SD5 11：SK69 35：SX1 18：SE2 67：第Ⅰ層  
 68・74：SE4 69：P26 70・71：SK70 72：P82 73：SE61 75：SK6



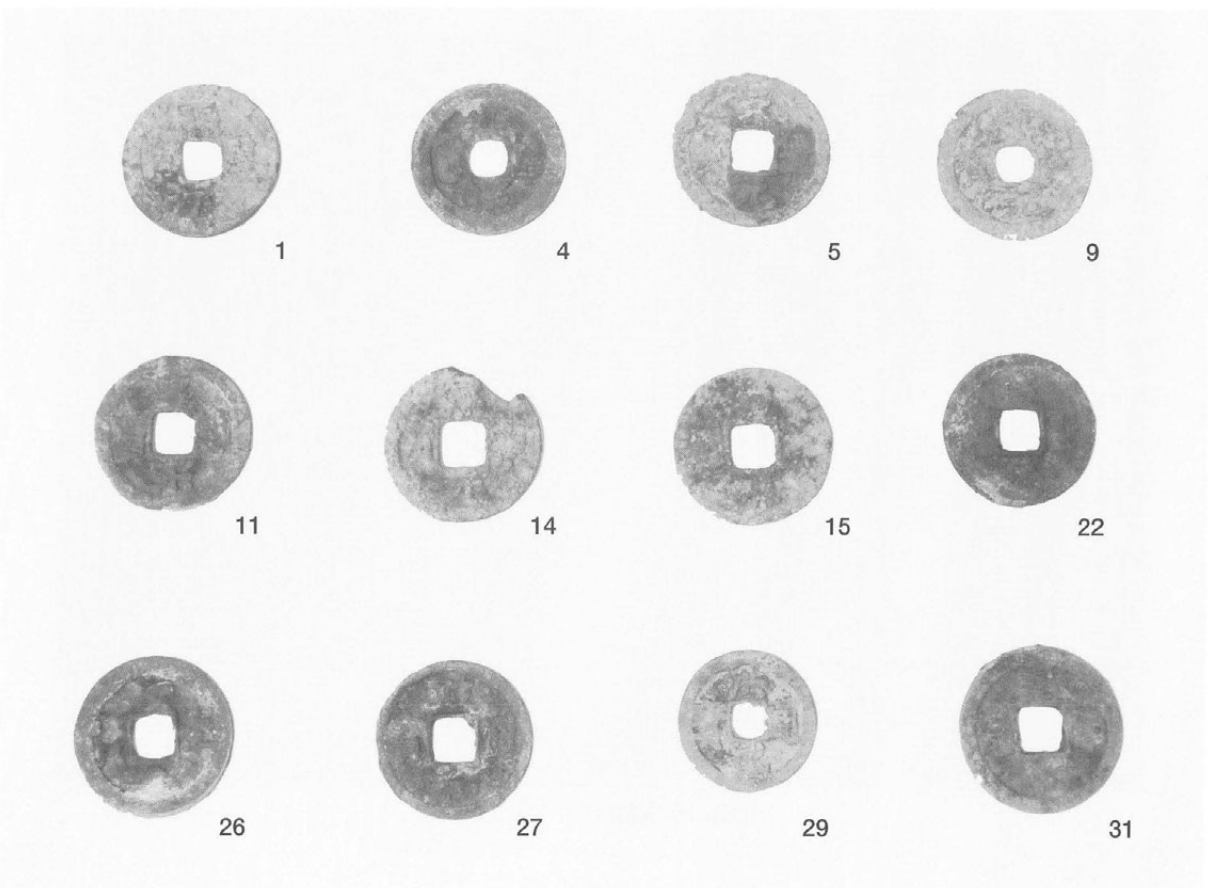
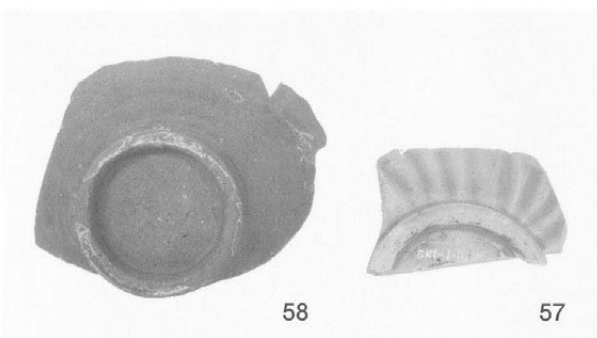
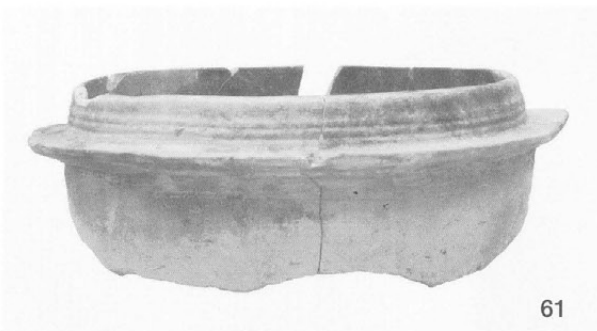
G1 (南から)



G8 (北から)



G10 (北から)







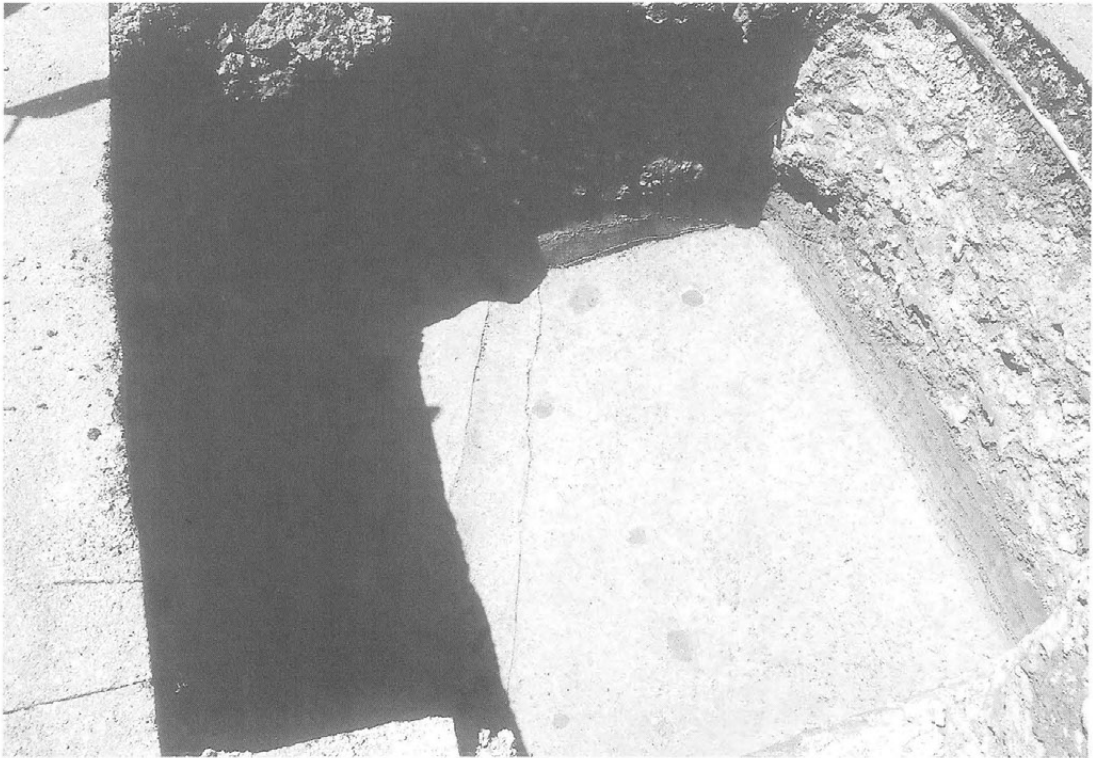
PSD17掘削状況（南から）



PSD19掘削状況（南から）



PSD10掘削状況（西から）

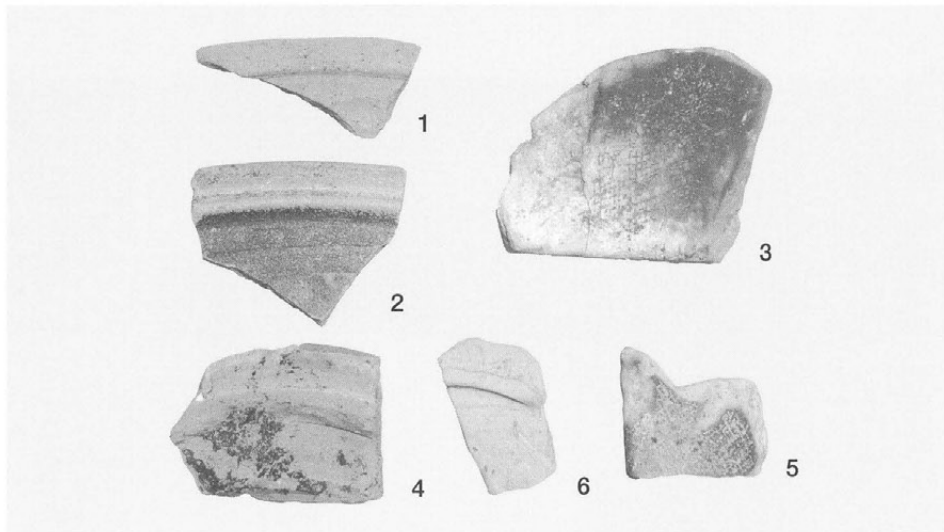


人孔E掘削状況（東から）





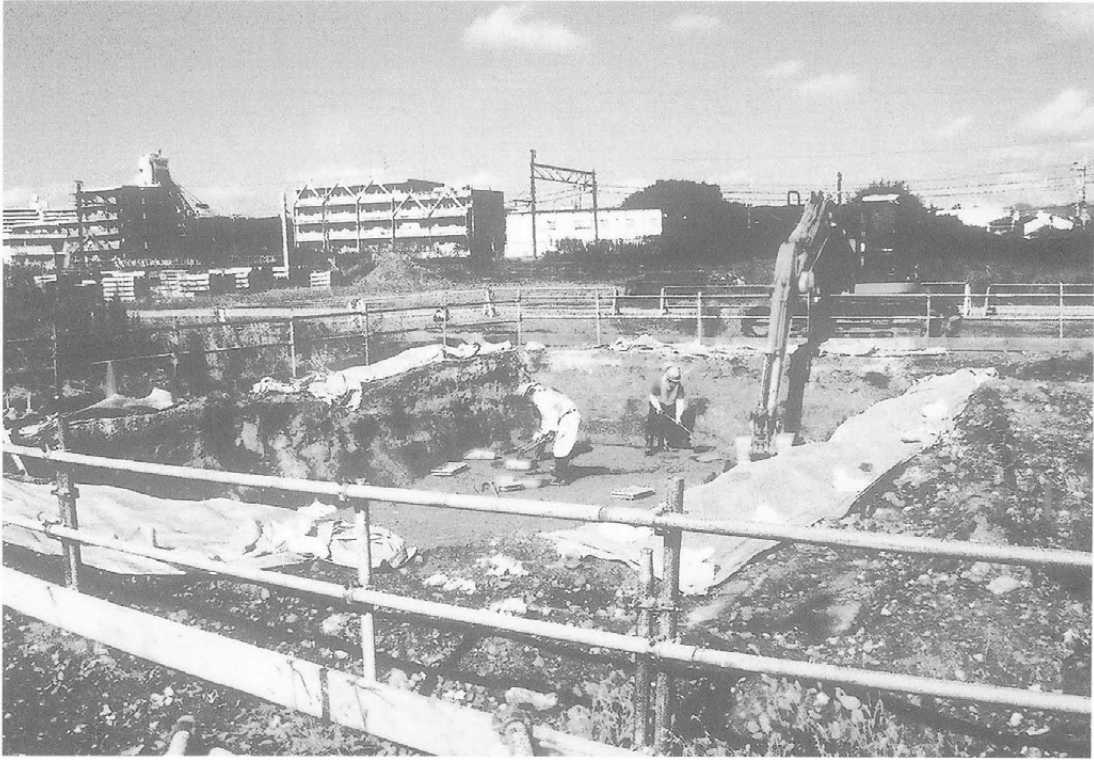
人孔C掘削状況（東から）



出土遺物



陶 硯



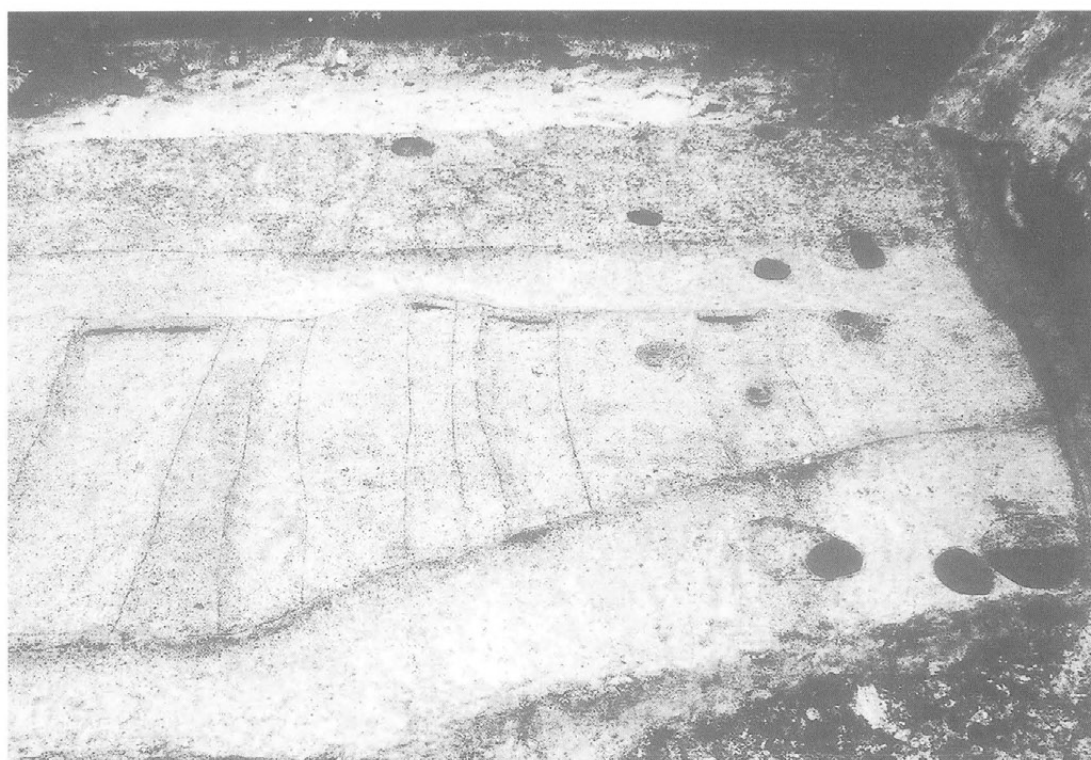
調査区近景（東から）



調査区南壁（北から）



調査区北半遺構検出状況（北から）



調査区南半遺構検出状況（西から）

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	すいたしまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしゅう1
書名	吹田市埋蔵文化財発掘調査報告集1
副書名	都呂須遺跡第8次調査 神境町遺跡第1次調査 吹田操車場遺跡第3次・第4次調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	堀口健二 増田真木 賀納章雄
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-8550 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)6384-1231
発行年月日	西暦 2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とろすいせき 都呂須遺跡	すいたしうちほんまち 吹田市内本町2-794-5	27205	91	34° 45'30"	135° 31'27"	19971006～ 19971024	128	共同住宅 の建築
しんけいちょういせき 神境町遺跡	すいたしみなみたかはまちょう 吹田市南高浜町82-1・2	27205	119	34° 45'34"	135° 31'45"	19950209～ 19950220	125	共同住宅 の建築
すいたそうしゃじょう 吹田操車場 遺跡	すいたししばたちょうほか 吹田市芝田町他	27205	73	34° 46'13"	135° 31'53"	(第3次) 20090108～ 20090116・ 20090423～ 20090601	39	下水道 の設置
						(第4次) 20090928～ 20091006		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
都呂須遺跡	集落遺跡	古墳時代 鎌倉時代 室町時代	なし ピット 土坑、溝	須恵器 土師器、瓦器、白磁 土師器、瓦質土器、陶器、青磁、青花染付、瓦、銭貨	なし
神境町遺跡	集落遺跡	江戸時代	落ち込み、溝、井戸、埋め桶	陶磁器、瓦、井戸筒、釘、漆喰、獣骨、貝殻	
吹田操車場遺跡	集落遺跡	平安時代 鎌倉時代 室町～ 江戸時代	なし なし 土坑、ピット、溝	土師器 土師器、瓦器 土師器、瓦質土器、青磁、白磁、銭貨、瓦、陶器	なし
吹田操車場遺跡	集落遺跡	古墳時代 飛鳥時代 平安時代 中世	なし なし ピット、土坑 溝	須恵器 陶硯 須恵器、土師器、黒色土器、瓦 須恵器、土師器、瓦器、青磁	陶硯の出土

# 吹田市埋蔵文化財発掘調査報告集 1

—都呂須遺跡第8次調査—  
—神境町遺跡第1次調査—  
—吹田操車場遺跡第3次・第4次調査—

平成22（2010）年3月30日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号

発行 吹田市教育委員会

この報告集は、500部作成し1部あたりの単価は557円です。